560-42
1200501512028
560
42

エト3N-29.

伊藤痴遊全集 續 第十一卷

自由黨秘錄

平凡社

昭和五一・一〇・二 帝國圖書館

H60-42

序言

一

題して『自由黨祕錄』とは、名づけたやうなものゝ、實は祕錄といふ程の事でもない。而し、昨今の政黨員から見たら、祕錄とも、いへよう。又、一般の人からすれば、確かに、祕錄として、見る事が、出來るであらう。

今から、振返つて見れば、約半世紀ほど、昔の物語であるが、此卷を通じて、當時の政黨が、どういふ狀態であつたか、又、黨員の平生が、どういふ風に、なつて居たか、といふやうな事は、相當に、現はれて居る、と信ずる。

現在の人から見たら、勿論、淺薄な、思想の動きとも見られ、あまりに根柢のない、輕卒な行動とも思はれる事が、多く有るに違ひない。けれども、其時代の政黨員は、全く、眞面目なものであつて、賣名のために動いたり、將た、自己を利する爲に、やつて居たのではない。といふ丈けは、はつきり言ひ

得るのである。

思想の系統が、どうであるとか、或は、理論上から見て、その行動が、どこ迄、受入れられるか、といつたやうな、むづかしい見地を離れて、單に、その動きだけを見て、確かに、男らしい、といふ感じは、起るに違ひない。

昨今の勞働爭議や、共産運動に、沒頭して居る人に、多く見るやうな、卑怯な心事は、少しも有つて居なかつたのが、あの頃の政黨員である。冷淡に見れば、物好のやうでもあり、熱情的に見れば、殉國の志士の如くでもある。兎に角、身を以て事に當る、といふ一事は、今日の人が、容易に、出來ぬ所である。

勞働爭議が、熱して來ると、會社の建物を破壞したり、重役の頭から、硫酸を振りかけたりして、如何にも、威勢のいゝ遣方をする者はあつても、若し、反對に、誰かに、なぐり付けられるやうな事があると、今の鬪士は、すぐに訴訟沙汰に及ぶのだから、迚も、お話にはならぬ。

自分が、なぐられて、傷を負ふ事が、忍び得ざるものとすれば、會社の建物を破壞したり、重役の頭から、硫酸をふりかける事は、矢張り、先方には、忍び得ざる事であらう。して見れば、自分が、なぐられたから、といふて、告訴沙汰に及ぶのは、卑怯千萬の事である。

無産黨の人々が、言論に、彈壓を加へられた、といふて、巡査と組打をする、見た目には、頗る勇敢

であるが、猫に引つ搔かれた程の傷を受ければ、すぐに訴訟行爲を執るのだから、弱い事、此上なしだ。

昔の政黨員が、どれ程、官憲に、壓迫を加へられて、血を流す迄に鬪つても、裁判沙汰などは、決して、起した事はない。

然し、昨今の政黨員は、此限りに非ずだ。これも、時代の推移から、人の心も、變つて來たものと思ふ外はない。

二

本卷は、痴遊全集續編の一つとして、第一回に出すものであるから、既刊の正編十八卷中に、述べてある點とは、叙述の重複を、避くべきは、勿論であるが、嘗て、それ〴〵獨立のものとして、世に公にした『國事探偵篇』と『政府顚覆篇』を收めた次第であるから、嚴密に、すべての重複を、無くする事は、困難である。たゞ全體に於て、正編とは別の味ひが、出て居る事を、諒として欲しい。

本卷の中に、多少の特色とする點は、政黨と、俠客の關係が、或程度まで、物語りになつて居る事である。陣場ヶ原の一揆、それは、明かに、無謀の擧であつたが、其頃の俠客氣質は、たしかに現れはて居り、頗る痛快を感ずる次第である。『國事探偵』篇中に、『政黨と俠客』といふ章名を、設ける筈であつたが、印刷關係で、その運びに及ばなかつた。その分は、『照山俊三』の章中に、含まれて居るものと、

承知せられ度い。

又、當時の警察官が、如何に、無理解であり、且、それを頤使する、政府の大官が、政黨に對して如何に、舊式な考へを、有つて居たか、といふ事も、本卷には、或程度まで、突込んで、述べてあるから其點にも、多少の興味はあらう、と思ふ。

赤井の事件に就て、高田の新聞に、赤木署長の事が、詳しく書かれてあり、その新聞を、著者の手許へ、送り屆けて來たが、察するに、著者の見方が、間違つて居るから、訂正しろ、といふ意味であらう。けれども、著者は、訂正の必要を認めない。赤木署長は、堀檢事に迫られて、據ろなく、赤井の一列を、檢舉したのである、といふのが、高田新聞の記事で、著者のいふが如く、赤木署長が、自發的に踏込んで、事件の搜査を、爲たのではない、といふのであらうが、これは、明かに誤りであつて、其頃の署長は、政府の命令には、絕對服從の外はなく、自由黨に對する、極度の壓迫は、政府の根本方針で、いづれの事件を見ても、署長の動きが、事件を、大きくして居るのである。

若し夫れ、高田新聞の記すが如く、赤木署長が、一種の硬骨漢であつて、赤井等に、同情を有つて居るものならば、堀檢事の無理强ひに、服從する譯はない。

故に、著者は、赤木署長の、赤井に對する、搜査行爲は、矢張り、政府の內命を含んで、それが爲に行ふたものと、見るのが正當である、と確信する。

尙、赤木氏には、日露戰後に、例の聯隊旗問題で、幾度も逢つて居るから、赤井逮捕の事情も多少は聞取つてあるのだ。

紙數の關係から、『岳南自由黨』の靜岡事件の本筋に、及び得なかつた事を、甚だ殘念に思ふが、いづれ他の機會に、讓る事にしよう。

本卷『國事探偵篇』に在る、照山は、著者も、親しくして居たし、一緒に、演說なぞもしたのだが、單に、上州人として、知つて居るばかりで、何所で生れたものか、さらに判らない。矢野鉉吉氏や、山口熊野氏の如き、上州出身の人に聞いても、やはり判らないと言つて居る位で、殆んど。之を知る便宜がない次第であるから、若し、知つて居る人があつたなら、御示敎を賜り度い。

昭和五年十月

著　者

第十一卷　自由黨祕錄　目次

國事探偵篇……三
照山俊三……五
密偵殺し……二六二
政府顚覆篇……三二九
赤井景韶の破獄……三三一
岳南自由黨……四三三
赤井の刑死まで……五七五

自由黨祕錄

國事探偵篇

照山俊三

一

明治十四年に起つた、北海道の官有物拂下事件といふのは、非常に錯雜した事情があつて、當時の政治問題としては、頗る面白いものであつた。

蝦夷といふた昔から、北海道は、海陸ともに、産物が多く、充分に開拓の手を加へたら、日本の寶庫になる、といふ説が、朝野に渉つて喧しく、遂に廟議を動かして、札幌へ、開拓使廳なるものを、新たに設ける事になつて、その長官には、黒田清隆が、任命された。

黒田は、陸軍中將として知られ、大西郷と大久保の去つてからは、薩派に於ける、第一流の人であつた。

初め、開拓使廳を、設ける事が決して、誰を長官にしやうかといふ、一段になると、容易に極まらなかつた。それには、斯ういふ事情があつて、人選に、日を費したのである。

『北海道の開拓も必要であるが、それよりも、猶ほ大切な事は、宗谷の海峡を隔てゝ、ロシヤに、相對して居る關係上、いざ事あり、といふ時には、先づロシヤの手は、此地へ延びてくるに、定まつて居るから、從つて、之れに備へる事も、考へて置かねばならぬ。

單に、開拓といふ丈けであるならば、どんなものでも可いが、對露關係を、考へ視ると、それに適當の人物を、

選ぶ必要がある。開拓と軍備、此二つを切離してかゝるか、それとも、關聯させてかゝるか、それを、先づ極めなければならぬ』

と、いふ事になつて、とに角、之れは關聯させてかゝる、との決定があつたので、其處で、之れに適當の人物は、容易に無い、といふ事になつたのである。

どうせ、其間には、今の所謂、獵官運動もあつて、摺つた揉んだの末が、黑田に持廻り、漸く極まつたのである。

開拓事業の如きは、軍將の手に、かけるべきものでなく、それにはそれで、その道の人がある。殊に、黑田といふ人は、昔の豪傑風の質で、政治には、全く門外漢であつた。開拓の事業は、矢張り政治の一つであつて、それの理解がない、と、むづかしい仕事であつた。

けれども、其時代には、開拓よりは、軍備の方へ、重きを置いてかゝり、黑田の左右には、鈴木大亮や安田定則、後に警視總監になつた、折田平内なぞいふ、役人をつけて、開拓行政の事は、專ら此人等の手に任かせ、黑田は、單に長官として、之れを監督する、といふ丈けに留めた。

軍備といふても、未だ其頃の日本は、今の如く、大きい陸軍でなく、ほんの申譯ばかりの陸軍であつたから、從つて、北海道へ、澤山の兵を、送る事も出來ず、その便法として、舊藩の士族を、送る事にした。

どうせ廢藩になれば、士族の身の振方を、つけてやらねばならず、現に『士の常職を廢して、四民皆兵の制度』を執る事には、決してあるのだから、眼の當り、澤山の士族が、飯の食へなくなるのは、知れて居る。今俄かに、戰爭請負の職を、失つた士族を、北海道へ送り、之れに相當の土地を與へ、衣食の資を、補助する事にして、平生ほ、開墾の事に從はせ、いざといふ時には、兵器を、執つて立つ、といふ事にしやう、といふのが、當時の名案として迎へられ、北海道の屯田兵なるものが、出來るのであつた。

乍併、此事は、全然、失敗に了つて、何の功もなさなかつた。何時廢めるともなく、自然に、立消えの姿になつた。

然らば、開拓の方は、どういふ事になつたか、といふに、之れは相當の效果を擧げて、日一日と、土地の開墾は擴げられ、海の方の事も、追々に手をつけて、小いながら港灣の設備も、出來てゆく。

根室や札幌には、大きい牧場も在つて、鑵詰の製造所も出來た。ビールの釀造所なぞは、相當に大きいものであつた。幌内の炭山も、その頃から、掘りはじめられた。函館を本據として、東京へ、出張所が設けられ、海路の聯絡に依つて、北海道の物産は、東京へ、盛んに送られれるやうになつた。敦賀へも定期船が通ふやうになつて、京阪の方面へ、物産が運ばれる。北海道の開發は、漸次、物になりかゝつて來た。

その代り、金を費すことも、頗る多く、十年を一期として、約八百萬圓を使つてしまつた。

二

開拓の成績が、どれほど迄に擧つたか、といふ事は、暫く措いて、とに角、十年間は、別に問題も惹起さず、無事に、すむで來たが、いよ〳〵明治十三年には、豫定の期限になつたから、猶此上に、十年間を續けるか、それとも、此一期間で打切りにするか、といふ事がむづかしい問題として、取扱はれるやうになつて來た。

黑田長官からは、内閣へ對して、斯ういふ意味の要求があつた。

『開拓の事業も、漸く眼鼻が、附いて來て、之れからが本當の仕事に、なるのであるから、もう十年間を、續けさせてくれ、費用の如きも、今後は、是迄の半額位で可からう、と思ふから、ぜひ左樣いふ事にして、貰ひ度い』

内閣側のうちには、開拓事業を打切りにしやう、といふ議論もあつて、却々やかましかつたが、何しろ、對手が黑田であるから、そこには多少の遠慮もあり、殊に、黑田が、熱心に主張するので、猶十年間を、續ける事にしやう、といふ説が、多數を占めて、それに決定しかゝる、と、意外千萬、大藏卿の佐野常民が、之れに反對して、どうして

も調印をせぬ、といふて頑張るので、問題の解決は、之れで行詰りとなつた。

佐野は、鍋島の舊臣で、大隈に比べると、藩に於ける格式は、遙に上位であつた。當時の武士としては、算勘の事にも、明るかつたし、元來が、物堅い人で舊藩の頃にも、藩中の評判は、頗る良かつたのである。

明治政府に入つてからも、その響きがあつて、大藏卿に迄進んだが、晩年は、赤十字社の建設に盡して、政治の方面からは、全く遠ざかつてしまつた。

今の赤十字社は、此人の力で、成立したものであるが、斯ういふ事業に、餘生を投げ込んで、功利の念を離れたといふ一事が、以て佐野の爲人をよく語つて居る。

閣臣のうちに一人でも、不同意を唱へて、調印を拒むものがあれば、閣議決定の段取りにはならぬ。一人の力は、甚だ弱いものであるが、斯うした場合に於ける、一人の力は、頗る強い事になるのだから、一人と雖、決して侮る可きものではない。

折角に定りかゝつた、開拓の繼續案が、佐野一人の爲めに、行詰りの形にあつた、と聞いて、本人の黑田は、いふ迄もなく、配下の者は、大騷ぎをして、運動をはじめた。

黑田は、極く良い人であつたけれど、酒癖と短氣が、いつも累をなして居た。現に、其頃の妻は、黑田に斬られて、死んだのである。

最愛の子供を亡くして、黑田は、一層、酒に親むやうになり、神明の藝妓に、馴染が出來たので、毎日のやうに、入浸つて居た。神明であらうと、新橋であらうと、藝妓は藝妓だが、世間の聞えは、神明といふので、甚だ宜しくなかつた。

一夜のこと、ぐツすり、醉つて歸つた、黑田の顏を見ると、妻は、さすがに堪忍の出來なかつたものか、

『さう、毎晩のやうに召上つては、お體の爲めにも宜しくありますまいから、ちと御控遊ばしては、いかゞで御座いますか』

『馬鹿ツ、默つちよれ』

『……』

『貴樣は、家を守つて居れば可か。己いどンの體は、己いどンが注意する』

『それでも、そのやうに召上つては……』

『默れツ』

『殊に、神明町なぞへ、おいで遊ばしては、人の聞えも惡いので……』

『だ、だ、默れツと申すに、だまらぬか』

『あなたは、お酒ばかりでなく、卑い藝妓なぞにも……』

『うぬツ、怪かしらん事を、いひ居る』

と、いつた時は、すでに刀掛けの一刀を、引拔いて居た。

女といふものは、斯ういふ時になると、存外に強いもので、黑田の前へ、ずつと、身を寄せながら、

『あなたは、それを拔いて、どうなさるのですか。御自分の惡い事を悟らずに、わたしを斬るのですか、さア、斬つて御覽なさい』

顏色は眞青であつたが、覺悟を極めて、身を投げ出してかゝる。

『よしツ斬つてやる』

『さア、斬つて下さい』

妻が、身を寄せるのと、黑田の持つ刀が閃くのと、殆んど同時であつた。

『きやツ』

と、一と聲叫ぶと、體は、二つになつて、血汐は、さツと走る。

今迄の押合ひに、家扶も家令も、次の室までは、來て居たが、豫て黑田の氣象を、知つて居るので、何と仲裁の仕樣もなく、たゞウロ〳〵して居るばかりであつた。

そのうちに斯んな事に、なつてしまつたので、始めて座敷へ、入つて來た。

『まア、御前、何といふ事をなされます』

『何ぢや、もう一度、申して見ろ』

血刀を持つたまゝ、恐ろしい顏をして、睨みつけると、皆な一と縮みになつた。

『ハツハ、、、、、さア、酒を持つて來い』

『はい』

『早くせんか』

『はい』

『これツ、なぜ立たぬ』

と、言ひ乍ら、血刀を、一と振り振つた。

『ヒエーッ』

驚いて立上るや、我れ勝ちに、次の室へ、飛出した。

さア、それからの騷ぎは、一と通りでなく、醉が醒めてから、黑田も、自分の行つた事でありながら、今更に驚いて、後悔の溜息を吐く。

當時の大警視、川路利良は、黑田の後輩であり、如何なる事でも、黑田の爲めには、努めなければならぬ關係になつて居た。震災に罹る前の、警視廳の側に、川路の銅像が在つた。警視廳も、消防署も、燒け失せたが、銅像丈けは

何の損傷もうけず、今猶ほ、殘つて居る。

大警視と警視總監は、つまり同じものであるが、昔の大警視は、今の總監よりも、遙かに權威のあつたのみならず川路の努力は、實に偉いものであつた。

黑田は、川路を呼んで、後始末を賴むことにした。流石に、川路も、これには弱つたが、しかし、之れが爲めに、黑田を傷けてはならぬ、といふ考へから、萬事を引受けた。

警視廳に、關係の醫者を、大警視の威力で、抑へ付け、世間に有り觸れた、頓死といふ名目で、こつそりと、火葬に附してしまつた。

斯うして、一時は糊塗したが、妻の實家や親類のうちに、却々、理窟をいふものがあつて、問題は、漸く喧しくなつて來た。昔からいふ、死灰再燃で、その苦情は、抑へ切れなくなつた。

結局は、黑田から、實家の方へ、少なからぬ示談金を出して、無事に治めたけれど、世間の口には、戸が閉てられず、其頃の滑稽雜誌として、日本には唯一の團々珍聞へ、此事が掲載された。

勿論、細かい記事ではなく、諷刺畫にして、黑鮪が向鉢卷で、刀を拔いて、威張つて居ると、その前に、女の幽靈が現はれて、鮪と幽靈に、事件の大要を、言はせてある。といつたやうな巧妙なものであつた。

それが爲めに、また世間の批評が起り、警視廳までが、非難をうけるやうになつた。官權の威力は、昨今のやうでなく、昔は絶對のものであつたから、終に團々社の署名人は、裁判所へ引出されて、讒謗律に依つて、處分される事になつた。

禁獄一年、罰金二百圓の言渡しをうけて、團々社の迷惑は、一と通りでなかつた。

此事があつて、それから暫くは、獨身で、日を送つて居たが、不圖した事から、深川の木場に居た、信濃傳といふ富豪と親しくなり、その娘の美貌に、すつかり惚れ込んで、無理往生に貰ひうけて、後妻に据ゑた。

歳は、二十幾つ違つて、而かも、黒田は、薩摩生れの武骨な軍人、妻になつたお瀧は、未だ十六七の娘盛り、その上に、木場小町と唄はれたほどに、美しい女であるから、全く不釣合な、夫婦であつた。

信濃傳は、嘗に木場の富豪と、いふばかりでなく、東京に於ての富豪であつた。震災前までは、淺草公園の呼物の一つであつた、花屋敷の築山の上に、高く据ゑられた、支那風の高樓は、昔の信濃傳が、榮華の夢の名殘りで、普通の町人としては、贅澤の限りを盡したものであつた。

金は、腐るほど、持つて居て、贅澤は、人の羨むほど、やつて居る。此上は、身分の高い人と、親類にでもなつて、人に誇るより外に、もう何の望みもない。其處で、正四位陸軍中將兼開拓使長官の妻に、たツた一人の美しい娘を送つたのである。

黒田の死んだ後ち、伯爵の未亡人として、お瀧は、未だ四十幾つの姥櫻、殘る色香を包んで、晩年を送らねばならなかつたのであるが、初めから滿足な結婚でなく、一種の虚榮に囚はれて、不釣合の夫婦生活、其處に深い憐みもあり、殊には、天性の美貌、妖艶な姿の、鏡に寫る毎に、人知れぬ煩悶は、重なつて來た。

昔からの言傳へ、四十後家は、容易に張り通せぬ、とある。お瀧は、いつか出入りの呉服屋と通じて、終に問題を惹起し、汚ない訴訟の結果は、黒田家から離籍して、この男と、一しよにはなつたが、思ふたほどの樂みもなく、何でも、死ぬ時分には、甚だ不仕合せであつたと聞いて居る。

二

話は、少し横道へ外れて、甚だ恐縮するが、黒田の酒癖をいふ序に思はず長くなつて、申分けがない。

大藏卿の佐野が、一人で頑張つて居る、と、その背後から、しきりに煽つて居るものがあつた。それは、例の大隈重信で、參議の職には、就いて居たが、薩長の政治家に、頭を抑へられて、不平の日を、送つて居た。所へ、此問題

が、起つて來たので、忽ち内閣の破壞を、思ひ立つて、佐野の尻押をする事に、なつたのである。

黒田は、いく度か、内閣へ坐り込むで、怒號する。佐野と、談判した時は、終に腕力に訴へて、閣員の仲裁で、漸く治まつた事さへある位ゐで、問題は、いよ〳〵紛糾するばかりであつた。

此紛糾を利用して、大阪の五代友厚が、關西貿易商會の名を以て、北海道全體の、官有物拂下を、願つて出た。

五代は、薩摩の出身、はやく米國へ渡つて、世界の事情にも通じ、明治政府が成立すると、すぐ外國事務局の判事になつて相當の働きを、示して居る。豪放な氣性ではあつたが、事業を起す時には、却々に細心な、注意も深く、三菱の岩崎彌太郎に、似た所のある人であつた。

東京の馬車鐵道や岸和田の紡績會社は、彼の力に據つたもので、大阪の築港も、彼の發意であつたのが、三十幾年後に、完成したのである。

西郷と大久保が、逝つて後ちは、彼の頭を抑へ得るものもなく、黒田の如きも、彼の前には、唯々諾々、其命ずる所に、從ふ外はなかつた。

藤田組の中野梧一を連れて、彼は、拂下願の爲めに、上京する事になつた。其頃は、既に内閣の秘密が漏れて、東京日日や、東京横濱毎日の二新聞が、さかんに反對をして居る時であつた。

今は、汐留驛と改められて、貨物列車のみを、扱つて居るが、あれは、昔の新橋驛で、小さいステーションではあつたが、東京の玄關口で、昇降客は、頗る多くあつて、いつも混雜して居たものだ。

五代は、今ま此驛に着いて、改札口を出やう、と爲る。出迎への人は、非常に多く、其一群は、彼の恩顧を、うけたものであつた。

一等待合室へはいつて、出迎のものに挨拶する事に、なつて居た。高橋驛長に案内されて、待合室へはいらう、とした時、驛長と、すれ違ひに、一人の壯士が、すツと進んで、五代の頭を眼がけて、ステツキを打下した。

さすがに、五代は油斷なく、はッと、身を開いたので、ステツキは、肩先きを掠めて、從者を打つた。

『それツ、亂暴者だ』

『はやく抑へろ』

『毆れ／／』

『怪しからん奴だ』

と、口々に叫び乍ら、壯士の左右から迫つた。

『騷ぐなッ、我輩は、天下の壯士、照山俊三といふものだ。天に代つて、奸賊を戒むるのである。邪魔をする奴は、片つ端から、ふみ殺すぞ』

歳は、未だ若いやうだが、赭顏白髮の壯丁、却々、强さうに視えるから、容易に手を出すものもなく、只だ徒に、がや／／いふのみであつた。

五代は、疾くも驛長室へ、連れ込まれた。跡は、壯士の獨舞臺。當るにまかせて、近寄るものを打つ。その勢ひは素晴らしいものだ。

巡査が五六人、かけつけて來て、漸く壯士を抑へて、交番所へ引入れた、その跡から、尻尾のない野次馬が、ゾロゾロついてゆく。

『どうです、强いもンですな。巡査が、あれ丈けかゝつて、漸く抑へつけだンですぜ』

『あなたは、はじめから視て居たのですか』

『へエ、はじめから視たが、すばらしいもんでした』

『全體、どういふ譯なンでせう』

『何でも、毆られたのは大阪の金持で、惡い事を企んで居るのが、知れたもンですから、彼の壯士が、怒つて毆つた

のださうです』

『はゝア、さうですか、而て視ると、人の爲めに、毆つたのですな』

『なアに、國の爲めに、やつたンです』

『國の爲め……』

『彼の金持が、役人に、金を貸附けて、何か大仕事を、企んで居たのが判つたのださうですが、つまり、政治家と、グルになつて、うゝまい事をやらう、としたのでせう』

『さうして見ると、あの壯士は、世直しの爲めに、やつたんですな』

『まア、左樣です』

『偉いもんですな』

『偉いもんです』

どこで聞いたのか、物知り顏に、說明するものがあり、それを聞いて、割引なしに信用して、感嘆して居るものもある。

此壯士は、照山俊三といふて、此事件があつてから、人に知られたのである。一時は拘引されたが、五代に、傷は負いて居ないので、警察限りの處分で濟んだ。

五日間の拘留處分がすむ、と、すぐに照山は、新聞社を訪問して、事件の顚末を、話して歩いた。

四

照山が、警察署へ、引ツ張られて、掛官の訊問に應じた所に依れば、

『北海道の人民は、內地のものが移住して、第二の故郷を開くつもりで、非常な苦辛をして居る土地である。若し、

官有物を拂下げるなら、それ等の人民へ、許すのが當然であつて、何等の緣故もない、關西貿易商會なぞへ、拂下ぐ可き性質のものではない、と信ずる。殊に、其商會なるものは、五代友厚の所有に屬し、此拂下げについて、一夜づくりに、つくり上げられたものである。拂下げの名義は、商會としてあつても、その實は、五代が拂下げるのである。

また、五代の背後には中野梧一も居るから、つまりは、薩長の政商に、薩長の政治家が、不相應に安い、代價を以て、國家の財産を、拂下げる事になるのだ。

さうした、不義不正を、少しの故障もなく通させては、國家の爲めに、甚だ宜しくないから、先づ五代に、鐵拳の制裁を加へて、その反省を促がし、それから、追々に、關係者を懲してやるつもりであつた』

と、いふのであつた。

其頃の新聞は、昨今のやうに、誇張的のものでなく、雜報の如きも、極めて淡泊に、書流すだけの事ではあつたが事柄の面白い爲めに、照山の記事は、存外に、評判が高く、新聞の社說は、よく讀めない人でも、雜報は讀むから、官有物事件についての注意は、之れから深くなつて來た。

參議の大隈重信が、大藏卿の佐野常民の背後に匿れ、此問題を利用して、內閣を混亂させやう、と謀つた。それが、圖星に中つて、容易に拂下は、認可されぬ狀勢に、なつて來たが、それにしても、たつた一人の佐野が、どう頑張つた處で、つまりは力負けして、拂下げられるに極まつて居る。萬一にも左樣なつては、折角の問題も、つまらない結果になるから、そこで、大隈が、一と奮發する事に、なつたのである。

毎日新聞の沼間守一と、日々新聞の福地源一郎は、平生から大隈邸へ、出入して居て、少なからず援助を、得て居たのみならず、大隈の意見は、內閣に行はれないのでも此二つの新聞を通して、世間には、傳へられて居たのだ。

大隈は、此二人を呼んで、官有物事件の秘密を打明け、金まで與へて、大に世間に傳へさせる事にした。それから、

二新聞の論調は、實にはげしくなつて來て、非常に此問題を、大きくしたのである。

それと同時に、福澤諭吉が、大隈と握手して、之れを援ける事になつた。慶應義塾で、教へた門人のうちから、辯舌にすぐれたものを選んで、地方へ遊說に出した。その結果は、さらに一層の好果を收めて、誰れ知らぬものもないほど、官有物事件は、一般に知れ渡つたから、もう曖昧なうちに認可する、といつたやうに事は、出來なくなつた。

北海道の住民が、山本忠禮といふ人、外十數名の代表者を、東京へ送つて、拂下げに反對する、運動をはじめた。此機會を逸してはならぬ、といふので、福地と沼間が、新富座に、演說會を開いた。辯士には、肥塚龍、益田克德、高梨啓四郎の三人が加はつて、空前の盛況を極めた。

同時に、土佐から、板垣退助が、乘出して來た。先づ大阪の今宮に於て、演說會を開いた。

『斯うした、惡い事を、政治家が爲ないやうに、平生から、能く監視するのが、國會の效能であつて、之れは一日も速かに開くべきものであるが、政府の人達は、しきりに反對して居る。それを、國民が、默つて居る、といふ法はない』

と、いふやうに、國民に對する、激勵の演說をしながら、東海道筋を、押して來る。

拂下げに反對は、全國の輿論となり、國民全體の聲となつて、素晴らしい勢ひに、なつて來た。殊に、板垣の遊說は、最も利目があつたことは、いふ迄もない。

板垣が、いよ〳〵東京へ着く、といふ日が定まると、上野の精養軒へ、有志者が集まつて、その歡迎をする、といふ事になつた。

殊に、大隈派のものは、多く之れに加はり、尾崎行雄の如きは、統計院權少書記官といふ、役人の肩書があるにも拘らず、新橋まで出かけて、板垣を、迎へた位である。

上野の精養軒へ、集まつた人の氏名を、試みに擧げて見れば、

西園寺公望、中島　信行、齋藤修一郎、藤田　茂吉、尾崎　行雄、福地源一郎、須藤時一郎、豐川　良平、小室信夫、末廣　重恭、田口　卯吉、肥塚　龍、益田　克徳、大石　正巳、沼間　守一、高島小金次、田中　耕造、等の四十餘名であつた。

昨今の人が、此氏名を見たら、意外の感にうたるれのであらう。福澤の交詢社と、沼間の嚶鳴社とが、その中堅になつて、大隈直系の役人が、之れに加はつて居るのだ。

西園寺や中島の事は、今改めていふ迄もないが、齋藤は、後に農商務次官に、なつた人で、晩年は、頗る不遇であつたが、一時は評判の人物であつた。藤田は、大分縣人で、報知新聞の主筆であつた。日本橋區選出の代議士になり文章も巧く、演說も良かつたが、その人格が、すぐれて居たので、同人間には、重きをなした人である。尾崎、大石、福地、田口、肥塚、沼間、末廣の事は、あまりに世間へ、知れすぎて居るから省略するが、豐川や須藤が、此會合に加はつたことは、何人も意外に感ずるであらう。

益田は、今の三井の元老、益田孝の弟である。田中は、フランス學者で、有名な人であつた。小室は、丹波の生れであるが、文久年間に、足利尊氏等三代の、木像の首を晒物にして、幕府に睨まれたので、一時は、阿波に走つて後ち、イギリスへ行き、歸朝の後ちは、實業界に投じ、晩年は、三井物産の重役で終つた。

斯うした、人達の生涯を、批判的に視てゆくうちに、私は、深い感慨に沈むことがあり、また、其子孫の身の上について、いろ〳〵の紛訌の起るのを視て、『名人に二代なし』と、昔の人のいふたのを、實に萬代不易の名言だ、と思ふことがある。

現に、此事件に關係ある一人、開拓使廳の書記官として、黑田の顧問格であつた、鈴木大亮の子供が、最近に女の事から、兄弟喧嘩して、血塗みれ騷ぎを演じた、新聞記事を見た。同時に、高島の子供が、父の遺産相續について、辯護士と、汚ない爭ひをして居る、新聞記事も見た。鈴木と高島は、此事件に對する立場は、全く異つて居たが、いづれにしても、事件に關係のあつた事は、同じである。挪下げに同意した、鈴木と、それに反對運動した、高島と、どちらも、身分が出來て、鈴木は華族になり、高島は、大倉の婿になつて、巨萬の富を積み、自分等の晩年は、幸福に送り得たが、その子供は、揃ひも揃つて、汚ない爭ひに、新聞の雜報を、賑はして居るのだから、實に不思議と、いふ可きである。

五

當時、天皇陛下は、東北御巡幸中であつたから、御還幸を待つて、御聖斷を仰ぐ、といふ事になつた。

元老院の議長は、有栖川宮殿下であつた。議官も、立派な人ばかりで、是れならば元老院として、充分に權威が保てる、と、思はれるほどのものであつた。

新富座の演說が響いて、挪下げの可否は、元老院の議にも上つた。その前から、新聞では讀むで居たが、左迄の事とも思はず、且は、元老院が、左樣した問題には、觸れ度くない、と考へて、努めて避けて居たのだが、二三の議官が、こつそり、演說を聞きに行つて、是れに動かされたのが始まりで、終に之れが、問題になつたのである。

其前から、內閣に於ては、國會開設の議が起つて、準備期間を、幾年位にしたら可いか、といふ事が問題に、なつて居た。

伊藤は、少なくも十年位は、視て置く必要がある、といひ、大隈は、三年位で充分だ、といひ、此兩說を中心として、しきりに討究されて居たが、容易に解決されなかつた。けれども、國會の開設については、誰一人として反對するものは、なかつたのである。

時勢の進運は、頑冥な政治家を動かして、國會開設の止むを得ぬ、といふ事を、認めさせたのであるが、例の準備年限の定まらぬうちは、民間のものには秘密にして、閣議の內容を漏らさぬやうに、各自に於て、充分に注意する、

といふ約束になつて居た。

大隈は、そんな事に頓着なく、有栖川宮殿下に、拜謁した際、

『政治家の行爲を監督して、秕政を取締るには、板垣の唱へて居る、國會を、一日も速に開設するのが、急務であります』

と、いふ意味の事を言上して、閣僚との約束を裏切つたばかりでなく、國會開設の意見書を、内閣へ出したり、世間へ、其意見を公けにしてしまつた。

薩長の政治家は、火の如くなつて、怒り出した。

『斯うした、悖德の政治家とは、席を同じうする事は出來ぬ。國民が、要求して居る、國會の開設を、自分一人で、唱へて居る如く見せかけ、他の閣僚は、恰も國民の敵であるかのやうに、國會開設の功を、自分に歸せしめやう、と計る、卑劣なる行動に對しては、もはや、勘辨相成らぬ』

とあつて、大隈彈劾の氣運は、なか〳〵旺んに、なつて來た。

陛下は、東北の御巡幸を終り、御歸京あらせられた。その夜のうちに、御前會議が開かれ、翌日は、官有物拂下は、不認可となつた。

それから引つゞいて、大隈と、閣僚の爭ひがあり、伊藤博文と西鄕從道は、大隈を訪うて、辭職勸告をする。井上馨は、御前へ出て、大隈彈劾の奏請をする。内閣のゴタ〳〵は、殆んど其極に達した。

かくて、大隈は、遂に諭旨免官となり、其事は公けにされた。

同時に、國會開設の大詔は下つた。明治六年以來、板垣に依つて、國民の要求して居た。國會は、明治二十三年を期して、いよ〳〵開設される事になつたのである。

此大詔は、明治十四年十月十二日に下つたのであるから、二十三年迄は、十年間の期間がある譯で、その間に、憲

法も制定され、國會に對する、一切の法律も、作られる事になるのだ。それよりも大切な事は、一般の國民をして、國會に對する、知識を涵養せしめる、といふのが、最も急務である、といふ事になつて、茲に準備政黨の計畫が、板垣派の民權家に依つて、企てられる事になつた。

（註）明治天皇の御思召は、十年間を、準備期間と見られたばかりでなく、二十三年は、紀元二千五百年に當るから、それ等の事情も、聖慮のうちにあつたものと、思はれる。

六

大詔の下つた日、それを知らずに、國會開設期成同盟會の連中は、東兩國の中村樓に、集會を開いて居た。

座長は、河野廣中であつたが、數十名の有志者は、いづれも政府の攻擊をして、國會開設の必要を論じ、之れから先、どういふ方法を以て、政府へ迫らうか、といふ事について、研究して居たのである。

所へ、大詔の下つた事が判つたので、事の意外に、一同は驚いて、しばらくは、互に顏を見合せたほどである。

が、とに角、多年の希望が充たされたのであらから、誰にしても滿足はしたのであるが、之れから政府へ攻かゝらう、とした所へ、大詔の下つた爲めに、問題の根本は、之れで解決されてしまつたから、ちよツと、跡の考へは、出て來ないのであつた。

官有物拂下の不認可といひ、また國會開設の大詔といひ、いづれも民論の、容れられた結果であるから、板垣派の鼻息は、實にすばらしいものであつた。

翌日からは引つゞいて、國會開設に對する、準備の相談に移つた。十年といへば一昔であるから、此十年間は、最も大切な十年間で、政府の方にも、それぞれ準備は、あるであらうが、民間の方でも、充分の覺悟をもつて、出來る丈けの準備を、仕なければならぬ。假りに、國會は開けるとしても、その間に、政府が、どういふ政治を布くか、そ

れについて監視も、怠る事は出來ぬし、國民の政治思想も、大に涵養せねばならぬ、憲法についても、議院法についても、民間の希望は、遠慮なく主唱して置く、必要がある。

斯ういふ風に、考へて來ると、ナカ〳〵爲す可き事は多くなつて、今迄よりは、一層の努力を要する、といふのが各人の一致した、意見であつた。

國會請願運動の爲めに、全國の有志者は、一致の行動を、執つて來たが、その人々を、一つに纏めて置く必要もあり、どうしても、政黨をつくる外に、これ等の目的を、達する方法はない、といふ事になつて、政黨組織の相談はズン〳〵進んで行くのであつた。

此相談の、進んだ末に、いよ〳〵結成されたのが、自由黨であつて、是れが我國に於ける、政黨の始祖である。

（註）自由黨の名は、既に前年から在つたが、完全な政黨としての、自由黨は、此時に起つた、と見る可きである。

然るに、自由黨が組織されると、今迄の同盟から、沼間守一が、脱けてしまつた。從つて、沼間と、同じ立場に、在る人はすべての自由黨には、加はらぬ事になつた。

それから、猶一つ、面倒な問題の起つたのが、首領には、誰を戴くか、といふ一事であつた。

此時分から、板垣と、後藤象二郎の二派があつて、その折合は、容易に付かなかつた。板垣を押立てゝ、首領にしよう、といふものがあると、己れは、後藤でなければ、承知出來ぬ、といふものがあり、その暗鬪は、日一日と、はげしくなつて行くので、幹部のものは、非常に苦心して、それを纏めよう、とはするが、實は、幹部のうちにも二派あつて、大石正巳の如きは、極力爭つて、後藤を、擔ぎ廻つて居るのだから、とても、無事にまとまる可き、見込みはなかつた。

板垣といふ人は、几帳面な性質で、筋の通らない事は、決して爲ぬと、いふ風であつたが、後藤は、それと反對に

大概な所で、押付けてゆく、といふ遣方で、どちらへでも、融通の利く質の人であつた。

板垣の器局は狹いが、後藤の抱擁力は、可成りに大きかつた。萬事が、理窟詰の板垣と、何事にも、放漫な後藤とその性格は、非常に異つて居るが、どういふものか、兩個の交情は、頗る親密であつた。

此首領爭ひが、若し、ひどくなれば、折角の自由黨も、二分されて了ふから、それを恐れる人達は、しきりに奔走して、兩派の折合を付けよう、として居るが、容易に折合は付きさうもなく、分裂の兆候は、大分明かになつて來た。

今日も、中村樓の一室で、後藤を、擔いで居る連中が、大石を始めとして、十數名集まつて居た。所へ、不意に後藤が、やつて來た。

『諸君は、我輩を、自由黨の總理に推薦する、といふて、御盡力下さるさうであるが、それは、甚だ迷惑に感ずるから、やめて貰ひたい。

我輩と板垣は、眞に竹馬の友であつて、その交情は、他人が、窺ひ知る事の、出來ぬものがあり、互に相扶けて今日に至つたのである。若し、兩人の間に、總理の爭ひがあつたなぞ、といふ事が、世間へ知れては、我輩の面目は、丸潰れになるのみならず、板垣に對しても、相すまぬ次第である。殊に、板垣は、明治六年以來、絶えず國會開設の爲めに、盡力して居るが、我輩は、中途から休むで居たので、板垣とは、大に異ふ所がある。

今や、國會の大詔が下つて、茲に準備政黨をつくる、といふ場合に、板垣を除いて、總理に戴く可き人物は、他に無いと思ふから、諸君は、宜しく板垣の爲めに、御盡力あらんことを希望する。

諸君が、飽迄も、我輩を推薦する、といふなら、我輩は、同志の列を脱するつもりであるから、左樣、御承知を願ひ度い』

と、いひ出したので、之れには後藤派も、頗る弱つた、肝腎の本人に、斯ういひ出されてはもはや擔ぐ勇氣もなくな

る。

後藤派が、手を引いて、板垣へ贊成すれば、それで、總理は決まる譯だが、此時分に、板垣は、旅行中で、東京には居なかつた。

北越方面を廻つて、仙臺へ出て來る、と、東京からの電報が屆いた。

『閣下を、自由黨の總理に、戴く事になつた』

と、いふのであつたが、板垣は、之れに對して、返電をうつた。

『我輩は、其任に非ず、寧ろ後藤を推薦するのが、當然である』

於、此、同志は、此電報を、後藤に見せたので、後藤は笑ひながら、

『板垣は、律義な男だから、斯ういふて來るのだ。何でも構はず、板垣を、總理に定めて、發表してしまへば宜しい。跡は、我輩が引受ける』

と、答へて、いよ〳〵板垣は、自由黨の總理と、いふ事に決した。

副總理には、中島信行を推して、後藤は、常議員會長となつて役員の割當もすむで、茲に自由黨の組織は完全に終つた。

七

當時の政界が、どんな狀況であつたか、それを一通り、いふて置く必要がある。

昨今の政黨と、其頃の政黨とは、全然、異つて居た。外交や內政の事について、それ〴〵に政綱をつくり、主義や主張を明かにして、政黨を組織したのでなく、明治廿三年の國會開設に、備へる爲めの政黨であつて、未だ憲法も、出來て居らず、一院制か二院制かさへ、よく判らなかつたのであるから、政治の主義や方針と、いふ事よりは、却て其點についての研究が、先きになつて居たのである。

それから、猶う一つは、薩長藩閥の政治家が、政權や兵力を利用して、我儘勝手を、やつて居るので、先づ其勢力を殺ぎ、藩閥の專横を制してやらう、といふ事が、最も力の入つた、目的であつた。

併し、大隈の率ゐて居る、改進黨は、同じ目的は、持つて居ても、自由黨の、それとは大分に違つて居た。

イギリスの書物を、多く讀んで、自分等は、イギリスの政治家の如く、妙に氣取つて、理論の一點張りで、政府に當らうとして、居たのが、改進黨の人達であつた。

單に、そればかりでなく、改進黨の人達は、大概が、役人上りのもので、どことなく、官僚の氣分があり、自由黨の野人振りとは、格段の違ひがあつたから、其折合も、甚だ良くなかつた。

從つて、自由黨員の爲る事には、すべて非難を加へ、其所說についても、多く反對して居た。

『自由黨員は、過激粗暴の輩であるから、俱に談ずるに足らぬ』

と、いつたやうな事を、世に公言して、憚らぬ位ゐであつた。

されば、政府が、自由黨を、眼の敵のやうに、するばかりでなく、改進黨の方でも、自由黨を、仇の如く視て、ひどい攻擊を、加へて居た。

其間に狹まつた、自由黨は、前後に、敵を控へた形で、政府を、正面にして鬪ふと、同時に側面には改進黨を、對手に迎へて、さかんに爭つて居たのである。

元來、自由黨へ、集まつて來た人は、多く舊藩の士族で、其他には、中産以下の農民であつたから、改進黨のやうに、學者振つて、政治の講釋をするものは、只の一人も無かつた。

維新の際、薩長二藩に、先手を打たれて、其跡から追隨して行つたものは、どうか斯うか、自分の立場はつくつたが、大勢を見損つて、對抗戰に、敗れた結果、ギユウ〳〵虐めつけられた連中は、いづれも、深い怨みを、有つて居

る。

はやく言へば、征服したものと、征服されたものとでは、その間には、非常な隔りがあつて、事毎に壓迫をうける。いくら口惜がつても、力の及ばぬ限り、いかんともすることが出來ぬ、只だ無念を忍んで、其命令に從ふの外はなかつた。

『我日本國は、農を以て本となす』と、教へられては居るが、その實狀からいへば、頭の上る瀨のないのが、百姓の境遇であつた。殊に、中以下のものは、地主に虐められ、生活に逐はれて、一日も人間らしい、快樂を味つた事が無い。

今でも、農村の救濟は、政治上の大問題になつて居るが、日本の農村に居る人ほど、不幸なものはあるまい、と思ふ。

殊に、昨今は、生活の向上から、一層、其の苦みを感じて、少しく氣の有るものは、みな農村から遁れて、都會の地へ、移つて來る。製造工業の進展から、田畑は潰され、限りなき人口の增殖は、耕地を、宅地に變へて、ズン／＼侵蝕してゆく、其結果は、農產物の激減となり、食糧問題が、大きな聲で、叫ばれるやうになつた。

話は、横路へ外れて恐縮するが、とに角、百姓の境遇は、昔から餘り良いものでなかつた。其代り、生活には、苦むで居ても、町家のものは比べると、割合に、時間の餘裕があつて、人の知らぬ間に、讀書を樂むで居たものが多かつたので、存外に、理窟屋は少なくなかつた。

境遇に、不平の有るものは、どうしても、理窟に流れ易く、いつか、有志家肌の人間が、農村に、殖えてゆく傾きがあつた。明治になつて幾分かは、思想も解放されて、さういふ質の人が、頭を擡げて來たのは、ちよツと、面白い現象であつた。

板垣退助の遊說は、これ等の士族と、百姓の間に、意外の歡迎をうけて、熱烈な國會開設論者が、出て來た。

自由民權論は、小數專制に對する、反對の標語であつて、四民平等說は、奈落の底に、ふみつけられて居た百姓に天來の福音とも聞えた。

其處で、板垣の傘下には、是等の人々が、わツと、集まつて來て、國會開設の運動は、燎原の火の如く、どんな下草までも、燒き盡さゞれば止まぬといふ勢ひであつた。

自由黨の勢力が、六十餘州の郡村に漲つたのは、斯うした事情からであるが、都市の方へは、その割合に、手が延びなかつた。

舊藩の士族が、昔ながらの身分を、ふり廻して、謂ゆる實業家なるものを町人扱ひにする。二た言目には、肩肘を張つて、理窟を列べるので、都市の商人は、成るべく敬遠するやうにして、一つ群れに、入る事を避けた。

農村の百姓が『町の旦那方』を以て目し、萬事は遠慮勝ちに、長い年月を、尊敬して來たにも不拘、民權とか、平等とか、いふ事を覺えると、今迄に變つた態度で、『何のくそ、町の奴等が』といつた調子に、なつて來た。

それに反して、町方のものは、相變らず、百姓を輕蔑してかゝらう、とするから、其反目は、日を逐うて、はげしくなつて行く、それは、自由黨の出來てから、一層の度を、進めて來たので、都市の實業家には、概して、自由黨を嫌ふものが多い、その隙に乘じて、大隈の改進黨が、全國の都市へ、力を延して來た。

自由黨と、改進黨の分野は、斯うした事情から、はつきり、區別されるやうになつた。今でも、政友會が、郡村に根據を有ち、舊國民黨系や、今の民政黨の力が、都市に、多く殘つて居るのは、それが爲めであつた。

乍併、自由黨にも、澤山の學者は在つた、たゞ不思議な事には、それが多く、フランス學者であつて、改進黨のイギリス學者と、全く反對であつたのは、頗る妙である。

昔流の士族と、氣の强い百姓と、その二つの力が、自由黨を强いものにしてしまつた。從つて、自由黨の、政府に對する態度の、一本調子であつたのも、之れが爲めであつた。

星亭、大井憲太郎、中江篤介、松田正久、曾田愛三郎、末廣重恭、馬場辰猪、植木枝盛、細川劉、古澤滋等の人を始め、學問の出來るものは、澤山に居た。殊に、古澤の如きは、和漢英に渉つて、學殖の深い事は、屈指の人であつた。中江は號を兆民と謂ふて、フランス學に於ては、當時の第一人者であつた。

中江は、多くのフランス學者を集めて、番町に、佛學塾を興し、傍ら政理叢談といふ、雜誌を發行して、ルーソーの民約論を漢譯して、之れを公けにしたのが評判になつた。それから、民約論が、都鄙到る處に、傳唱された。

其頃から、イギリスや、フランスの革命史が、ひどく流行つて來て革命なる一語を、壯年血氣の人が、非常に喜んで、使ふやうになつた。

明治廿三年を待つやうな、まどろこしいことをせずに、革命を以て、早手廻しに、政府を倒してしまへ、といつた風の事が、しきりに唱へられる。果は、ロシアの虛無黨を研究するものがあり、爆裂彈の製造に、苦心するものさへ出て來た。

自由黨員の思想が、斯ういふ風に、なつて來たのは、西洋の學說や歷史に、囚はれたばかりでなく、政府が、自由黨に對する方針、卽ち集會と言論の上に、非常な壓迫を加へた事が、主として、彼等の思想を、過激ならしめたのであつた。

新聞には、讒謗律をつくつて、嚴重な取締を行ひ、少しでも役人の惡口を書けば、すぐ此法律で、獄に繫ぐ。今では、新聞法と改まつて、昔に比べたら、殆んど干涉がない、といつても、よい泣になつて居るが、讒謗律の時代には、屁を放つたやうな事でも、すぐ獄に入れられたのである。

演說に對する、取締は、新聞の方よりは、猶ほ酷かつた。文章を讀むで、その意味を、理解し得る人は、相當に敎育も、受て居るだらうから、左迄に脫線もしないが、演說を聞いて、すぐ感激するやうな人は、どうかすると、飛んでもない事を、はじめる事がある。

文章を讀むには、それ丈けの力が、なければならず、辛うじて、讀み得る丈けでは、文章の意味を、理解し得ぬものであるから、文章の方は、其響きも少なく、且讀まれる範圍も狹いものであるが、演說は、どんなものでも、直ぐ解るし、別に大した學問はなくとも、普通の人間である以上、演說を聞いて、其可否の判らぬものは、あるまい。

大鹽平八郎の檄文は、よく讀み得るものがない。としても、それを碎いて、通俗的に、演說して聞かせたら、すぐに感激するだらう。筆の力も、ナカ〳〵大いものであるが、舌の力は、さらに大いものである。

政府が、一しきり演說を、蛇蝎の如く嫌つたのも、實は、其響きの及ぶ所を、考へたからであつた。新聞に對する取締よりも、演說の方に對しては、極端な取締を、やつたのである。

集會條例といふ、法律をつくつて、嚴重に取締る事にしたのは、明治十年頃からの事で、人を集めて政談をするものは、すべて反逆人の如く觀て、之れを憎み、役人の身上について、彼是れいへば、其演說を差止めて、拘引するといふ、遣方であつた。

『政談の集會をするには、三日以前に、屆けを出せ』『發起人の氏名、身分、年齡を、書いて出せ』『辯士の原籍、現住所、氏名、年齡、且論題と要領を、書いて出せ』『會場の持主に、連印をさせろ』斯うした、繁雜な手續きをさせていよ〳〵屆け出ると、認可するかせぬかは、警察署長の職權に屬する、といふものであるから、署長の考へ一つで、演說を、させぬ事にもなる。

開會屆は、三日前に出すのだが、指令は、開會の時間までにすれば、よいのだから、施毛曲りの署長に引つかゝつたら、開會の準備さへ、出來ぬ事にもなる。八人屆けた辯士を、一人丈け認可して、跡の辯士は、すべて認可せぬといふやうに事もあつて、認可された辯士は、非常な訥辯であつた、といふやうな場合には、折角の催しも、中止するの外ない、といふ事も、しば〳〵行はれた。

現代の若い人が聞くと『まさかに、そんな事が』と、驚くほどの事があつた。それは、過激な議論をするものとし

て、政府から睨まれた、辯士は『演說禁止』の行政命令を、うける事であつた。

『其方儀、自今、全國に於て、政治に關する事項を、講談論議する事を禁止す』

斯ういふ書附を、渡されるのであるが、これを受取つたら、絶對に、演說は出來ぬ事になるのだ。『其方儀』といふのが、如何にも面白い。今でも、官僚的の政治家は勿論、平凡の小役人までが、此文字の通りに、人民を看下して居るのだから、日本に居るのが、馬鹿らしくもなる。

演說をして居る、最中でも『辯士ツ、中止』と、一喝されたら、それで、跡の演說は、出來ない事になる。此事だけは、今でも行はれて居る。

それであるから、日本人には、本當に言論の自由は、ないのである。地方の警察官は、昨今の時勢になつても、まだ此心を以て、演說の取締りをして居るのだから、實に驚くの外はない。

自由黨の辯士、殊に、血氣の連中は、此壓制に對抗して、いく度か、牢獄の苦痛も嘗めたが、一難を經る毎に、一倍し來るの元氣を以て、いよ〳〵官憲に、抵抗してゆく。その間に、過激な思想も、起つて來て、爆裂彈の製造にまで、なつたのである。

八

『オイ、照山ツ』

『何だ』

『また、やられたのか』

『うむ、一年間の禁止だ』

『前には六ケ月で、今度は、一年か』

『追々に昇級するのだ、ハツハ、、、、、』

『貴樣のやうな奴が、口を縫はれたら、困るだらう』

『我輩だから困るだらう、といふのは、どういふ理由だ』

『なに、貴樣だからと、限つた事もないが・・・』

『苟も、生きて居る人間が、しやべれない、となつたら、誰れでも、不自由は感ずるさ』

『奥宮もやられて、勝山もやらした。それに、貴樣も、やられたのでは、これから演說會にも差支へるが、困つたものだ』

『どうも仕方がない。政府の奴等、ひどく恐れて居る、と視える』

斯うして、話合つて居る所へ、追々に、集つて來る。自由黨本部の二階で、いつも集まる連中は、大概定まつて居た。

山口俊太　小勝俊吉　奥宮健之　勝山孝三　和田稻積　池澤萬壽吉　奥宮健吉　植木枝盛　栗原亮一　宮崎夢柳　櫻田百衛　小室信介　加藤平四郎　宮部襄

山口は、今の名が熊野、奥宮健之は、幸德秋水と、共に死刑になつたが、健吉は兄である。池澤は、近年まで、小石川區に居たが、今は故人になつた。小勝、和田、宮部、櫻田、植木、栗原、健吉、宮崎、小室、みな死んでしまつた。獨り、加藤は、今でも政友會の院外團長として、昔ながらの溫厚な風采で、よく活躍して居る。

小室は、案外堂主人と稱し、漢文學の方では、有名な人であつた。民權百家傳、夢戀々等の著述が、殘つて居る。宮崎と櫻田は、七五調の文章がうまく、西洋の革命小說を書いて、青年の氣受けは、黨中第一の人であつた。植木の演說と論文は、すでに世に知られて居たが、加藤宮部と、相並んでの先輩であつた。栗原は、漢詩が上手で、ポーランド滅亡の詩や、フランス革命の詩が、どれほど、青年の血を湧かさせたものか、津々浦々の端までも、よく知れ渡

つて、青年はよく吟誦したものであつた。

政談演説を、禁止されたのに對して、講談に、名を借りて、暗に政府を攻撃しやう、といふ事の相談が決まつて、その準備にかゝつたのが、其頃の事であつた。

鑑札を下げて、貰ふ迄には、いろ〳〵の曲折もあつて、皆な講談師になつた。健之の藝名は、先醒亭覺明といふのであつた。健吉は、森林黑猿と稱した。後れ走に加はつた、龍野周一郎は、先憂亭後樂といふたが、その他のものもそれ〴〵に藝名をつけて、寄席の高座へ、上る事になつた。

照山は、本名を其儘で、別に藝名をつけなかつた。森久保作造も、本名の儘であつた。其談ずる所は、フランスの革命史とか、ロシアの虚無黨に關する事で、到る處の寄席は、何時も、滿員の盛況であつた。

芳町の自由亭と、外神田の千代田亭が、その本據で、あとは場末の寄席や、貸席へ出て、さかんにやつて居た。

駿河臺のニコライ堂の傍に、小龜といふ俥宿があつて、親方は、三浦龜吉といふたが、體格の小さい所から、人呼んで小龜、自分も、それを本名の如くにして、軒下の行燈にも『小龜』と書いてあつた。

初めは、根津の遊廓に居て、足の疾いのと、喧嘩の上手なのとが、彼の誇りであつた。大江卓に抱へられて、後ち大井憲太郎に愛せられた。

挽子も、五六人は居て、俥宿の親方としては、内市でも、有名なものであつた。大江や大井に、使はれた關係から少しは理窟も覺えて、よく壯士の世話をした。

『三浦君、居るかね』

と、いひ乍ら、這入つて來たのは、奥宮と照山であつた。

『やア、先生、お揃ひですね』

『今日は、不意に來たので、どうかと思つたが、居てくれて可かつた』

『さア、お上んなすツて、おくんなさい』

軒下から、直ぐ土間に、なつて居て、左の方が、俥の置場で、右の方は、低い床が張つてあり、外から覗かれないやうに、腰障子が入つて、それにも『小龜』と書いてある。

小さい爐が、切つてあつて、その周圍に、挽子と一しよに、安坐をかいて居たのが、三浦であつた。

奥宮が、ずツと、上るのを見て、挽子は、爐の傍を離れやうとした。

『イヤ、さうして居て、くれたまへ』

『ヘイ、恐れ入ります』

『それぢやア困る。その儘にして居てくれないと、却て我輩の方で、遠慮する事になる。どうか、其儘にして居てくれたまへ』

三浦は、挽子を顧みて、

『それぢやア、みんな失禮して居たら、よからう』

と、いはれて、挽子は、安座だけ遠慮して、元の席に居据つた。

『少し相談が、あつて來たのだ』

『ヘー、どんなこつですか』

『我輩等は、寄席へ出て、講談をはじめたのだが、君は、知つて居るかね』

『それぢやあ、本當なンですか』

『もう二三度、すませたのだ』

『さうですか。人の噂さには、聞いて居たが、何だツて、そんな事を、はじめたのです』

『實は、演說を禁止されたから、講談の方で、遠廻しに政府を、叩く事にしたのさ』
『そいつア、面白いですな』
『所が、會主になつて、世話をしてくれるものがないので、頗る困つて居るのだが、どうだ、君が、一切を引受けてやつてくれないか、それを賴みに來たのだ』
健之の言が切れると、照山が乘出して、
『ぜひ承知してくれたまへ。講釋師の奴等や、寄席の主人といふのが、少しも政治思想のない所から、吾々を馬鹿にして、不當な要求をしたり、開演の妨害をしたりして、どうにもしやうがないのだ。毆つてすむ事なら、すぐにも毆つてしまふが、毆つたツてしやうがないのだから、そこを、うまくやつてくれる、俗にいふ太夫元なるもので、つまり主任となつて、やるものがない、と、何かにつけて困るから、いろ〳〵と話の末、君が、最適任といふ事になつて、奥宮君と僕とで、賴みに來たのだが、どうか承知して、くれないか』
と、說きつける。
三浦は、ニヤ〳〵笑つて居たが、
『承知しました。一肌脫いで見ませう』
『之りやア、難有い』
『今迄は、どういふ風にして、やつて居たのですか』
『君は、松林右圓といふものを、知つて居るか』
『知つて居ますとも、ありやア新聞讀みで、伯圓の弟子です』
『その右圓に、一切を、まかせて置いたのだが、彼も、仲間のものに對して、やり難い所があるらしいのだ』
『左樣でせう。藝人の仲間といふものは、面倒な習慣がありますから、右圓も、やり難いでせう』

『それでは、此次ぎから、やつてくれるかね』
『いつからでも、ようございますが、どんな事をすれば、いゝのです』
『席亭へ掛合つたり、席料や歩合をきめたり、開會の準備や、警察署の交渉、それから、木戸番も會計も、みなやつて欲しいのだ』
『つまり、太夫元ですな』
『さういふ譬になる』
『承知しました』
『そこで、君の報酬も、定めて置かないと……』
『とんでもねえ事だ。いはゞ自分が、好きで引受けるのですから、報酬も何も、あつたものぢやねえ。自由黨へ、お
つとめのつもりで、やツつけませう』
奥宮が、猶ほ何かいはう、とするのを、照山は遮つた。
『そんな事は、どうでもいゝだらう。どうせ、同志の間の事だから、あとで、何んな相談も出來る』
之れを聞いた、三浦は、嬉しさうな顏をして、
『左樣ですとも、そりやア其通りだ』
といふ。
傍で聞いて居る、挽子も、ニコ〳〵して、照山のいふた事が、いかにも嬉しさうであつた。
照山は、相手の氣合を見て、斯ういふ調子に出るのが、最も得意であつた。要するに、俥屋の親方であるのに、それを同志だ、といふ一言は、ひどく三浦や、挽子の氣に、容つたものらしい。

九

外神田の千代田亭に、三度目の講談がある、といふので、その評判は、素晴しいものであつた。

諸家の騒動や、義士傳に、興味を有つたものも、一度は引付けられて、新らしい講談なるものを、聞き度い氣がする。

伯圓が、一新機軸を出して、新聞講談を創始たのさへ、相當に反響はあつたが、要するに、器用にやつて退けた丈の事で、古い型に育てられたものが、ほんの附燒刄の、新しがりに過ぎず、テーブルを構へて、椅子に倚る、といふ、目先を變へた迄の働きで、大して相違はなかつた。

然るに、奥宮の新講談は、口調から演題、さては材料までが、すつかり新しいもので、殊に、演說で、賣つた名は、相當に知られて居る。

政談演說では、少しむづかしいが、講談として、碎いて聞かせるから、どんな人にも、よく解る。語る題目の、範圍も大きく、親や主人の仇討とか、博徒の賭場荒しとか、いふやうな、ケヂ臭い場面でない。

フランスの革命は、世界の思潮の上に、一大變動を、與へたほどのもので、舞臺は、ヨーロツパの全體である。パスチールの監獄を破つて、愛國の志士を、その囚はれから、救ひ出す、一段の如きは、國定忠次の鶏籠破りよりは、興味も深く、聞いて居て、自分の利益にもなるから、少し進んだ、考へを有つ人は、喜んで聞く。イギリスの革命も同じ事で、チヤーレス二世が、斷頭臺上に、引出される光景は、奥宮の雄辯に依つて、凄慘の場面が、眼に見えるやうであつた。

ロシアの虚無黨は、如何にして起つたか、といふ事を、述べる時、政府の當路者に、それとなく、一種の警戒を與へる。アメリカの獨立戰爭を演じては、ワシントンの盛德や、獨立軍の堅い覺悟を、巧妙に傳へるので、聞くもの

感興は、一回毎に、加はつてゆく。

千代田亭に、いよ〳〵看板が出て、宣傳ビラが撒かれると、前評判は、非常なものであつた。

三浦は、挽子を、連れて來て、場内の設備や、木戸口の張込みをする。下足札を打つて、人のはいる毎に『入らツしやい』と、いふ代りに、切符を賣つて、しづかにはいらせるから、初めて來たものは、張合のないやうな顔をして居る。

日の暮れ切らぬうちに、もう滿員になつてしまつた。巡査が二人、木戸の入口に立つ。少し經つと、警部が、巡査を連れて來て、むづかしい顔をしながら、高座の右側へ、臨監した。

場内は、之れが爲めに、頗る緊張して、恰で政談演說會の如き感がある。開會の趣意は、福井茂兵衞がやつた。後には、役者になり下るが、其頃は、自由新聞社に、勤めて居たので、講談の呼吸は、福井から一同へ、敎へて居たのである。

福井は、芝居茶屋の忰で、はやくから五明樓玉輔の門人となり、落語家になる可く、子供のうちから、修業して居た。玉若といふ名で、高座へ現はれた頃から、未來の眞打を以て目され、十七歳の頃、玉輔の後見で、眞打の披露をしたほど、天才的の落語家であつた。

先頃、故人になつた圓右が、それと同時に、眞打の披露をして、どちらが先きに、大きくなるか、といふ事は、斯界の人から、注意された位であつた。牛込の、わら店をすませて、夜遲く歸る時、俥屋の疎忽から、下谷の池之端で、大溝へ、俥ぐるみ落されて、足を打つたのが、原因となり、いつかリウマチスになつて、足が曲つてしまつた。

左樣した事情から、福井は、落語家を廢めて、芝居の見巧者が、六二連といふものをつくり、それの牛耳を執つて居たのが、梅素黨と富田砂筵の二人であつた。福井の生れた、丸鐵といふ、茶屋から淫られて、芝居の見物をして居た關係から、福井は、富田の世話になつた。

斯くて、福井は、自由新聞社へ入り、庶務の方へ、勤めて居た。奥宮等が、いよ〳〵講談を、はじめるとなつて、福井から、高座の呼吸や、寄席の内幕を、教へて貰つた。

松林右圓との關係は、福井の紹介からで、いつも、開會の時は、手傳ひにやつて來て、開會の趣意をやる事に、なつて居た。

講談を、寄席ではじめるのに、開會の趣意は可笑しいが、それが、頗る巧いもので、聞く人の氣受は、頗る可かつた。

福井がすむと、右圓が出て、舊式の口調で、新らしがりの事を、いふのだが、其語る所は、相變らずの吉田御殿か何かで、會の性質に比べると、釣合の惡いものであつた。

それ迄は、無事にすむだが、三人目は、照山の番であつた。圖抜けた、大きい聲で、ガン〳〵怒鳴るから、徒に騒騒しいばかりで、人をひきつける力はない。口調も、演說をする時と、同じであつた。

雲井龍雄の事について、しきりに述べ立てる。

『諸君、雲井の最期は、實に壯烈なものでありました。薩長の奴等が、勤王の美名にかくれて、專横の限りをやるから、誰れにしても不平はあるが、うツかり何かいへば、すぐ縛られるので、みな默つて居たのであります。

雲井は、それを憤慨して、一擧に、政府を倒さう、としたのでありますから、其志や、實に堂々たるものでありました。時運、未だ可ならずして、計畫は、中途に破れましたが、兎に角、勝ち誇つて居た薩長の奴等、殊に、政權を握つて、天下に臨んで居た、彼等に、一と泡吹かせようとした、此擧は、敬服の外ありません。

計畫が破れて、捕へられた雲井は、終に死刑に處せられ、其首は、街頭に晒されました。けれども、此失敗に依つて、雲井を、つまらないものだ、とする事は出來ません。雲井の如き、氣魄を有つて、自分の主張に強いものはぜひ今日の政界にも必要であつて、僕は、雲井の如き人物が、はやく出て來て……』

此時、臨監の警部は、フツと立上つて、テーブルを、トンと打つた。

『辯士ッ』

と叫ぶや、聽集は、一時にどツと、吶喊を上げた。

演說の中止は、毎度の事で、よく馴れて居るから、聽衆も、なか〳〵味をやる、辯士は、聽集の吶喊が、どツと起るから、之れに勢ひを得て、强くなるのだ。

さなきだに、强いのを見榮のやうにして居る、照山は、いよ〳〵强氣になる。

『諸君、雲井君の如きは、眞に救世主にもひとしい、人物であります。雲井君は……』

警部の聲には、耳を借さず、無頓着に、しやべりつゞけやう、としたから、警部は、席を離れて、演壇に迫つた。

『辯士、中止ッ』

と、いひながら、照山の袖を引いた。

聽集は、總立ちになつて、ワツ〳〵と騒ぐ。辯士の方でも、奥宮を始め一同が、演壇の左右から　照山を護つて、警部を押退けてしまつた。

『こらッ、官吏に抵抗いたすか』

『官吏も糞もあるか、馬鹿ッ』

『誰れか、馬鹿といふたのは、誰れか』

『己れが、いつたのだ』

『イヤ、我輩ぢや』

『さうぢやない。僕が、いふたのだ』

誰れも、彼れも、みな自分がいふた、といつて、警部や巡査に迫るから、結局は、誰れがいふたのか、判らない事

になる。

五人や六人の巡査では、とても仕様がない。多少は、紛れ込んで居た、刑事巡査も居るが、此大勢に、勝つ事は出來ぬ。

所へ、急報に接して、十餘名の巡査が、駈けつけて來た。それから一しきりは、格闘がつゞけられたけれど、數名のものが縛られたので、漸く解散した。

三浦も、奥宮も、照山も、此時には、もう姿が見えなかつた。如何に事馴れて居るにしても、實に素早いものだ。

一〇

普通の講談としては、少し詭激にすぎる點もあるが、それにしても、講談と銘打つて始めたものを、警察署の方から、まるで政談扱ひにして、之れを取締る、といふのだから、莫迦らしいにも程度がある。

殊に、中止解散を命ずるとは、何事だ。而も、官權のあらん限り、腕力までも揮つて、負傷人を出してまで、中止解散を、命ずる必要が、どこにあるか。愚も亦た甚だしい事だ。

集會は解散されても、傍聽料は、手に殘つて居るから、あとの始末はつく。其頃の事であるから、一人の料金は、僅かに五錢であるが、それでも二十圓餘りは殘つた。

昔の寄席は、今に比べて、實に安いものであつた。舊幕の頃は、我等の知る譯もないが、明治十六七年の頃、講釋場は、たツた二錢四厘で、坐布團と火鉢で五厘、仲賣りの菓子が、可成り大きいのを、一つ五厘で、賣つて居た。勉強する寄席では、三つ一錢のも、あつたほどだ。

色物席でも、大同小異の安いもので、出演する藝人は、みな立派な、手腕のあるものばかりだ。今の藝人に比べると、其頃の三つ目位のものが、今では眞打になつて、居るのだから、少し心細くなる。

講釋場にしても、また色物席にしても、みな立派な看板攝ひで、二錢か三錢で、一日の樂しみが出來る。儉約すれば、只の十錢で、晝夜を通じて樂めるやうに、なつて居た。

さうした時代に、素人ばかりが集つた、講談を、五錢取つて、いつも滿員と、いふのだから、警視廳の奴等が、神經を尖らしたのも無理はないが、干渉が過ぎて、評判を、良くした傾きもある。

三浦が、いつの間にか、赤馬車を、二臺呼んで來て、その四方に、自由萬歳と染抜いた、幕を張り、紅い提灯を、いくつともなく、ぶら下げたのを、席の門口へ、横付けにした。

『さア、集つて下さい』

『三浦君、どこに行くのだ』

『吉原へ、行くのです』

『えッ、吉原へ……』

『これから、吉原へ押出して、景氣よくやりませう』

『こいつは、面白い。さすがに親方は、奇拔な事を考へる』

『さア、集つて下さい』

奥宮が、一番先きに乘つた。照山は、三浦と共に、一同をすゝめる。吉原と聞いては、誰れ一人として、異議をいふものはなく、忽ち二臺の馬車は、一ぱいになつた。

圓太郎といふ落語家があつて、高座の上で、ラッパを吹きながら、

『お婆アさん危ない、お爺さんも危ない』

と、いつて、馬車の走る、眞似を爲る。それが、人氣を呼んで、只だ其れ出けの事で、大入を占めたものだ。

輕い落語を一つやつて、都々逸を、二つ三つ唄ふ。それが又た、巧妙を極めたもので、醉ッ拂ひがクシヤミをしな

から、肴を喰ふ面白さ、といつたら、その後ち眞似をするものは、いくらもあつたけれども、とても圓太郎の輕妙洒脫なるには、及ばなかつた。

いかゞはしい馬車が、すべて圓太郎で通り、今では自動車に迄、圓太郎の名が、附いて居る。昔の落語家は、實に偉いものだ、と思ふ。

三浦が、呼んで來た、馬車は、則ち其圓太郎である。小室屈山が作つた、自由の歌を高唱しながら、馬車を走らせる。御祝儀のはずみも、よかつたものか、馭者は、遠慮なく、馬の尻を叩く。

日本堤へかゝつて、之れから大門へ近づかう、とする時、交番所から、巡査が出て來て、

『こらツ、待て』

と、いつて、馬車を停めさせた。

『何だ／＼』

照山が、馬車の幌を、捲つて見ると、一人の巡査が、馬車の行途を遮ぎつて、馭者に、叱言を、いふて居る。

性急の照山は、忽ち馬車から、飛下りた。

『どうしたのだ』

馭者は、弱つたといふ容子で、

『此旦那が、通さないといふのです』

『何ツ、此奴が』

照山は、巡査の方を振向きながら、斯ういふた。その聲が、法外に大きかつたのと、白髮緒顏の變つたものだけに巡査も、少しひるむだ態度で、モヂモヂして居る。

『オイ、君か、此馬車を停めたのは』

『左樣ぢや』

『どういふ理由で、そんな事をするのか』

『此狹い土堤へ、馬車を走らせるから、それで停めたのぢやが、當にそればかりでなく、高聲で、歌を唄つて居たのが、甚だ宜しくない』

『君は、馬車を走らせた、といふが、人の歩くよりは少し早い位の程度で、決して走らせたのではない。また、歌を唄つては不可、といふのはどういふ理由か』

『道路に於て、放歌喧騷してはならぬ、といふ規則がある』

『冗談いつちやいけない。道路で放歌したものは、一人も居らぬ。但し、馬車の內で、歌は唄つたが、これは道路ではない』

『馬車を走らせながら、放歌すれば、卽ち道路で、放歌した事になる』

『何時から、さういふ規則になつた』

『以前から、さうなつて居る』

『馬車の內でも不可、と書いてあるかね』

『さうは、書いてない』

『それぢや、差支へなからう』

『イヤ、いかんのです』

『然らば、道路に沿うて、家の內で、歌を唄つても惡い、といふ事になるか』

『……』

屁理窟ではあるが、理窟らしいので、巡査も、ちよつと困つて、急に答へが出なかつた。千代田亭を、出る時に、

一ぱいひつかけて居たので、この頃には、大分醉も出て居た。

三浦が、窓から首を出して、

『そんな馬鹿に構はずと、行かうぢやないか』

と、いつた。

巡査は、眞赤になつて、怒つた。

『馬鹿とは、誰れの事か』

『汝の事だ』

『怪しからぬ事をいふ。下りなさい』

『貴樣等に下りろ、といはれたツて、下りるもんか』

『こらツ、下りんか』

『下りねえ』

巡査は、手を延ばして、三浦の手を抑へた。その背後から、照山が、巡査の頭を、コツンと毆つた。そのはずみに帽子が飛んだので、巡査は狼狽して、帽子を拾はう、としたから、三浦を、抑へて居た、手を放した。

その隙に、三浦は、馬車から飛下りた。巡査は　泥まみれになつた　帽子を冠りながら、三浦と照山に、迫つて來る。

外のものも、今は見物して居られぬので、みな馬車から下りた。所へ、巡査が二人、やつて來て、前の巡査に應援するので、騷ぎは大きくなつた。

三浦は、根津の遊廓で、棍棒を握つて居る頃から、喧嘩上手で、賣出した男で、喧嘩は、飯より好きだ。

忽ち巡査と、毆り合ひになつたが、外のものは、留める振りをして、巡査を叩くので、巡査は、いよ〳〵怒る。

吉原へ、入り込む、素見し客や、地廻りの若い衆が、この騷ぎに、追々、集つて來たが、いづれも加勢して、巡査を、コヅキ廻す。三浦や照山は、喧嘩に馴て居る連中であるから、はやくも一人脫け、二人脫けして、みな遁れてしまつた。跡は、尻尾のない野次馬と、巡査の格闘になつた。

相萬といふ、女郎屋があつて、いつも、其家へ行く事になつて、居た。離れ〴〵にはなつたが、落ち込む先きは、相萬と、極まつて居る。

十人餘りの連れであるから、表二階を、明け廣げて、さかんに騷ぎ出す。三浦の大津繪節は、自慢の咽喉を聞かせ、奥宮は、左團次の假聲で、ヤンヤと喝采される。照山が、三尺餘りの棒を、持つて來て、得意の劍舞をはじめる、といふ騷ぎであつた。

赤馬車の馭者に聞いて、それが、自由黨の連中だ、と判つたから、警察署の方でも、取押への手順をつけた。

吉原の出口には、それ〴〵角袖を配置して、それから、正服の巡査が、女郎屋を、一軒々々、しらべて歩く。

今の象潟警察署は、その頃は、田町に在つて、事故の多いのでは、東京第一の署であつた。從つて、巡査の數も、他の署に比べて、多く居た。

相萬に、騷いて居る客が、確に其連中である。と判つたので、さア、それからは、いよ〳〵手配りを嚴重にした。丸で、忠彌の捕物、よろしくの體であつた。

所が、世間は妙なもので、斯ういふ連中に、却て味方は多く、何事にも開けッ放しで、威勢のよいのは、廓のものにも喜ばれて、存外に、氣受けはよかつた。

殊に、奥宮の如きは、紅梅といふ遊女に、ぞッこん惚れられて居て、情夫とまではゆかぬにしても、好いた御客として、特別の取扱ひは、されて居たのだ。

強い壯士や、やかましい、論客の中に、たツた一人、毛色の變つた、三浦は、どこまでも、勇み肌の男で、金の切

れ放れもよく、唄ふ咽喉も乙だ、といつて、てツかの女は、どうしても、好くやうに、なつて居た。

三浦の買つて居た女が、こツそり紅梅の部屋へ、やつて來て、

『紅梅さん、ちよツと…』

障子の外から、聲をかけた。

『オヤ、逢州さんですか』

『はア』

『おはいンなさいな』

『はいつてもいゝの？』

『人を莫迦にして居るよ。何時はいつたつて、構やしないよ』

『本當に…』

『何だね、此女は、いやな事をいふよ』

逢州といふ女に、ずツと、はいつた。小店の女郎でも、大さうな名を、つけて居る女が居た。

『うツかりはいつて、とんだ所でも見せつけられると、たまらないからね』

しどけない姿をして、寢間から出て來た、紅梅は、ニヤ〳〵笑ひながら、火鉢の前へ坐つた。

『何の話があるの？』

『實は、大變なンですよ』

『どうしたの？』

『何だか知らないが、巡査さんが、大勢來てこそ〳〵やつて居るのだよ』

『へー、何だらう』

『この連中の事ぢやなからうか』

次の間へ指さしながら、逢州は、斯ういふた。紅梅も、輕く首肯いて、

『さうかも知れないよ、自由黨の人だから、巡査さんとは、仲が惡いわネ』

と、いつて、一段と、聲をひそめた。

『どんな樣子なのか、判らないの』

『何でも、みんな縛られる、らしいのよ』

『えツ、何だツて、そりや、大變ぢやないか』

『見世の方でも、大へん困つて居るらしいのよ』

『どうしたら、いゝでせう』

『さうさね』

兩女は、しばらく無言で、考へに沈むだ聲をひそめての、話合ひではあるが、それでも、襖を隔てゝの私語は、劃合に漏れ易いものだ。眠つた振りをして居た、奧宮の耳へ、途切れ〳〵に、此事が聞えた。

一一

『オイ、何か面白さうな、話だね』

不意に聲をかけられて、兩女は驚いた。

『あら、起きて居たの』

『うむ、兩女で、ベチヤ〳〵やつて居るので、ツイ眼がさめちまつた』

『それぢやア、話を聞いたの』
『うむ、すツかり聞いた』
紅梅は、沈んだ調子で、
『どうします』
と云ふた。逢州は、默つて、奥宮の擧動を、見て居る。
『うまく、逃して呉れないか』
『えツ、逃げるのですか』
『今逃げても、あとで捕まれば同じ事だが、とに角、この儘捕まつては、都合が悪いから逃してくれ』
兩女は、しばらく考へて居たが、
『それでは、斯うしたらいゝでせう。裏の湯殿の傍を、開けて置きますから、妾達の知らぬ間に、逃げた事にして、其處から出て、おいでなさい』
『さうしようか』
『その外に出る所はありませんよ』
『宜しい、さう決める』
『他の人は、どうするのです』
『みんな、連れてゆく』
『さう決まつたら、はやく支度をなさい』
奥宮は、これから、照山や三浦を起して、手早く衣服を着替た。兩女に、教へられた通り、裏梯子を下りて、一人一人に、こツそりと、湯殿の傍から、忍び出た。

軒と塀の間で、體を横にすれば、やうやく出られる位の路次があるから、それを通つて、表通りへ出ると、分れ分れになつて、大門を出てしまつた。
見返り柳のところで、みな落合つて、日本堤を左へ、龍泉寺通りへ出やう、とする。田甫道へ差かゝつた。用心に用心をして、分れ〳〵に歩いては居るが、夜更けの二時頃に、斯んな所を、やつて來るのだから、どうしても、普通の早歸りとは見られない。
憲兵が、二人連れで、龍泉寺の通りから、いそぎ足で、やつて來た、摺れ違ひながら、ちらりと見て、
『待てッ』
と、聲をかけた。
一同は、聞えぬ振りをして、行きすぎやうとした。憲兵は、跡から追縋つて、照山の袖を捉へた。
『こらッ、何故、待たぬか』
『僕ですか』
『聲をかけて居るのに、何故、逃げるか』
『逃げはしない』
『逃げたではないか』
『いつ逃げた』
『お前は、どこから來たか』
『吉原から……』
『那れへゆくのが、お前の連れか』
『イヤ違ふ』

『連れであらう』
『違ふ』
押問答のうちに、もう一人の憲兵は、駈出して行つた。照山が、捉へられたのを見て、三浦が、足を停めて振返つた所へ、憲兵は追ひついた。
『彼處に居るのは、お前の連れか』
『さうです』
『彼の男は、連れでない、といふて居るが、どちらの云ふことが、本當か』
『……』
『オイ、なぜ默つて居る』
『連れではない』
『今、連れだといふたではないか』
『それは、間違ひだ』
『どうして、左樣いふ間違ひを申したか』
『思ひ違ひをしたのだ』
『お前の擧動に、疑ひがある。一しよに來い』
『どこへ行くのだ』
『憲兵屯所へ來い』
『どういふ譯で、ゆくのか』
『何でもよいから、來いといふのぢや』

『何でもよいとは、驚いた。人を連れてゆくのに、何でもよいから來い、といふのは、如何にも亂暴だ』
『お前は、官命を拒むか』
『そんな、官命はない』
『怪しからぬ』
憲兵は、三浦の胸を突いた。
『オヤ、腕力かツ』
と、いふが早いか、三浦は、憲兵の横ツ面を、毆りつけた。
それから、憲兵と三浦が、格鬪をはじめたので、奥宮も、引ツ返して來て、三浦に、力を借す。到頭、憲兵を、泥田の中へ、ぶち込んだ。
照山を、しらべて居た、憲兵は、之れを見て、すぐ駈けつける。その際に、照山は、逃げてしまつた。
奥宮と三浦も、駈足はやく、逃げ出す。その他のものも、道を變へて、逃げ出した。重い服裝で、腰には、七ツ道具を、ぶら下げて居るから、憲兵の足は、存外に遲い。
相萬の方では、すツかり巡査の手配りが出來る、と、平服の巡査が、妓夫の案内で、先づ紅梅の部屋へ入つた。
部屋のうちは、ひツそりとして居る。よく寢入つて居るらしい。襖を、スーツと開けたが、それにも、氣が付かないやうで、しづかな寢息が聞える。
妓夫は、屏風の外から、聲をかけた。
『紅梅さんの花魁……』
答へがないから、また聲をかけると、やうやく紅梅が、返事をした。

『誰れ』
『わたくしです』
『あゝ、平どんかね』
『ちよつと、お顔を……』
『よく寢て居るものを、何だね、うるさいぢやないか。其處で、用事を云つて下さい』
『ちよいと、お顔を、借して下さい』
『それぢや、お入りよ』
『よろしう御座いますか』
『構はないから、入つておくんなさい』
『御免なさいまし』
と、云ひながら、屏風を押退けて、覗き込むと、紅梅は、一人で、寢て居る。
『オヤ、花魁、お一人で御座いますか』
『アー』
『お客さまは……』
『さツき買物にゆく、といつて、出ていつたよ』
『ヘツ、出てゆきました……』
『はア』
『そりや大變です』
『どうしたの』

『どうしたツて、そりや、大變です』
紅梅は可笑しいが、笑ひを堪へて、平どんの顔を見ながら、
『此人は、何だね。頓狂な聲を、出してさ』
『だツて、花魁、お客さまが、出ていらつしやるのに、送り出さなかつたのですか』
『わたし、眠いといつたら寢て居ろといふから、寢て居たのよ』
『店から、出ていつたのでは、ないでせうか』
『わたしは、寢て居たから、知らないよ』
『そりや、大變です』
『心配はないよ、お金は預つて居るから、歸つて來ないでも、勘定はつくよ』
『そんな事ぢやないのです』
『どんな事なの』
兩個の押問答は、果しがない。次ぎの部屋に待つて居る、刑事は、もう堪忍が出來なくなつて、ゾロ〳〵はいつて來た。
大槪な女郎なら、驚いて起る位の事はするのだが、紅梅は、矢張り寢床へ、腹這になつた儘で、長羅宇の烟管を取つて、煙草を、スパ〳〵吹かして居る。
『オイ、起きろ』
『何か御用ですか』
『少し用があるから起ろ、といふのぢや』
『寢て居ては、いけないのですか』

『何といふ不性な奴だ』

『わたしは、いやしい女郎ですよ。女郎といふものは、寢てくらすツて、昔から、いつてるぢやアありませんか』

『まア、起ろ』

『それぢやア、起きませう』

紅梅は、布團の上へ坐つて、ヂロ〳〵刑事の顏を、見て居たが、

『オヤ、旦那方ですか』

『うむ』

『これは、濟みませんでした。わたしは、また御連れさまか、と思つたのですよ』

『お前のお客は、どこへ行つた』

『知りません』

『一しよに、寢て居て、知らないといふのは、可怪しいぢやないか』

『わたしを、寢かして置いて、出て行つたんですから、わたしには、どこへ行つたか、判りません』

『何時頃か』

『たツた、今の事だ、とは思ひますが、一と眠入りしましたから、その間に、何の位ゐ時間が經ちましたか、それは能く判らないのです』

答へは、どこまでも曖昧である。對手が女である丈けに、刑事も、ちよいと困つた。

外の部屋へ乘込んだ、刑事も、追々に、やつて來て、同じやうな事をいふて、みな困つて居る。

湯殿の傍が、開いて居た、といふので、さては其處から逃げたのか、と氣がついて、これから刑事は　ぞろ〳〵出てゆく。

斯んな事で、時間をすごしたから、跡を逐ふた所で抑へられる筈はない。そのうちに、龍泉寺の田甫で、憲兵を、泥田へ投げ込んで、逃げたものがある、といふ、報告を得た。

結局は、千代田亭から引上げたものだ。といふ事も判明して、奥宮等の所業といふ事がすつかり判つた。

下谷の西黒門町に、奥宮は、下宿して居た。其處へ、一同は引上げて來て、先づ朝湯にはいり、氣分が直つてから牛鍋が可からう、と決して、切通し上の惠知勝へ、やつて來た。

其頃には、お千代といふ、女中頭が居て、多くの女中を、指揮して居た。

其時代の牛屋、殊に神田から、本郷にかけての牛屋には、女中に、偉い奴が居て、上手に、客を取廻して居たものだ。昨今の女中のやうに、客の前へ坐つて、祝儀欲しさに酌をするのとは、少し違つて居た。昔の女中にしても、祝儀の欲しくないものはなかろうが、その容子を視せずに、きれいにやつて、退ける所に、客扱ひの呼吸はあつたものだ。

尤も、昨今のやうに、良家の妻女までが、牛屋の二階に、平氣で、やつて來る、といふ時代でなく、大概は、職人肌のものか、書生に限られて居たので、客受けをする、女中の氣分には、非常な相違はあるが、神田や本郷の牛屋は九分通りが書生であるから、それに對する、取扱ひの上手な、女中が居る、と、大入繁昌を極める事は、受合であつた。

書生對手の女中であるから、立居振舞の荒々しいのは、止むを得ぬが、その言葉までが男らしく、氣の弱い奴は、叱り飛ばされて驚く位であつた。

どこの牛屋にも、女中の取締りが、一人づつは居て、それが、指揮して居るのだ。坐布團の積んである上に、大きい尻を下して、自分は、案内役をせず、配下の女中を、口の先一つで、動かして居るその調子のテキパキして客扱

ひに上手な事は、また格別であつた。

惠知勝の女中頭、お千代といふ女は、少しは文字も有つて、荒い口は利くが、親切な取廻しで、客の氣分を、快くさせた。

人は、牛屋の女中か、と云つて、一と口に貶しつけてしまふが、貰ひの多い事は、一流の會席茶屋の女中よりも、割合がよかつたのである。お千代の懷裡には　何時も百圓ぐらゐの金が、忍ばせてあつて、信用ある客には、時と場合によつて、立替へもするといつた調子で、お千代の勢力は、大いものであつた。

神田明神の坂上に、濟生學舍といふのがあつて、本郷の小商人は、それが爲めに、繁昌した位である。長谷川泰が、校長で、日本唯一の醫學校であつた。私立でこそあれ、盛んなもので、新式の醫者になるものは、大學へ行く外、此學校が、たツた一つ、在つた丈けであるから、全國から、集まつて來る、醫學生は、本郷一圓の下宿屋――其數は、今より少ないにしても――一ぱいであつた。

寄席の若竹亭が、東京一の大入を、十年以上もつゞけたのは、これが爲めであつた同時に、本郷臺寄りの牛屋と、本郷の牛屋は、客の大半を、此學生によつて占められて居た。

同じ學生でも、醫學生は、どういふものか、金廻りがよかつたので、根津の遊廓は勿論、牛屋の客としては、第一に位して居た。惠知勝の繁昌も、實は其れが爲めであつた。

お千代が、醫學生に對する、權威と信用は、驚く可きものがあつて、どんな醉ツ拂ひでも、お千代に、一と聲かけられる、と、、、、をさまつてしまふ。學費の來るのが、遲れて困る時は、お千代の扶けを、うける事があり、勘定の不足した時も、決して恥をかゝせた事がない。

その代り、學資が屆くと、すぐに返して、いくらかの禮をする、之れが却々に多くあつたので、お千代の懷裡は、いつも溢かであつた。

色や戀からの世話でなく、本當の親切と、商賣大事から來るのであつて、その間に、厭らしい事がなく、書生の方でも、惡い心から、引ツかけるやうなものは、絕對になかつた。

昨夜の騷ぎで、奥宮等の懷裡は、頗る不景氣であつた。さうした時は、いつでも、惠知勝に決めてある。

『オイ、お千代さん、頼むよ』

と、一と聲、かけた時は、いくら不足しても、不氣で、歸る事が出來る。お千代は、只だ輙く首肯いて、ニコリと笑ふ。此ニコリが、また何ともいへぬ愛嬌があつて、多くのうちには、其ニコリに魅せられて、通ふものもあつた。

『昨夜は、實に愉快だツたね』

と、先づ照山が、口を切つた。それからは、勝手な熱を吹いて、大氣焔を擧げる。

『親方の素早いのにも驚いたが、照山の猛襲には、巡査の奴、ヘドモドして居たぜ』

『我輩の感心したのは、何よりも相萬の奴等だよ』

『そりやア、左樣とも、世間では、女郎と貶しても、那アいふ氣慨の女もあるから、實に愉快だ』

『そりやア、有難い。女王、自からのお酌は、重ね〳〵恐縮する』

『氣慨ばかりぢやあなからうぜ。誰れかに、どうかして居るのぢやないか』

『誰れも彼れもあるものか、みんなに惚れて居るんだ、ハツハ、、、、』

『それにしても、泥田の憲兵や、空足をした巡査は、どんな面をして居るかな』

交々に、氣焔を擧げて居る。それを聞いて居た、お千代は、何を思つてか、一同の仲へ、割込んで來た。

『御免なさいよ。一つお酌をしませう』

『馬鹿ツ、何が恐縮だ』
『何がツて、貴様、女王が、御自身の御酌ぢやないか』
お千代は、盃を乾して、奥宮に渡した。
『奥宮さん、御免なさい』
と、いつて、酌をしながら、
『どうしたんです。ゆうべは、面白かつたらしいのですね』
『うむ、そりや、面白かつたのさ』
『話して下さいな』
照山は、虚實混交で、面白さうに昨夜の事を語つた。お千代は、つくづく聞いて居たが、ニコリともしなかつた。
『それで、逃げて來たのですか』
『イヤ、引上げて來たのだ。逃げはしないぞ』
『だツて、逃げたのぢやありませんか』
『……』
『はやく捕まつて、おしまひなさいよ』
『えツ、何だツて……』
『お前さん達が、はやく捕まらないと、花魁が、可哀さうぢやありませんか』
『左様かな』
『どんな、間抜な巡査でも、花魁が逃した、と思ひますよ。さうしたら、花魁が、捕まるぢやありませんか』
『成程』

『それに、どう逃げ廻つたツて、つまり捕まるのですから、はやく捕まつて、男らしい處分を、うけて、おしまひなさい！』
奥宮は、之れを聞いて、思はず襟を正した。
『さうだ、その通りだ。これは、我輩等が卑怯であつた。はやく捕まる事にしよう』
『オホ、、、、、奥宮さん、怒つちや厭ですよ。わたしは、さう思つたから、云うた丈けなんですから、女は、女の身を思ひますからね』
『よし、　く解つた』
何事にも、敏感な照山は、火鉢の縁を叩いて、先づ覺悟を示した。
『僕が引受ける。諸君は、平然して居ろ』
それを聞くと、三浦も同じやうに、
『、、、あツしも行きませう。先生方ばかりをやつて、、、、あツしが行かねえ、といふことは出來ません』
話が、斯うなると、皆な行く、と云ひ出す。それを、奥宮が抑へて、
『まア、靜かにしたまへ。こんな事件で、みな行くのは馬鹿らしいから、よく考へて、犠牲的に、行くものを定めよう』
と、云ひ出した。
これから、相談をはじめて、三浦と照山の二人が、代表的に、行く事になつた。
その相談を、お千代は、ニコ〳〵しながら、聞いて居た。そこで、一先づ奥宮の下宿へ、引取る事にして、飯も食ひ終つた。
『お千代さん、たのむよ』

『ハイ、御心配なく……』

一同は、惠知勝を出て、これから黒門町へ、やつて來た。

一二

奥宮は、自由黨本部に行き、照山と三浦だけが、奥宮の下宿して居る家へ、歸つて來た。巡査が、張込んで居ると思つて、奥宮や外のものを避けさせて、兩個は故意と、やつて來たのである。

果然、巡査は、張込んで居た。

『ちよツと、お待ちなさい』

照山は、振返りながら、例の調子で、

『何だ』

『あなたは、照山君ですな』

『左樣う』

『警察署まで、來て下さい』

『拘引狀を、持つて來たか』

『イヤ、拘引するのではない。ちよツと、來て貰ひ度いのです』

『厭だ』

『そんな事を、いつては困る。ちよツと、來て貰へば、よいのです』

『理由なくして、行く事は出來ぬ』

『少しお尋ねしたい事が、あるのです』

『それでは、後刻にゆく』

『今、來て貰ひ度いのです』

『君等の都合ばかりよくても、こちらの都合が惡い』

『そんな事をいはずと、來て下さらんか』

『斷じて行かぬ』

『そんな事をいはずと、來て下さい』

『馱目々々、連れてゆくには、連れてゆくやうにしろ』

爭つて居るうちに、巡査の數はふえて、五六人になつた。正服のものも、二名居て、平服のものへ加勢する。

『どうしても、命令を拒むのですか』

『こりやア、可怪しい。そんな命令があるか、賴むやうにして居たぢやないか。命令なら命令らしく、權威ある態度で來い』

『宜しい、それでは、拘引する』

『拘引なら、應じやう』

『さア、來い』

『拘引狀を見せろ』

『……』

『拘引狀が無ければ、拘引は、出來ぬ筈ぢや。さア、拘引狀を見せろ』

『拘引狀は、後で示す』

『後で示したのでは、拘引狀ぢやない』

『それは、都合に依る』
『そんな、馬鹿な事があるものか』
此押問答を、面白さうに聞いて居た、三浦は、照山の押強い、應對に感心して、
『先生、しツかりやつて下さい』
『うむ、安心したまへ。巡査の威迫ぐらゐは、河童の屁だ』
此一言に、巡査は堪りかねた。
『職權で拘引します』
『如何なる職權で、拘引する』
『警察官の職權を以てするのだ』
『然らば尋ねるが、罪名は何といふのか』
『官吏の命令に、抗拒する罪ぢや』
『ハツハ、、、、、馬鹿な事を、いふな』
『馬鹿とは、誰れの事か』
『誰れを馬鹿とは、言はぬ。馬鹿な事をいふな、と言つたのだ』
『何でも、宜しいから來い』
『飽迄も、拒む』
口先の爭ひでは、とても勝てぬ、と考へて、巡査は、照山の腕を捉へて、ぐツと引張る。照山が振拂はう、とするのを、他の巡査が、左右から力を併せて、照山を、抑へつけにかゝつた。
三浦も、茲に至つて、照山に、力を借して、巡査と揉み合つた。

所へ、警部が駈けつけて、
『オイ、拘引狀』
と云つて、巡査に、手渡し爲たのは、一通の拘引狀であつた。
警部の姿を見たので、巡査も、手を引いた。照山と三浦は、改めて拘引狀を示されたので、もう拒む事は出來ない。
警部の手には、まだ二三枚は、殘つて居る。奥宮其他の拘引狀らしい。
照山が、巡査と、爭つて居るうちに、氣の利いた巡査が、署へ駈けつけて、事情を訴へたので、警部が、拘引狀を持つて、跡から出かけたのであらうが、重寶な事をやつたものだ』
兩個は、警察署へ行つて、一應の調べを受けると、すぐ檢事局へ廻されて、收監の手續きをされた。
奥宮と、其他のものは、取調べをうけたが、此時には放免された。兩個が、、、うむとふむ張つて、罪を脊負つてしまつたから、奥宮等は免れたのである。
事件の大體からいふと、子供らしいほど、馬鹿氣た事ではあるが、その頃の政黨員と巡査は、いつも斯んな事をして、互に睨合つて居たものだ。

一三

今では、監獄署の事を、刑務所と謂ふて居るが、どういふ理由で、斯ういふ風に、名稱を變へたのか、よく知らない。
いづれにしても、悪い事をしたものを、入れる所で、名は刑務所と變つても、矢張り監獄だ、と思つて居るものが多い。役人や學者といふものは、つまらない事で、苦心する。役所の名は、何であらうと、よいではないか。監獄署でも、刑務所でも、其實質に、變りのない上は、要するに、同じ事であつて、呼び名を變へる甲斐はない、といふも

のだ。

今迄に、呼び馴れた、名を變へるには、よほどの理由がなければならぬ。徒らに文字の詮索をして、名稱を取換へた所で、何の効能がある。監獄は、どこ迄も監獄で、よいではないか。刑務所と改めても、人は矢張り、監獄と、いふて居る。百年も經つたら、刑務所と、いふやうになるかも知れないが、それ迄は、相變らず、監獄で通るだらう。

それとは違ふが、東京市が、そのうちに、東京都に、なるさうだ。之れも要らざる改稱で、何の爲めに、市を都といふのか。暇の多い役人や、愚鈍な學者が、日長の研究から、東京都なンて、變な呼名をつけて、喜んで居る。京都が大きくなつて、東京と、同じ取扱ひを、うけるやうになつたら、京都都といふのであるか、今から聞いて置き度い。

それから、大阪都を加へる。どこらを見ても、都ばかりになつたら、面白い事だらう。

鍛冶橋内に在つたのが、未決監である。既決のものを入れるには、石川島と市ケ谷の、二ケ所が在つて、それで充分に、事足りて居たが、追々に、人間の殖えるに從ひ、悪い事を爲るものも多くなつて、監獄も、手狹を感ずるやうになり、都會の中心から引放して、寂しい所へ移してしまつたが、今では其所が、賑かな町中になり、また移轉の計畫が、起つて居る。

生存競爭の波にもまれて、苦しい儘に、悪事を働き、監獄といふ、厭な箱の中に入れられて、食ふ丈けには困らない、といつて、先づ一と安心して居ると、また、邪魔にされて、引越しをするのだ。

世が、行詰まつて來ると、監獄へ行く事を、樂みにするものが、出て來て、故意に悪い事をやつて、自分から、進んで引ツかゝり、飯を食ふ事と、寢る事に不自由のないやうに、監獄入りを喜ぶものが、追々と、出て來るだらう。

鍛冶橋の未決監は、洋風の建物で、十字形を、なして居た。廊下を挾んで、六室づつ向合て居たから、總二階として、九十六室あり、一室は、四疊半であつた。

室の一隅に、セメントで、固めた流しがあつて、便器が、其上に置かれて在る。便器は、朝夕二回取換へるやうに、なつて居た。

一室に居るものは、四名から八名位迄で、可成りに窮屈なものであつた。

照山は、階上の三十六室に入れられたが、三浦は、階下の十二室であつた。たツた一人で、どちらも同居者はなかつた　國事犯や、政治犯で、はいつて來るものは、多く獨居させられる事に、なつて居た。

表面から視れば、敬意を表して居るやうにも見えるが、實は、外のものと、一しよにすると、いろ〳〵の智慧を、つけるから不可、といふので、斯うした取扱ひを、うけたものだ。

事件は、極めて單純なのであるから、豫審へ廻す必要もなく、五日ほどすると、公判廷へ、呼出された。

北田正董が、辯護人として、出廷した。けれども、別に辯護する點もない、本人が、警察署の書送りを、認めて居るので、甚だ簡單に、片付いてしまつた。

重禁錮二ケ月の宣告をうけた。官吏抗拒の罪、といふのであつたが、事件の割合に、刑期が安い、といふて、本人は、喜んで居た位であるから、不服なぞは申立てなかつた。

七日間は、上告の期限で、未決監に置かれる。その儘服罪すれば、刑期に加算されるから、本人に損はない譯だ。

『オイ、照山ツ』

未だ寢て居るうちに、看守がやつて來て、聲をかけた。照山は、毛布の中から、首を出して、

『何です』

『今日は送りになるから、はやく支度をして置け』

『いつでも、宜しい』

『交代がすむと、すぐ迎ひに來るぞ』

夜勤の看守が、晝勤の看守と、交代する時、既決送りのものは、引出す事に、なつて居た。石川島と、市ケ谷と、どちらへ送られるかは、本人に知らせないから、馬車に乘る迄は、自分の行先は、判らないのだ。

馬車が、動き出して、鍛冶橋を渡つたから、島送りといふ事が、判つた。京橋區の賑やかな、町を拔けて、急ぐ馬車の内で、往來を眺めて居るのだが、此時の心持は、經驗のないものには想像もつくまい。

陰鬱な、薄暗い馬車から引出される、と、すぐ渡船場である。捕繩で、繫がれた上に、手錠までかけられて、ずるずると、船へ移された。島へ行くには、此渡船の外、何の便宜もないのだが、監獄へ用事のあるものよりは、行く必要のない所だから、別に不便を感ずるものもなかつた。

佃島とは、細い溝川、一と筋を隔てゝ、隣り合つて居る。有名な、佃祭の時分には、囃太鼓の音も聞えるし、醉つ拂ひの高聲が、手に取るやうに、聞えて來る。

監獄の構へは、嚴かにつくられて居て、表門をはいつてから、また一つ門がある。それに向つて、右の方の塀に、小さい潛戸が、附いて居る。送られて來たものは、その潛戸からはいるやうに、なつて居た。

其潛戸からはいつて、すぐ前が、第一の洗場である。漸次に送られて來るものは、煉石敷の土間へ、一枚の莫蓙が敷いてあつて、その上へ、皆な坐らせられるのだ。

照山も、泥棒や詐欺師と、一しよに取扱はれて、その溜りの中へ、置かれた。少し遲れて、三浦が送られて來た。少しの間、別れて居たのだが、兩個は、顏を見合せる、と、さも嬉しさうにして、ニツコリ笑つた。

四五十人も溜つてから、調べはじめる事に、なつて居る。正面の高い所に、テーブルを控へて、看守と書記が、見下して居るのだが、容易に調べはじめないで、煙草を吹かしながら、無駄話に、時を移して居る。

やがて、一人づつ呼出して、調べはじめるが、なか〳〵に、暇が取れる。先づ住所姓名年齡から、原籍の所在、職

業や前科の有無、人相體格身長、何といふ事なく、メチヤ〳〵にしらべる。たゞ不思議な事には、竊盜の前科數犯あるものでも、職業をしらべる時、職業は竊盜で御座います、と言ふ者の無いことである。

それが濟むと、素ツ裸にして、足の裏から、尻の穴まで見て、腫物の跡が、一つあつても、帳面へ書留める。

『照山ツ』

『何だ』

看守は、眼を圓くした。

『呼ばれたら、此處へ、出て來るのだ』

と言つて、停木を指さす。

照山は、ノソ〳〵立上つて、停木の前へ進んだ。

『姓名は、何といふか』

『照山俊三』

『年齡は……』

『廿四歳』

『原籍と住所は、どこか』

『京橋區三十間堀、二丁目、寧靜館止宿、原籍は群馬縣、今では、どうなつて居るか知らぬ』

『原籍は、判らないのか』

『左樣だ』

『族籍は、華士族平民のいづれか』

『平民』
『罪名と刑期は……』
『官吏抗拒、重禁錮二ヶ月』
『前科があるか』
『無い』
『今日から、當署に置かれる。獄則を能く守つて、謹慎して居るのだ。よいか』
『ハツハ、、、、、』
『何が、可笑しい』
『判り切つて居る事をいふから、思はず笑つたのだ』
『笑つちやいかん』
『可笑しけりや、笑ふ。笑つて悪い、といふ法律があるのか』
斯ういふものを、對手にして居たのでは、いつ迄經つても、際限がない、と覩て、氣の利いた押丁が、照山の傍へ來て、
『サア、先生、こちらへ、來て下さい』
と、いひながら、照山の袖を引いた。
外のものと同じやうに、裸體にされて、しらべられたのだが、極く手輕で、すませてくれた。
三浦も、引つゞいて同じく調べを、うけたが、これは、照山と違つて、極く素直にして居たから、看守も、變に思つた。
裸體にして見る、と驚いた。背中には、美事な人墨がしてあつて、どうしても、自由黨の志士とは、思へない。殊

に、言語や體度も、全然、變つて居るので、初めから不審を、抱いて居たのだが、照山の共犯としては、妙な組合せだ、と思つた。
次の室へ、一同は、送り込まれた。此處には、看守長と教誨師が居て、いろ〳〵の訓示をしたり、說教をするのであつた。
誰れ一人として、眞面目に、聞いて居るものはなく、下を向いて居るから、愼んで聞いて居るやうには見えるが、實は居眠つて居るものが、多かつた。
赭い衣物を着て、一列になつた工合は、どうしても粹なものぢやない。監獄の二字が、大きく染抜いてある手拭に食器を包んで、各自に、ぶら下げて居るのは、丸で乞食の姿である。
訓示と說教がすむと、すぐ引出されて、それから、服役掛りへ、送り込まれる。明日からの仕事を、割付けられるのだ。
規則の上からいへば、體力相當の服役をさせる、となつて居るが、役人の見分けで、無造作に極めてゆくから、不公平の割付になるのは、止を得ない。
照山と三浦は、罪名が、官吏抗拒といふので、ひどく憎まれたものか、どちらも、ひどい所へ廻された。照山は外役、三浦は米搗であつた。
其頃は、未だ外役といふものがあつて、監獄の外へ出て、市中の土工に、從事するのである。多く官用の爲めに使役されるのではあるが、時として、一私人の爲めに、臨時雇で行くのもある。
官用の方へ行くと、仕事が苦しくて、體が樂でないから、みな之れを嫌つたものだ。其代り、一私人の方へ雇はれると、仕事が官用ほど、はげしくない上に、食物をくれたり、休みの時間があつて、頗る氣樂にやつてゆけるから、誰れも喜んでゆく、といふ風があつた。

照山の外役も、甚だ辛いが、三浦の米搗は、猶ほ若しい。照山に比べたら、多少は勞働の經驗もあるが、それにしても米搗はひどい、と、思つた。

一切の手續がすむ、と、これから、各自の入る所が定まる。其時分には、もう燈火が、點て居た。

一四

昔と今とでは、監獄の事情も、大分變つて居る。どういふ風に、變つて居るか、といへば、非常に改良されて、在獄者に對する、取扱ひの上に、昔のやうな、苛酷な事をしなくなつて、早く言へば、居心地のよいやうになつて居るのだ。

今では、監獄に居る者へ、手紙を出すにしても、何々監獄内、といつたやうな事は書かずに、何町何番地と書けばそれで屆くやうになつて居るのだから、考へて見れば可笑なものだ。監獄の在るところは、番地が獨立して居るからそれで屆くのである。

監獄を、一つの住宅と視て、在獄者のすべてが、共同生活をして居る事にも、解せられる。要するに、人間の名譽を尊重する意味から、斯ういふ事に、なつたのであらう。

命令に背く、とか、規則に違犯した、とか、いふ程度でなくても、看守や押丁の、氣に容らぬ事があれば、ポカポカ殴りつける。ひどいのになると、殴られて死んだものもあるが、どれも問題に、なつた事がない。

朝の顏洗ひにも、小さい柄杓に、三ばいと極められた水で、口もそゝげば、顏も洗ふのであつた。今は、そんな事はなくして、いくらでも使へるから、よほど氣質がよい。

昔と變らないのは、食事丈けであるが、之れは經費の關係と、保健の上から、極める事で、どうも致方があるまい。

書物を讀むにしても、手紙を書くにしても、非常の違ひである。殊に、未決監に居る間は、讀書の範圍が廣くなつて、大概な雜誌は、見られるのだから、少し究屈な、圖書館にでも居る、と思へば、辛抱が出來やう。

石川島監獄の當時は、昔ながらの習慣が、多く殘つて居て、役人の方でも、強て其れを改めやう、とはせず、囚人の方では、強て其れを改めやう、とはせず、囚人の方では、猶更ら昔の儘にやつて、居たから、ずゐぶんひどいものであつた。

一番に廣い監房は、百五十人位を、收容し得る、その監長を、やつて居たのが、伊東松五郎であつた。

俗に『住吉町の爺さん』と謂はれて、大い勢力を、有つて居た、此人丈けには、役人の方から、頭を下げて、丁寧に挨拶をする、といつた風で、まア監獄の主、見たもうなものであつた。

本名は、松五郎であつたが、古い人は、梅吉と呼んで居た、一般の通り名が『住吉町の爺さん』であつた。

歳の若い時から、口數の少ない、何時も、ムヅ〳〵して居る樣子が、どことなく爺さんのやうであつた、といふ所から、さうした綽名をつけられたのである。

廿歳位の時、横濱へ流れ込んで、どことなく、博奕場を、渡り歩いて居た。男振りが綺麗で、金の切れ離れがよいから、仲間のうちでも、大哥と、いはれて居た。

其頃、博奕打ち泣せの、偵吏が居て、どこの賭場でも、鼻抓みにはして居るが、此奴に睨まれると、商賣の方が、むづかしくなるので、よんどころなく、金を與へる。それの無くなつた時分には、やつて來て厭な事をいふから、癪には觸るが、いくらか與へると、そのまゝ歸つてゆく。

政府が、禁じて居る事を、やつて居るのだから、其處に弱味もあつて、强請に應じて居るやうなものゝ、時には、斷わり度くなる事もある。萬一にも斷りをいふたら、すぐ態度が變つて、御用風をふかすから危ない。

『梅ツ、またやつて來たぜ』
『斷わツちまいねえな』
『後の祟りが恐ろしいから、さうもなるめえよ』
『いくら何だツて、あんまりしつこいぢやねえか』
『だツて、しやうがねえのだ』
『そんな事を、いつて居たら、さいげんが、あるめえ』
『そりやア、さうだ』
『何とかして、背負つてゆく奴は、ねえのか』
『偵吏を背負つてゆくと、後が面倒だからな』
『左樣か』
『昔からある事で、しやうがねえや』
翌日の晩には、その偵吏が殺られた、といつて、どこの賭場でも、大い評判であつた。
松五郎は、いつもの調子で、ブラリとやつて來た。張方に廻つて、勝負を爭つたが、非常に出來がよく、請目々々で、大分溫かくなつた。
『大層な景氣だな』
『なアに、少しばかりさ』
『だツて、近頃にねえぜ』
『ずゐぶん續いて取られたから、稀にやよからう』
『今夜は、賴むぜ』

『いゝとも……』
松五郎は、これを機會に、手を拔いて、ちよいと、一と休みした。
『オイ、梅ツ』
『何だ』
『偵吏の奴、殺られちやツたぜ』
『えツ、殺られた』
『うむ』
『氣の利いた事を行つたな』
『みんな、大喜びだ』
『誰れが、殺つたのか』
『そりやア、未だ判らねえのだ』
『左樣か』
話は、それ丈けの事で、松五郎は、下廻りの奴を連れて、遊廓へ出かけた。
五六日すると、松五郎は、御用になつたといふ、噂が傳はる。
『オイ、梅が殺つたのだとよ』
『ふふーむ、そいつア驚いたな』
『ちツとも、そんな容子は、なかつたぢやねえか』
『何しろ、いゝ度胸だからな』
『疫病神を、退治して呉れたのだから、うツちやツては置けねえぜ』

『さうだとも』

諸方の賭場から、松五郎を助ける運動費が、集まつて來る。それを、利目々々へ振り散いた。裁判は、存外に輕くすんで、懲役十年に處せられた。

それから後も、さかんに金が廻つたので、刑期一ぱい勤めずに、出て來られた。其時分から『爺さん』の綽名を、呼ばれるやうになつた。

東京へ、戻つて來て、神田へ、賭場を有つやうになる、と、何しろ、當りの柔かい男ではあるし、客に對して、無理をしないから評判がよく、賭場は、ます〳〵榮えて、ゆくのであつた。

多く有る子分のうちに、性の惡い品を、質に入れたのがあつて、その詮索が、やかましくなつた。帳面は、松五郎の名になつて居たから、呼び出されて、調べをうける事になつた、肝腎の本人はどこへ、行つたか、姿を見せぬので松五郎の身に、疑ひがかゝつた。

平生から、餘りピヨコ〳〵せぬ方で、巡査の氣受けは、良くなかつた。他から突ツ込むものもあつて、松五郎に對する、見込みは頗る惡くなり、訊問の進むに從つて、松五郎は、調べの役人を前に、皮肉な事をいふたので、いよいよ憎まれた。

『どうも仕方がねえ、己れを見込んで、子分になつた奴を、惡くいふ事も、出來ねえ、質に入れた品は、どういふ事情のあるものか知れねえが、そんな事で引ツかけられるのは、つまり、己れの不運と、あきらめる外はねえ。逃げた奴が惡いと思つたら、そのうちには、出て來るだらう』

と、すツかり覺悟を極めて、それからといふものは何を訊かれも、只だ沈默を守るばかりであつた。

横濱の前科が、見込みを惡くした事の一つで、松五郎は、終に十年の懲役を、うける事になつた。

裁判といふものは、公平にされる筈のものであるが、どうかすると、始めから有罪と、決めてしらべる事もあり、

被告に、不利の證據は、喜んで採用するが、有利の證據は、輕く觀られる事があつて、寃罪に泣く人も、少なからず在る、と聞いて居る。

陪審制度の必用も、その邊から、起つて來たのであらう、辯護人を附けるのも、斯うした事のない爲めであらう。

それにしても、つまりは、人間の爲る事であるから、間違のないといふ、保證は出來ない。大槪の所で、がまんする外はないのだ。

石川島へ送られて、十年の苦役に就いた。仲間の親分や、子分のものどもが心配して、しきりに差入れをする。未決に居る時分から、その點に於いては何一つとして不自由なく、牢獄の殿樣と、いつた風で、日を送つた。既決へ送られてからも、同じやうに見舞は、さかんに入れられた。

今と違つて、金の差入れは、役人の手を經て、行はれて居た。監獄署に保管されないで、本人の手に渡されるのは祕密に役人が、取扱ふて居たのである。

未決の時よりは、既決になつてからが、その自由は利いた。送られた金で、酒も飲めれば　タバコも吸へる、美味のものも食へたのだから、實に怪しからぬ事であつた。

買物は、役人が內所で、やつてくれる。一つの鮨が、五十錢位する。一合の酒は、五圓位した、一本のタバコが、十錢ほどになる。役人の手に、コンミツションが、それ丈け多く、はいる上に、附屆けの金を貰ふのだから、役人も勉强して、用事を達してくれるのだ。

松五郎の手には、いつも金がある。外から役人へ、附屆が充分に廻るから、松五郎の信用は、ナカ〳〵厚かつた。

贈力があつて、理窟が、よく解る。平生は啞のやうに、默つて居ても、いざとなれば、人並外れて、タンカも切る。

それで、金廻りがよい、といふのだから、獄內の氣受けは、非常に良かつた。

重罪人の多く居る、監房へ入れられたのであるが、忽ちにして監長になつた。昔でいふ『お頭』なるもので、此

位地に据ゑられたら、たとへ囚人としても、大した勢力のものであつた。

一五

『監長、新入りで御座います』

役附のものが、斯ういつて、松五郎の前へ、慇懃な態度で、兩手をついて、控へる。

『訊べて見ろ』

『ヘイ』

房内は、水をうつたやうに、寂だ。

十數名の新入りは、松五郎の前へ出て、ビク〳〵もので、頭を下げた。此うちに、照山が、はいつて居るのだが、彼は頭を下げないで、膝の上に、兩手を置いて、肱を張り、眉を怒らして居る。役附は、ヂロリと、照山を睨んで、

『前へ出ろ』

と言つた。けれども、照山は、平然して居る。

『ヤイ、汝えは、那邊だ』

『……』

『名前は、何といふのだ』

『……』

役附は少し憤然として、聲が荒くなつた。

『汝えは、啞か聾か』

『……』

『うぬッ』

といつて、役附は立上つた。照山は、無言で身構へをした。

『まア、待て……』

『だツて、監長』

『まア、待て』

松五郎は、役附を、抑へて置いて、照山に向つた。

『わしは、松五郎といふものだが、お前さんは、何といふ名で、どういふ罪名で來たのかね』

『我輩は、照山俊三といふ者だが、罪名は、官命抗拒だ』

『ははア、なか〳〵やかましいのだね』

『……』

『婆婆に居ても、さうして罪を受ける事がある。お前さんが、いくら不服をいつても、送られる事になる。それが、婆婆の規則で、仕方がない、と思つたら、此牢の中にも、それ〴〵と申合せや、今迄の習慣があるのだから、それには、從つてゆくのが本當だらう。人間といふものは威張るばかりが、能ではない。稀には、折れて出る事も考へなけりや、人間の味、といふものがない。お前さんが、いくら威張つたところで、これだけの者に掛かられたら、きつと、負けるに決つて居る。今は、明治の聖代で、昔の御牢内とは異ふけれど、それでも、人間の一人ぐらゐ、やすませてしまふのは、何でもない事だ。先刻から、容子を見て居ると、お前さんは、演說でもやる、といつたやうな人だが、鄕に入つては、鄕に從へ、といふ事を、知らねえ筈はない、よく考へて御覽、返辭は、それからの事だ』

松五郎が、諭すやうにいふて居るのを、よく聞いて居た、照山は、すツかり感心してしまつた。

『やツ　恐れ入つた。君は、偉い所がある』

頓狂な聲をあげて、斯ういふた時、松五郎は、微笑を含むだが、役附も、思はず失笑した。

之れから、照山は、役附の訊くに從つて、入獄の始末を物語つた。

照山は、松五郎の聲がゝりて、上席を得たから、外のものは、先生と、呼ぶものもあり、さん附けにするものもあつた。

市ケ谷見附の道普請で、外役につくものが多い。照山も、その方へ廻された。未決監の方からの書送りと、裁判所の内命で、斯ういふひどい事を、させられるのであつた。

三浦は、別の監房へ入れられて、相當の待遇をされて居る。照山と違つて、世間の苦勞を、積んで居る丈けに、如才なく立廻るから、房内の氣受けは、頗る良かつた。

照山と同じやうに、三浦も米搗から、外役へ廻されたので、毎朝一つに、なつて行く、未だ薄暗い時分から起されて、食事がすむと、準備にかゝる。緒い仕着せを被て、同じ色の股引姿、草鞋がけになつて、饅頭笠を冠つた圖は、よいものではなかつた。

二人づつ鎖に繋がれて、十二三貫もあらう、といふ畚に、一ぱい土を入れて擔ぐのであるから、可成り苦しい。

初めは、兩方の肩が、赤く腫れ上つて、それから破れてくる、房内へ歸つて來ると、同囚のものが、そこへ生鹽を、つけて、もみあげてくれる時の痛さは、とても形容のしやうがない。ちと荒療治ではあるが、斯うすると、早く堅まる、といふのである。

三浦は、米搗の方へ、廻されて居たのだが、どういふ譯か、外役に變へられたのだ。照山よりは、遲れて來た丈けに、一層、苦しい思ひをした。

平生から、勞働をしないものが、はげしい勞働をすると、ひどく痩るものだ。十數日して居るうちに、兩個とも、ひどく、痩せて、まるで骸骨のやうになつてしまつた。

松五郎は、ブラ〳〵して居る。役人と同じやうに、割れ竹を持つて、一同の働くのを、監視して居るのだ。

一日、房内に歸つてから、

『どうだい、辛いかね』

『ずいゐん苦しいが、もう大分馴れたから、これからは樂になるだらう』

『ハツハ、、、、、、お前さんも、剛情だね』

『生れ付きだ』

『こりやア、御挨拶だ』

『三浦の奴が、いかにも可哀さうだ』

『三浦ツて、いふと』

『我輩の共犯者だ』

『一件ものか』

『うむ』

『少し樂にしてやらうか』

『我輩は、これでもよいから、三浦を、何とかしてやつて、貰ひ度い』

『宜しい、引受けた』

かうした、苦しい場合に居ても、自分の事は頼まずに、三浦の事を心配して、頼み込む心に、松五郎は、ひどく感心した。

翌日から、二人は、役附の鎖へ繋がれたので、すツかり樂になつた。役人と、一しよになつて、ウロ〳〵して居れば、よいのだから、こんな樂な事はない。

外役に出て居ると、博徒のうちでも、顔の知れたものが、大概は、一人か二人、必ず松五郎を、見舞に來て、こツそり金を置いてゆく、時には、タバコや、酒を、渡して行くものもある。子分の奴等は、毎日のやうに來て、親分の身に、附纏つて居る。

『ア、博徒は、義理の堅いものだ。それに引替へて、我々の同志は、どういふものか、此情誼に缺けて居るが、こんな事では、天下を奪る事は出來ない。斯うして苦勞するのも、何の爲か、自分にも判らない。實に、馬鹿らしい事だ』

と、照山の頭腦の中に、暗い影が、射して來た。

『親分』

『何だね』

『我輩を、子分にしてくれないか』

『えツ』

『我輩は、自由黨を、やめたくなつた。親分の手下になつて、働いて見たい、と思ふが、どうだらう』

『手下は、可笑しいぢやないか』

『さうかな』

『どうして、そんな事を、考へたのかね』

『天下國家を論じて、志士の交際はして居ても、存外に、其心事は冷淡なもので、とても君等の足元にも及ばない。

斯うして、身も心も、苦めて居るものに對して、碌な見舞もしない、といふ有樣だから、とてもお話にならない。いツその事、君の子分にして貰つて、俠客として立つた方が、却て、意義のあるやうに思ふのだ』

『そりやア、お前さんが、間違つて居ますぜ、お前さんは、誰れの爲めに、斯うして苦むて居るのですか、それを能く考へて、御らんなさい。平生から、人民の爲めに、身を苦めて、政府と、鬪つて居るのだ、と、いつてるぢやアありませんか。さういふ大きい心で、働いて居る人が、そんな事で、考を直すやうでは、假りに博徒になつた所で長持ちのしないのは必定だ。

博徒にだつて、良いものも居れば、悪い奴も居ます。義理人情を、知らねえ奴は、ナカ〳〵に多いのですから、一概には、いへないのです。

まア、今迄の通り、自由黨で、苦勞をするのが、お前さんの利益だらう、と、私は、思つて居る』

『世間の事は、何をやつて見ても、自分の思ふ通りには、ゆくものでないから、乘かゝつた船を、うツかり降りちやいけませんぜ』

と、親切な忠告を與へた。

いつか知らず、夜は更けて、房内のものは、皆な高鼾で、眠りに入つて居る。佃島か、越中島か、よくは判らないが調子の高い聲で、船歌を、うたつて居るのが、水を渡つて、微かに聞えて來る。

その後ちは、照山の心も落ついて、外役に勵んで居たが、短い期限の懲役は、月日が經つのも早く、滿期で放免される、日が來た。

『照山さん、心得違ひをしちやア、いけませんぜ』

放免の挨拶をした朝、松五郎は、只だ之れ丈けの事をいふた。

一六

薩長藩閥と、一口には、いふて居るが、當時の政府は、全く長州派の政治家に依つて、左右されて居たのである。大久保利通が死んでから、薩州派には、是れといふて實力のある、政治家は居なかつた。黑田淸隆は、純な軍人であつて、政治の事は解らず、自分からも、近付かう、とは、仕なかつた。西鄕從道は、どことなく、大きい型の、人ではあつたが、强て政治家にならう、といふやうな人でなく、獨り松方正義は、大藏卿として、臺閣の班には、列して居ても、伊藤や井上に比べて、餘りに力が乏しかつた。

川村純義、大山巖は、其經歷に於てこそ、第一流の人ではあつたが、政治には交渉のない、海陸の軍閥に、身を置き、高島鞆之助、樺山資紀は、後に政治へも、ふみ込んで來たが、當時に於ては、全く其關係はなかつた。

長州派の方を視れば、それと反對に、伊藤博文と、井上馨が、木戸孝允の跡をうけ、引つゞき政治家として、勢力を張つて居たばかりでなく山縣有朋が、陸軍に、羽翼を張ると、同時に、伊藤井上と相應じて、薩州派に、對抗して居るので、薩州洲は、政治の上に於ては、とても、長州派の勢力には及ばなかつた。

太政大臣には、三條實美が居り、右大臣の岩倉具視と、力を合せて、薩長の專横を抑へやう、とはして居たが、既う此時分には、公卿の勢力は、殆んど地に落ちて、冬の夕陽にもひとしく、いたづらに、射す影のさびしさを、思はせるのみであつた。

殊に、伊藤の才識は、群を拔いて優るものがあり、押す力の强い井上が、その背後から、扶けて居るので、政治の實權は、殆んど伊藤の手に、歸して居た。

自由黨や改進黨が、躍起となつて、政府を、攻擊して居るのは、要するに、長州派と、鬪つて居たので、俊州派は止むを得ず、長州派の尻に尾いて、民間の反政府派に、對抗して居たに、すぎなかつた。

改進黨は、新らしい書物を讀むで居る、才子肌の人を、多く集めて居たから、筆や舌の力は、相應に有つたけれど氣魄や、意地の點に於て、遠く自由黨に、及ばなかつた。

大隈を始め、重立つたものは、最近まで、政府に居たもので、政府の實務には明るかつたが、その代り、昨日迄、衣食を與へられて居た、政府と戰ふのであるから、そこに、幾分の引け目もあつた。自由黨のやうに、思ひ切つた、態度を以て進む事は、出來なかつた。

着實穩健といふのが、改進黨の旗印の如く、なつて居て、何事にも、理詰めで行かう、と爲るから、其議論は、一般向きのものでなかつた。

自由黨の方は、全く其れと違つて　元氣の盛んなものが集り、一擧一動、すべて威勢がよく、演說の如きも、遠廻しの理屈を避けて、正面から、ぶつかつて行く風があり、一般の氣受は、頗る良かつたのである。

一自由民權『四民平等』此二つの旗印を揭げて、縱橫無盡に、まくし立てる狀は、恰も火の燃ゆるが如き勢ひで、意地と氣魄を以て、進むで來るのを視た、政府は、非常に恐れをなして、政黨に對する取締りは、頗る嚴重に、なつて來た。

政黨を取締る、といふた所で、別に手の出しやうは、ないのであるから、政黨員が、唯一の武器として賴む、集會と言論の自由を、制限するより外に、取る可き道はなかつたのである。

集會に關する、規則を改正して、政黨の本部と支部が、それぞれに、聯絡を取つて居るのを、先づ差止める事になり、絕對に之れを禁止してしまつた。

政黨本部の看板をかけるのは、矢張り集會條例の取締りに依つて、政談集會の一種と見做す、といふて、之れを禁ずる事にした。

政談演說を開くには、非常に面倒な手續きをつくり、警察署の認可を、受くる事にした。辯士の演題には、議論の

大要を添へる事にして、署長の考へを以て、認可と不認可を定めるのであつたから、演說會を開くものゝ不便は、一と通りでなかつた。

其頃の警察署は、すべて人民に向つて、絕對權を、有つて居たので、どこの署でも、可成り暴威を揮つたものだ。明治十五年の六月十二日、自由黨本部の役員會を、江東の中村樓に、開いた時、本所警察署から、警部と巡査が、やつて來て、

『屆出のない政談集會であるから、解散を命ずる』

と、いふ事であつたから、幹事の大石正巳と、林包明が出て、之れに應接した。

『我々の會合は、政談集會とは違ふ。單に本部の役員と、支部の役員が、黨務上の打合せをする爲めに、集會して居るのであるから、集會條例の取締りを、受くべき性質のものではない』

『自由黨は、政治的團體であるから、その集會は、從つて、政治の意味を含むもの、と認める』

『我々の集會は、必ず政治を談ずるものとのみは、限られて居らぬ。本日の集會は、左樣なものでない』

『イヤ、何といふても、左樣に認める』

『それは、亂暴である』

『たとへ亂暴でも、本職は、長官の命令に仍つて、解散を命ずる爲めに來たのだ』

『然らば、少し待つて下さい。一同へ相談をしてから、御返事をしよう』

『成る可く、はやくして下さい』

これから、大石と林は、元の席へ來て、此事の報告をした。此時には、既に會議を開いて何事か相談を、はじめて居たのだ。議長には、片岡健吉が選ばれて、出席者は、七十餘名であつた。

警察署の命令に就いて、これから、議論が起り、多數の意見は、

『さうした、壓制の命令に對しては、飽迄も反抗して爭ふがよい』

と、いふのであつたが、少數者の意見に依ると、

『一應は、警察署へ行つて、此會合の空しくならぬやう、談判をするのが可からう。どうしても肯かぬ、といふなら、その時に、態度を極めても、遲くはない』

と、いふのであつて、いろ〳〵の問答の末が、一應は、警察署へ談判する、といふ事に決した。

宮部襄と、林包明が、其談判委員になつて、本所警察署へやつて來た。當時の警察署は、兩國橋の北詰に在つた。林が、却々の議論家で、署長と激論するのを、宮部が、その側から仲裁して、ほどよく拔らつてゆく。

終に、署長も往生して、此集會は、認める事にしたが、只だ『幹事を定めて、屆出を、してくれ』といふのであつたから、兩個が幹事になつて、すぐ屆書を出し、此日の事は、大した爭ひにもならず、濟むだ。

次ぎには、自由改進兩黨に對して、政府の方でも、政黨をつくる事になつて、玆に立憲帝政黨なるものが興つた。

此政黨は、福地源一郎、水野寅次郎、丸山作樂の三人が、主として組織したものであるが、それについて、少しく述べて置き度い。

物語の順序としては、先づ三人の事から、いふて置く必要がある。もう五十年位の昔になつて、今の代議士でも、之れを知らぬものが多いほどであるから、況して、一般の人は、殆んど知るまい、と思ふ。從つて之を述べて置く事は、敢て無益でもなからう。

福地といふ人は、長崎の生れで、父は、醫を業として居た。福地が、江戸へ去つてから、父の死後、姉が、藝妓の置屋をはじめたので、どうかすると、藝妓屋の悴の如く、いふものもあるが、それは全く誤傳である。

江戸へ、遊學に出てから、幕府に召抱へられて、老中手附の書記になつた。今でいふと、內閣の書記官であるが、其時に、十九歲であつた、といふから、よほど天才的の人で、あつたに違ひない。

安藤對島守といふ、老中に可愛がられて、大概は、安藤の用事をして居た。安藤と堀織部正とが、條約の問題からひどい爭論をして、堀が切腹をした。當時の實情が、福地の書いたものゝ中に、詳く出て居るが、那れは又聞きの事でなく、福地の實地見聞を、其儘に傳へたので、一番に正確なものである。

其頃は、市太郎といふて、ナカ〳〵の好男子であり、道樂も、相當にしたらしく、後に、新喜樂の女將になつて、此世を去つた、名物のおきん婆アさんが、未だ吉原に遊女をして居た頃、福地は、其情人として、取扱はれたこともある。

幕府が倒れてから、明治政府へ、翻譯掛として、一寸出た事はあるが、何となく面白くないので、ぢきに止めてしまつた。元來が學者肌の文豪でもあり、殊に、洋行までして來て、世界の事情にも、一と通りは、通じて居たから、矢張り、筆を持つて、世に立つがよい、と考へて、新聞の發行を、思ひついたのである。

江湖新聞といふのを、手に入れて、之れを東京日日新聞と改め、社長と主筆を兼ねて、大に筆陣を張り、薩長の攻擊を始めた。筆禍を得て、牢に入れられたのも、此人が最初のやうに、記憶して居る。

そのうちに、東京府會が、設けられるやうになつた。議員に選ばれた。福澤諭吉と爭つて議長の椅子を得た。これが、東京府會に於ける、最初の議長であつた。

當時の府會議員を視ると、福地福澤をはじめ、いづれも一流の、紳士ばかりであつた。

尾崎行雄、犬養毅、角田眞平、沼間守一、梅川忠兵衞、青木匡、芳野世經、松尾清次郎、山中隣之助、大倉喜八郎、安田善次郎、堀越角次郎

之れを、昨今の府會議員に比べると、殆んど隔世の感がある。また、獨り府會ばかりでなく、市會にしても、其通りである。

澁澤榮一、銀林綱男、黑田淸綱、富田鐵之助、小島官吾、田口卯吉、大石正巳、奧田義人、鳩山和夫、宇川盛三

郎、中島行孝、谷干城、中澤彦吉

是等の人々が、或は議員、或は市參事會員として、出て居たのであるが、之れを、昨今の市會議員に比べて、東京市民は、どんな感じがするであらう。

福地が、府會議長として、上野公園へ、天皇陛下の行幸を仰ぎ、その願ひの聞屆けられて、陛下は、上野へ行幸、遊ばされたことがある。

明治十年の、西南戰爭に際しては、自ら筆を持つて、戰地に乘出し、日々の戰況を報道した。これが、我國に於ける、戰時報道の最初であつた。

郵便報知新聞が、犬養毅を、戰地に送つて、福地と對抗したのが、此時の事であつて、犬養の筆が、天下に認められたのは、是れからであつた。

福地が、戰地からの歸途、京都へ立寄り、陛下の御前に、戰爭の實況を、奏聞に達したので、福地の名は、更に大きく傳へられた。布衣の臣にして、單に文筆あるのみで、何等の官歷なきものが、御前講演の光榮に浴したのも、福地が嚆矢である。

『池之端の御前』だの『吾曹先生』と謂はれて、多くの人は、福地といふ姓を呼ぶものなく、福地の令名は、實に大いものであつた。

岡本武雄や、關直彥は、日々新聞が、政府の御用新聞に、なつてからの記者で、關なぞは、始め御用記者の一人であり、官僚臭い人間であつた。

福地は、其後ち收賄問題で失脚し、それから、伊藤の傘下に走り、御用記者となつたので、晩年は、甚だ振はなかつた。

水野寅次郎は、土州人であつた。初め曙新聞を主宰し、後に東洋新報と改題して、政府の御用新聞となり、さか

んに自由改進兩黨に、筆鋒を向けたけれど、初めは民權家であつた、國會請願時代には、民衆の代表者として、ナカナカ活動した人であつた。

土州に於ては、立志社の一人であつて、板垣系に屬して居たが、いつか政府に引付けられて、御用記者になつたので、土州人の間には、頗る評判が惡くなつた。

後ちには、松方首相の書記官なぞも努め、和歌山縣の知事に、なつたやうに、憶えて居るが、晩年は、土州へ歸り小さい田舍銀行の重役で、全く世間に忘れられてしまつた。その死んだ時さへ、新聞記事にも、ならなかつた位である。

もう一人の丸山作樂、此人は、却々、面白い履歷を有て居る。

明治六七年の頃、土州の岡崎恭輔と謀つて、横濱の外商、英一番館の支配人から、銃と彈の提供を受け、且軍費の幾分も出させて、朝鮮征伐を、思ひ立ち、それが露見して、終に捕縛され、終身禁獄に、處せられた事がある。特赦出獄の後、伊藤や井上に、說伏せられて、政府黨になり、明治日報といふ、新聞を起して、御用をつとめる事になつた。

思想の上からいへば、一番に古い人で、國學者の常として、攘夷に近い、國粹論者であつた。

以上の三人を結びつけて、政府は、政黨をつくらせたのである。自由黨や改進黨の唱ふる、憲法論や、國會論に反對させて、一擧に、押潰して了はう、としたのである。

何しろ、三大新聞を機關として、國民を煽りつけるのであるが、其割合に、效果はなかつた。

明治十五年の三月三十一日、新富座に於て、政談演說會を開く事になり、其事が、誇張的に報道されたので、傍聽人は、例刻前に、滿員の盛況であつた。

一七

此演說會の前日、照山は、石川島の監獄を出て來た。出迎へのものは、本部の壯士と、二三の幹事で、相應に賑はつた。

『オイ、どうした』

『うむ、此通りだ』

照山は、細い腕を捲くつて、突き出したが、自慢するほどの肉附ではなかつた。

『ずゐぶん、虐められた、といふぢやないか』

『なアに、大した事はなかつた』

『三浦は、どんな容子か』

『彼奴は、なか〳〵元氣だ』

『後から、奧宮が行つたけれど、逢はなかつたか』

『いく度も、逢つたさ』

『丈夫で居るか』

『さかんに演說を、やつて居る』

『ふふーむ、矢ツ張り奧宮だな』

『奧宮は、あの通りの雄辯だから、每晩のやうに、演說もやれば、講談もやつて居るが、どうも講談の方が、氣受けがいゝやうだ』

『演說は、よく解るまい』

『ナニ、さうでもないが、講談の方は、面白いから好くのだらう』
『どんな事を、やるのか』
『義民百家傳や、フランス革命のやうなものを、やつて居るが、パスチールの監獄破りは、いつも大喝采を、博して居るぞ』
『監獄の中で、監獄破りは面白い。そこは、奥宮の事だから、うまくやるだらう』
『僕とは、檻が違ふから、人傳てに聞いて居るのだが、大した人氣のやうだ』
『さうか、そりや愉快だ』
『それから、我々を外役に出して、虐待する事について、典獄に、面會した上で、大に痛論したさうだが、これは、立會つた看守が、非常に感心して居たぜ』
『ふふーむ』
此話中に出る、奥宮とは、健之の事であるが、彼は土州人の奥宮慥齋といふ、非常に陽明學に、深かつた人の子で、兄が二人あつて、長兄は、正治と稱し、宮城縣の控訴院長や、東京地方裁判所の檢事正を、やつた事もあり、次兄は、健吉というて、彼と同じやうに、講談をやつて、森林黑猿と、稱した男である。
後の黑猿は、本物の講釋師で、健吉には、何の因緣もなく、つまり、藝名を僭稱したものであつた。
『オイ、照山ツ』
『何だ』
『とに角、本部まで引上げよう』
『うむ、僕には、家が無いのだから、本部へでも、落付く外はない』
『本部にも、その支度はしてあるぞ』

『そりや、有難い』
『さア、行かう』
之れから、一同と共に、銀座一丁目の川岸通りにあつた、本部へ、引上げて來た。
追々に、先輩も、やつて來て、いろ〳〵慰めてくれる。そのうちには、そツと、小使錢位ゐは、置いてゆく人もあつた。
其晩は、四五人の親友と、吉原へ、くり込んで、河内樓に、一睡の春夢を貪つたが、此連中が、唯一の樂みは、之れ丈けであつた。
朝歸りは、田圃の平野で、一ぱい飲りながら、また政談に、時をうつすのであつた。
『君は、草臥れて居るだらうから、二三日は、ゆツくり休む事にしろ。吾輩等は、今夜の演說會へ行くのだから、同志を糾合する爲めに、神田へ廻るつもりだ』
『オイ〳〵、今夜の演說會といふのは、何の演說會だ』
『君は知らないだらうが、面白いものが、出來たぞ』
『そりや、何だ』
『立憲帝政黨といふのだ』
『何だ、そりや』
『政府黨さ』
『何ツ、政府黨だ。そりや、怪しからんものが出來たな』
『福地と丸山、それに水野の三人で、さういふものをつくつて、之れから政府の辯護をしやう、といふのだ』
『不埒千萬な、奴等だ』

『今夜は、新富座で、演說會を開いて、立黨の趣意を公にするのだ』
『ぶちこはしてしまへ。そんな演說をやらせたら、自由黨の權威に關するぞ』
『それだから、今夜は大擧して、押しかけやうといふのだ』
『僕も、行かう』
『君は、しばらく休むが、いゝと思ふが、それでも行くか』
『行くとも、大に行く』
『相變らず元氣だな』
『一言も、いはせるな』
『そのつもりだ』
『辯士は、三人の外、誰れが出るのだ』
『三人ぎりだ、といふことを、聞いて居る』
『さすがに、元氣は賞す可きだが、誰れでも構はぬから、一人位ゐは引下して、叩きのめすに限る』
『あまり亂暴すると、またやられるぞ』
『なアに、別莊へ行くと思へば、それまでの事だ、ハツハ、、、』
『ハツハ、、、』

一八

新富座の前は、黑山の人で、押合ひ〳〵はいらう、とする。傍聽料を、一人十錢づゝ取るので、切符の受渡して、存外に手間取るから、どうしても、人が溜まる譯だ。

昔の演說會は、すべて傍聽料を取つたものだが、昨今は、それが無くなつた。演說であるから、無料といふのは可怪しい。いくらでも取るのが、正當である。會場費、廣告料、その他の雜費も、かゝるのであるから、其費用は、入場者が、負擔す可きである。

殊に、相當の考慮をして、一つの演說に、議論をまとめる迄には頭腦も勞するのであるから、いくらでも、取つて宜しいのだ。

また、金を出しても、聞き度い、といふものでなければ、眞劍にはなれぬものだ。多くの人のうちには、そんな事に不拘、眞劍に來るものもあるだらうが、野次を、能事と心得て居る、馬鹿者は、金を取ると、いくらか少ない譯であるから、これは昔のやうに、爲るがよい、と思ふ。

舞臺の正面には、もう演題が、貼り出してある。

『勤王論』水野寅次郎、『日本帝國を誤る勿れ』岡本武雄、『勳閥政府を論ず』丸山作樂、『政黨の區別』福地源一郎

三人の處に、岡本が一人、殖えた譯で、辯士に曆はないが、政府黨の演說は、今迄に始めての事で、多少は、物好きの連中も、來て居るのだらうが、何しろ大した入場者で、約三千の人が、重なり合つてワイ〳〵いつて居る。

『どうです、顏揃ひですな』

『いくら顏揃ひでも、政府の提灯持ぢやア仕やうがねえ。どうせ、大したものぢやアなからう、と思ひますよ』

『ダツて、福地先生ほどの人が、先きの見込みの立たない事も、爲ますまいから・・・』

『先きの見込みは、どうか知らないが、今の處ぢやア、物になりますまい』

『そりやア、どうでもいゝとして、今夜は何となく、ざわついて居ますな』

『どうせ、無事ぢやア、すみますまい』

『それぢや、どうなるツてンです』
『自由黨の人達が、どうせ默つて、之れを見遁す筈はないからね』
『ぶち毀しですか』
『無論、さうでせう』
『それは驚いたね。わたしア、十錢拂つて來たんですぜ』
『誰だツて、みんなさうでせう』
『喧嘩を、見に來たのぢやねえ。馬鹿らしいにも、ほどがありまさアね』
『わたしは、それを當込んで來たのですから、喧嘩の一幕は、ぜひ見せて貰はなけりやア、つまらねえ』
『へへー、演說を聞きに來たんぢやないのですか』
『こんな演說は、どうでも、いゝのです』
『呆れたものだ』
『何が呆れた』
『だつて……』
『だつても、くそもあるか』
『何だ』
『何だとは、何だ』
双方、膝を立て直す、附近の人が仲裁して、喧嘩までには、ならなかつたが、傍聽人は、いづれも、斯んな調子で居るのだから、此會は、無事に終る筈が、なかつたのである。
水野が、先づ演壇に現はれた。

『諸君』
『何だ』
聽集は、どツと、笑ひこけた。
辯士が『諸君』といつたのに對して『何だ』といふ半疊は、ちよツと面白い。
『我輩の演題は、勤王論といふのであります』
と云つて、さらに何事か言はう、とした所へ、また、野次が飛んだ。
『日本國民に、勤王を說くは、愚の極也』
『併し、我輩の說は……』
『そんな事は、聞く必要なし』
『我輩の說は……』
『ノーノー』
『默れツ』
『默れとは何だ』
『諸君、我輩の說を、先づ聞きたまへ』
『聞かぬ。聞く必要はない』
『諸君は、何の爲めに、此演說會へ、來られたのであるか』
『騷ぐ爲めである』
『それは怪しからぬ』
『貴樣が、怪しからぬのだ』

此時、臨監の警部が、巡査に、何か命令した容子で、十名餘りの巡査は、さかんに野次つて居る、連中の傍へ來て

『オイ靜かにせんか』

と、一喝した。

そんな事に、恐れる連中でないから、猶ほ騷ぎ出した。

『命令を聞かぬと、退場させるぞ』

『生意氣な事を吐かすな』

『生意氣とは、何か』

『巡査のくせに、何だ』

一人の壯士を、巡査が押へやうとした。之れをきつかけに、十數名の壯士が一度に立つて、騷ぎはじめた。それに加勢する傍聽人もあつて、一しきり揉み合つたが、巡査の方で、手を控へたから、やうやく靜まつた。

『辯士に、質問がある』

と、いつて、場の中央に、立上つたものがある。白髮赭顏の一壯士、それは、照山俊三であつた。

『水野君、君に質問がある』

場内は寂として、それを聞かう、とする。

『何でありますか』

『我輩は、自由黨の照山俊三であるが、君に質問し度い、事がある』

パチ〳〵手を拍つものがあつた。察するに、照山を知つて居るものらしい。

『君は國會請願運動の先驅者であつて、自由民權論の先輩ではないか、然るに、今や忽然として、政府に降り、往年の自由民權派に背く、といふのは、如何なる次第か、先づ其説明から、爲す可きである。君の如き變節漢に依つ

て、勤王を論ぜられるのは、國家の恥辱である、と思ふ』

聲は大きいし、態度は良いし、そのいふ所にも、一應の條理はある。傍聽人は、一齊に拍手して、其質問を、正當と認めたらしい。

水野も、之れに對しては、充分の説明をしなければならぬが、併し、その辯明に、時間を費す事は、本論の支障にもなるし、地の辯士の邪魔を、するやうにもなるので、少し困つた。

所へ、一名の警部が、やつて來て、

『オイ、こらツ、お前は、演説の妨害をするのか』

と、叱りつけるやうに、いふた。

『誰れが、妨害をした』

『お前のする事が、すでに妨害に、なつて居る』

『辯士の立場について、質問する事が、何故惡いか』

『そんな事は、辯士と、差向ひでなすがよい』

『それは、我輩の自由だ』

『お前は、それでよからうが、外の傍聽人が迷惑するから、さういふ事は許さぬ』

『併し、一般の傍聽人は、拍手して居る』

『拍手せぬものもある』

『その別は、判るまい』

『お前は、本筋の命令を拒むか』

『君の命令は、何であるか要領を得ぬ』

『とに角、一しよに來い』

『來い、とは何だ』

『ぐづ〳〵吐かすか』

忽ち巡査に命令したから、四五人の巡査は、照山を抑へつけやう、とする。外の壯士は、照山を救はう、として、茲に巡査と、壯士の格闘が始まつた。

照山は、トウ〳〵繩をかけられ、警察署へ、連れて行かれた。

跡は靜かになつて、水野の演説は、無事にすむだが、時々起る、皮肉な批評には、水野も、大分苦むだやうで、議論は、甚だ不徹底なものである。

岡本の演説は、割合によくやつて、餘り現在の政黨に觸れず、大局から論じて行つたから、存外に、喝采を博した。

丸山のは、全く時代遲れの、守舊論であつたから、非常に野次られもしたが、人物は、しつかりして居たので、最後まで押通した。

眞打は、福地である。

さすがに福地は、滿場を靜肅にさせて、一時間以上、雄辯を揮つた。上手に遠廻しに、持ち込むでゆく、演説振りは實に巧いもので、初めのうちこそ、多少の批評もあつたが、しまひには皆は、靜聽して居た。

文章に於て、日本一の名が、あつたばかりでなく、辯舌にも、すぐれて居た。殊に、苦勞人であつた丈け、議論の持ち廻りは、實際うまいものであつた。

けれども、此晩の演説に仍つて、どれ丈けの實收があつたか、といへば、何の實收も、なかつたのである。

結局、帝政黨は、生れた丈けで、終に何事もなし得ず、半歲を出でずして、自然に解散してしまつた。世間では之れを三人政黨と稱して、いつも嘲笑のたねにしたものだ。

警察署へ、引つ張られたのは、照山の外に、十數名もあつたが、つまりは、一應の說諭で放免された。

一九

一般の政治思想は、今日のやうに、進んで居なかつたかも知れないが、その代り、政治運動をしたり、演説を聞きに行つたりする人は、昔の方が、眞面目であつたやうに、思はれる。

政黨員の心がけなども、今よりは昔の方が、堅實であつて、腰が強い。どうかすると、感情で動くものはあるが、慾得づくで動くものは、殆んど無かつた。

それから、先輩と後進の間は、極めて美しい關係を保ら、互ひに犧牲的精神を以て、援け合ふて居たので、黨の結束は、頗る强かつた。

當時の政黨は、薩長藩閥に對して、非常な反感を、有つて居たから、從つて、薩長の人に依つて、維持されて居る政府を、恰も仇敵の如く、視て居た。

政府の方でも、政黨を視るに、一つの敵國を以てしたから、其壓迫は、一と通りでない、壓迫の加はるほど、政黨の反抗は、さらに激しくなる、といふの狀況であつた。

殊に、自由黨は、血の氣の多いものが、集まつて居たので、改進黨のやうに、筆や口の先ばかりでなく、腕づくでも何でも、政府の出やう一つで、相手になる、といつた風があり、ずゐぶん思ひ切つた、遣方をして居た。

たとへば　演説の如きにしても、改進黨の人は、臨監の警吏から『中止』を食せられると、すぐ壇を下りてしまつて、まことに從順であるが、自由黨の辯士は、必ず反抗して、中止の理由を質問する、もし警吏の答へが、充分に解らぬ時は、どこまでも、突ツ込んでゆくから、いつでも、騷ぎが起つて、自由黨の演説には、辯士の拘引される事と警吏が群集と、叩き合ふ事は、殆んど常例の如くなつて居た。

それであるから、自由黨の演說は、民衆の氣受けがよく、常に盛會を極めた。併し、改進黨の演說も、政府の攻擊を爲ることに於て、さらに變りはなかつたので、その演說にも、相應の信者はあつて、政府は、兩黨の演說に依つて痛手を負はされる事には、常に苦しんで居たのである。

兎に角、演說でも聞かうとする人は、政府に對して、良い感じは、持つて居なかつた。政府の御用を達す、帝政黨なんぞは、叩き潰してしまへ、といふ氣分は、可成りに强くなつたから、新富座の演說が、騷擾のうちに終つたのは當然の事態であつた。

照山が、一人で暴れた所で、その力は知れたものだ。假りに、自由黨の壯士が、之れに力を合せて、どう騷いだとした所で、一般の群集が、之れに相應じてくれなければ、折角の努力も、水の泡になつたのである。

いづれにしても、福地ほどの人物が、此大勢を悟らず、妄りに政黨の組織を考へたのは、千慮の一失とでもいふかまことはつまらない事を、爲たものであつた。

それに前後して、もう一つ福地の失敗した事がある。此事は、政黨史の上に、重い關係のあるばかりでなく、新聞歷史の上にも、淺からぬ關係のある事だから、先づ其れを述べる事にするが、その前に、福地の事について、少しいふて置き度い。

福地は、夙く長崎を出て、江戸へ學問修業に來た。子供の時から、文才のあつた事は、ひろく知られて居た。十五六歲の頃には、他の爲めに、牌文を書いた、といふほどに、天才肌の人であつた。

幕府に見出されて、老中手附の書記となり、安藤對馬守に、多く使はれて居たので、幕閣の事情にはナカ〳〵明るかつた。福地の書いた『懷往事談』『幕府衰亡論』『幕末の政治家』其他の書物に、他の學者が、思ひ及ばぬ點のあるのは、全く之れが爲めであつた。

たとへ、天才肌の人であつた、としても、未丁年の小僧で、內閣の書記官になつたのは、恐らく此人の外はなから

う。

幕府が倒れて、明治政府へ、飜譯掛りとして、はいつたが、間もなく出てしまつた。幕府に仕へて、深い愛護をうけたものが、幕府を倒して出來た、新政府に仕へて、辛抱のなる筈がない、一時でもはいつたが、不思議な位だ。

民間へ下つて、新聞を始めてから、その文筆は漸く知られるやうになつた。

何にしろ學問があつて、文章の天才といふので、その書く所は、普通の記者と、異つて居た。隣長に對しては、强く當つて、深刻な批評を加へた。トウ〳〵讒謗律に引ツかゝつて、禁獄を食せられたが、それでも、筆を執れば、政府を、攻擊して居た。

さうした、經路を辿つて、東京日々を、日本第一の新聞にした人が、いつか政府の前に、腰を屈めて御用を達すやうに、なつたのだから、人の心はちよつと解らないものだ。

福地が、政府の味方に、なつた以上、その筆に成る論文は、いつも、政府の辯護であつたが、それでも、紙數は、一日々々と、殖えてゆく、これも、福地の筆の力が、與つてゐるのだから、福地の筆も、偉いものであつた。

二一〇

東京府會が、開けるに當つて福地は、下谷區から選ばれて、府會議員になつたのであるが、其頃の邸宅が、池之端茅町に在つた。俗に『池之端の御前』といはれたのは此時代の事で、現在の淺田正吉の居る所が、卽ち福地の建てた家である。

當時の府會議員が、昨今のそれと比べて、どれほど、人物に隔たりがあつたか、といふ事は、前にも、其顏觸れを掲げて、比較の資料に供して、置いた通りであるが、その最初の府會に、福地と福澤が、議長の椅子を爭つて、福地が勝つたので、福澤は、すぐ辭職してしまつた。それから後、福澤が、どうしても、議員にならなかつたのは、之れ

が原因で、あつたかも知れない。

世の中が開けて、教育が行屆いて、爲る事が、多くなつて來たのだから、一層、良い議員を選ぶ、必要があるのに選擧を、經る廣に、議員の素質が、惡くなつてゆくのは、どういふ理由であるか、それは判らないが、要するに、投票權を有つ、府民も、選擧に、眞の理解がないから、昨今のやうな狀態になつて、來たものと信ずる。

是れは、單に、東京府會ばかりではなく、地方の府縣會でも、同樣の事であらう、と思ふ。此一事は、大に考へて選擧民の方から、改まつて行かなければ、本當の代表政治にはならぬ。

議會だつて、それと同じやうに、墮落してゆくばかりだ。初期以來の議員と、昨今の議員と、よく比べて見たら、國民は恥かしくなるほど、痛感しなければならぬ筈だ。

候補者が、どれほど、手段を講じて、惡い誘惑を試みても、選擧民が、しッかりして居たら、變な奴を、當選させる筈はない。どんな人間でも、候補者になつたものには、必ず投票しなければならぬ。といふ譯はない。自分の理想に叶はぬものは、片端から排斥してゆくのが、本統の選擧である。

ずらりと並んだ候補者が、自分の心に、充たぬものばかりであつたら、他に適當の人を求めて、之れを押立てるがいゝ、金を使つたり、御馳走をしたり、其上に、戸別訪問と稱して、軒先に叩頭百拜するやうな、乞食にひとしいものは、とても、民衆の代表になる、資格の無い奴だから、そんなものには、一票も投じない。といつた、意氣で、選擧に臨む位ゐでなければ、眞の選良は、得られるものではない。

所が、昨今の選擧はさうした卑しい奴が、多く選ばれて來るのだから、どうせ祿なものでなく、議會でも、府縣會でも、市町村會でも、だん〳〵に、墮落してゆくのは當然であつて、結局は、之れを選んだ人達が、大きい損をしてゐるのだ、といふ事に、はやく氣付かねば、國家の前途は、どういふ事になるか、實に謀り知れぬほど、恐ろしい事である。

福地が、府會議長をしてゐた頃は。實に權威のある府會で、政府の人達も、東京府會には、常に敬意を、拂つて居た。

福地は『東京日々』といふ、機關紙を持つて居る丈けに、非常な强味がある、副議長の沼間にしても『東京横濱毎日新聞』といふ、機關新聞を持つて居るので、兩個の力を、合せてかゝつたら、政府も閉口するほどであつた。

所が、福地と沼間は、極く仲が惡いので、いつも反撥して居た。それについて、斯ういふ面白い事があつた。

下谷區は、市の北方に偏して、其中央に、上野公園と、不忍池が在り、思ふやうに、土地が發展し得ぬ、舊幕時代には、上野に、宮樣が居られて、其おかげをうけて、繁昌した。廣小路の如きも、明治になつてからは、追々に寂れてゆくばかりで、隣區の淺草には、觀世音といふ利器があつて、これを中心に、繁昌するのみならず、日增に賑やかに、なつてゆくのでそれを見るにつけても、羨ましくてならぬ。

そこで、區内の有志者が、福地をたづねて、『下谷發展の策』を、考へて貰ふ事になつた。

『先生、何とかして、此區を發展させる工風はありませんか、御考慮を、願ひ度く存じまして、御伺ひいたしました』

『下谷區は、なぜ發展し得ないのか』

『何しろ、區の中央に、大きい公園と池がありますから、どうにも、致方がありません』

『それでは、公園をくづして池をうめたら、發展するといふのか』

『……』

『君等は、狐魔になるといふ、公園と池を利用して、發展の策を講ずる考は、ないのか』

『……』

『これだけの公園、それに那の池があつて、それを利用し得ないから、下谷區は、萎縮してゆくばかりだ』

『……』

『那れだけのものを、俄かにつくらう、としても、それは出來ない。さうした天惠の公園と池とを持ち乍ら、之れを利用し得ないやうな事で、此區に住む人といへやうか。馬鹿らしいにも、ほどのあつたものだ』

『我々には、その工夫が、つかないのです』

『可し。さういふ次第なら、大に考へてやらう』

『どうぞ何分お願ひいたします』

『その代り、いよ〳〵我等の考へが、行はれた時は、區民全體のものが、大に奮勵して、財布をはたく位の覺悟は、爲るのだぞ』

『ハイ、それは、どんなにも奔走して、まとめませう』

それから、幾日かの後ちに、東京府會議長福地源一郎は、東京府民總代の肩書をもつて、上野公園へ、天皇陛下の行幸を仰いだのである。此請願は、忽ち御採用になつて、行幸の事は決した。

下谷區民は狂喜して、其前後に渉り、數日の祭典を行ふ事になり、非常な賑ひになつた。府民の全體には、公園の趣味を覺えさせ、區民には、公園の利用を敎へた。

それから、後ちは、此公園を利用するものが、團體と個人の別なく、一體に、其氣分になつて、來たから、下谷區は、之れが爲めに、陰に陽に、公園のお蔭をうける事が、非常なものになつて來た。

たとへ、東京府民總代の名義が、あつたにもせよ。此請願の容れられた、といふ事については、ひとへに福地の力と信用が、どれほどに深いものがあつたか、といふことは思はれて、空前の成功であつた。

前にも、ちよつと述べたが、西南戰爭の時、福地は、自ら戰地へ臨んで、戰爭に關する見聞を、その儘、本社へ書き送つて、紙上に掲載させる事にしたら、好評嘖々として、新聞の賣行きは、頓に增加した。

各新聞は、その打擊をうけて、日々新聞に、讀者を奪られたので、先づ郵便報知新聞が、犬養毅を、戰地に送り、福地と對抗して、戰爭記事を、掲げる事にした。無名の一書生、木堂の名が、世間に知れたのは、此時からであつた。

木堂の雄辯は、世間に廣く、知られて居るが、その文章は、あまり知られて居ない。木堂の漢藉の力は、今でも政治家中、唯一のものである。若い時分から、文章は、巧い人であつた。

福地は、戰地からの歸途に、京都へ立寄つた。伊藤博文は、最も能く、福地を、知つて居て、其時に、福地は、御前講演の光榮に、浴したのである。

戰爭の實見談を、御前に於て、天聽に達したのである。布衣の臣、而かも、何等の官歷を有せず、位階一つ、持つて居らぬ、新聞記者の御前講演は、眞に空前の事であつた。

斯うした事情から、福地の名は、天聽に達して居たのである、上野へ、行幸の請願も、福地の名が、よほど良い響きを、持つて居たし、それには又、伊藤を始め、大官連の取做しも、與つて力あつた事は、いふ迄もない。

豫て、福地に、反感を持つて居た、沼間守一は、此問題を捉へて、福地を詰責する、演說會を、市內十數ケ所に開いて、得意の長廣舌を揮つた。

『誰れか、者京府民總代の名稱を、濫用する者ぞ』

といふ演題で、福地が、單に府會議長であるが爲めに、斯うした場合に迄、府民總代と稱するは、甚だ僭越である、といふて、ひどく非難を加へた。

けれども、福地は、沼間の演說に對しては、冷笑を以て迎へ、何等の應酬もせず、默殺し去つた。

これほどの福地が、その晩年は、實に氣の毒な、境遇に落ちて、芝居の脚本を書いたり、新聞の小說に、筆を執つ

て、何時死んだか判らないほどの、寂しい最期を、遂げてしまつた。

府會を退いてから、酒造税と、芳原の賦金について、賄賂を取り、納税者の便利を圖つた、といふ事が、或事情から發覺して、終に裁判沙汰となり、それから信用を失ひ、且つ政府の御用記者といふ事も、世の指彈を取ける原因となつて、一時の名聲が、高かつた丈けに、その響きも大きく、池之端の邸宅は、借金の代りに提供して、築地の陋屋に退き、氣の毒なほど零落してしまつた。

それでも、昔を思ふ人があつて、一度は代議士に、擔ぎ上げたが、二度目には落選して、公人の生活から去つて、僅かに芝居道の一人として、やうやく衣食の料を、得て居たのである。

二一

明治十五年五月五日の社説に『名實の辯』と題して、自由黨總理の板垣退助に、攻擊を加へたのが遂に問題となつて、大きい波瀾を、捲き起した。

板垣が、共和政治を、唱へて居る如く、書き立て、それに批評を加へて、板垣は、大逆無道の考を、持つて居る、と喝破し、現に、不敬に渉る演説を、靜岡縣の某所に於て爲した、といふ、記事までも掲げた。

尤も、板垣の氏名は、明かに書いてなく、○○にしてはあるけれど、全文を讀めば、それが、板垣の事である、と解るやうには、なつて居るのであつた。

之れが爲めに、自由黨本部に於ては、俄に幹部會を開いて、對策を講ずる事になり、ナカ／＼の騷ぎであつた。

竹内綱、大石正巳、内藤魯一、奥宮健之、宮部襄、加藤平四郎、林包明、其他の連中が集まつて相談をはじめた。

次の部屋には、壯士が集まつて、之れも幹部の決定次第で、何等かの行動に出やう、として、之れは壯士丈けに、隨分はげしい議論を、唱へて居る。

『日々新聞は、福地が社長で、且つ主筆をして居るから、普通の新聞として、輕く取扱ふ事は出來ぬ。殊に、板垣總理が、共和政治の論者であるが、如く吹聽し、不敬の心を持つて居る、と書かれたのでは、決して沈默して居る譯にはならぬから、すぐに新聞社へ押かけて、福地を對手に、談判を開く外はあるまい』

と、いふ事に、相談は一決した。

幹部の相談が、斯う決したので、壯士の方でも、さらに強い覺悟を以て、側面から、新聞社へ迫らう、となつた。

照山は、例の調子で、しきりに強い事をいふ。

『福地といふ奴は、一と筋縄でゆかぬから、非常な決心をして行かう。時と場合によつては、燒打位するつもりでないと、彼れは、容易に屈服せぬぞ』

『燒打は、少しひどすぎる』

『何ッ、燒打は、ひどすぎる』

『それは、最後の手段として、とに角、談判を開く事にしやう』

『談判は、幹部の連中がやるから、我々は、直接行動に出るのがよい』

『併し、それは、今定めないでも、談判の結果を、見てからで、よからう、と思ふ』

『そんな、弱い事ではいかん。もッと、強い考を有つてゆかなければ、ナカ／＼往生する奴でない』

『よし／＼、貴樣の考も、よからう』

『イヤ、そんな輕い事ではいかん。もッと、しッかり極めてゆくのでなければ、談判の甲斐はあるまい』

『幹部が、どういふ方針か、先づ其れを聞いてからに、仕やうぢやないか』

『うむ。よからう』

壯士のうちにも、思慮のあるものが居るから、照山の、はげしい主張を抑へて、一應は、幹部の意見を聞く、とい

ふ事にきめた。幹部の方からは、奥宮と林が、代表して出席する。

『幹部は、どういふ風に、きまつたかね』

『とに角、談判をする事になつた』

『どういふ要求を、爲るのですか』

『社說を以て、那の社說を取消させる、といふ事になつた』

『そんな、手緩い事ではいかん。謝罪させる位の事を仕なければ、談判に行く甲斐は、あるまい』

『社說を、社說で取消す、といふのは、謝罪の意味に、なるのだ』

『イヤ、取消と謝罪とは違ふ』

『要するに、左樣なのだ』

『謝罪といふ事を、はツきり表示させなければ、駄目だ』

此押問答のうちに、壯士の方の鼻息は、だん〳〵ひどくなるので、奥宮は立上つて、演說をはじめた。

『諸君のいはるゝ事も、一應は御尤であるが、凡て新聞社に於て、社說を取消す、といふ事になれば、社の主張を拋棄するのであるから、それほどの恥辱は、ないのである。普通の謝罪以上に、それは有力なものであるから、諸君が、滿足の出來ぬ、といふ筈はない。此談判については、幹部も充分に研究したのであるから、どうか一任して貰ひ度い。それでも、諸君が承知せぬなれば、諸君は、幹部を信任せぬ、といふ事になる。さうなつては、不穩當であるから、是非一任して呉れるやう、切望する』

何事にも、一言なかるべからず、といつた調子の照山は、すぐ立つて答へた。

『それは、一任してもよいが、手緩い談判では、よい結果を得られまい、と思つて、我輩等は、憂慮の餘り言ふのであるから、奥宮君のいふ通り、一任はするが、談判委員のうちへ、我輩等も、參加する事は、認めて貰ひ度い』

性急で、亂暴ばかりでなく、照山も、なか〳〵うまい事をいふ。外の壯士も、これには、手を拍つて贊成した。幹部の方では、相談の結果、談判委員は、すでに決定したから、何となく同行する、といふ事にして、此折合を、つける事になつた。

二一一

東京日々の發行所は、社名を日報社と稱して、福地が社長として、且つ主筆を、兼ねて居たのである。

福地の文章は、當時に於て、最も評判高きものゝ一つであつた。難澁な漢文體の、文章の多い中に、一種の風韻ある文體で、スラ〳〵と、政治論を書流してゆく。その調子に、何ともいへぬ、妙味が有つて、實に天下一品の稱があつた。

今の所謂、新聞體の文章を、通俗的に、なだらかな物にしたのは、全く福地の努力からであつた。現代の文豪、德富蘇峰が、未だ同志社の、一書生であつた頃、福地の文章を、寫し取つて、常に之れを暗誦して居た、といふ事の如き、以て福地が、文章を學ぶ者の爲めに、どれほど、尊重されて居たか、といふ事が判る。

古い漢文調の文章へ、艶麗にして通俗的な、源平盛衰記や、太平記の文體を、巧みに綯交ぜて、一種の文章をつくり、讀む人をして、氣易く通讀させるやうにしたのは、福地の一大功績として、後の世の人は、深く敬意を拂つて、然る可きである。

政府の公報を、載せる事に、なつて居たので、全國の津々浦々にまで、よく行渡つて居たのは、此新聞一つであつた。

それだけに、福地の書いたものは、多くの人に讀まれる譯で、殊に、彼の名文に、引付けられるものは、いかに牽強附會の時論でも、いつか其れを、道理なるものとして、信仰するやうに、なるのであるから、決して輕んずる事は

出來なかつた。

それほどの人ではあつたが、惜い事に、遊蕩の癖があつて、大概は、花柳の巷に起臥し、吉原の廓の門に、題字を書いて、得意の色を示して居たほどであつた。

美しい醫者の手を、執り乍ら、書いた時の文章は、最も出來が良い、といつて、いつも人に語つたほどである。是れが、福地なればこそ、人も許してくれるが、普通のものにして、斯ういふ事をいふたら、一ぺんに信用は、落ちてしまふ。

編輯局に居た、若い記者のうちで、その將來に囑望されたものは、末松謙澄であつた。もう一人は、塚原靖であつた。

末松は、豐前の人、はやく東京へ出て、學問の修業をして居たが、初め投書して、其文筆を認められ、福地の勸誘を得て、社員になつてから、一段の援助をうけ、青萍の名は、漸く人の間に知られた。

福地の代人として、伊藤博文の所へ、よく使ひにやられたのが緣になつて、伊藤の推薦で、英國へ修業に行つた。

歸朝すると、伊藤の一人娘を迎へ、岳父の引立を得て、官界に入り、しばらく役人生活をして居たが、どこ迄も、學者肌の末松は、現代の政治家として、餘りに恬淡であつたから、大臣の椅子にも着いたけれど、間もなく罷めてしまつた。

政友會の成立前、憲政黨に入り、伊藤よりも疾く、黨人生活を味つた。乍併、これも末松の性分としては、長くゐられないのが當然で、再び官界へ逆戻りして、晩年は、樞密院顧問官であつた。

毛利藩の歷史を引受けてから、失明に近いほどの眼病に苦しみ、餘病が併發して、脆く斃れてしまつた。

福地の門下としては、此人が、第一番であつた、塚原の方は、出身も、末松と違ひ、學者肌ではなかつたが、文學の方では、歷史小說の大家として、澁柿園の名は、弘く知られた。

塚原は、三河以來の幕臣として、旗本の一人であつた。福地は、前にいふた通り、幕府に勤めた事があるので、その緣故から、日報社に入り、福地の門下と、なつたのである。

其外にも、澤山の門人は在つて、編輯局に、詰めて居たものは、頗る多く居たが、此二人のやうに、大物にならずに終つたものが、澤山に居たことは、いふ迄もない。

一一三

福地の筆は、兎に角、一代の雄であつたが、伊藤や井上に、親しくなつた結果、いつか御用記者になつてしまつて、それからの信用は、日一日と、下落するばかりであつた。

民論代表の、一大勢力であつた新聞が一夜にして、官權萬能の提灯を、持つやうになつたので、福地に對する、世間の非難は、ひどいものになり、從つて、新聞の信用も、やうやく地に墮ちたが、それにしても、文豪としての福地は、矢張り偉いものであつたから、紙數の出た事は、相變らず第一番であつた。

薩長藩閥を、擁護する爲めに、自由黨を、惡く書くことは、福地の立場からいへば、止むを得ぬ事ではあらうが、讒訴中傷は、愼しむべき事である。板垣總理が、共和政治を、唱へたなぞといふ、虛僞の記事を揭げたのは、まさかに福地の書いたものではない、としても、社長の責任上、決して『知らなかつた』といふだけで、納まりのつくべき事ではない。

大石や島本が、出かける前に、照山の一列が、先づ日報社の受付へ、やつて來た。

『オイ』

受附の老人は、輕く首肯いて、

『何ですか』
『社長は、居るか』
『へー』
『社長の禍地は、居るか』
その勢ひが、餘りにはげしかつたので、老人は、少し答へが淀むだ。
『こらツ、何をグヅ〳〵して居る」
『……』
『居るか　居らぬか、返事をしろ』
『どうで、御座いますか』
『判らんのか』
『へー』
『可矣、判らんといふなら、履み込むぞ』
『それは、困ります』
『然らば、取次げツ』
『只今は、お居でになるか、どうですか』
『はやく見て來い』
『へー』
老人は、ぶる〳〵しながら、奥へ行かうとした。その跡から、照山等は、尾いて行くので、老人は、足を停めた。
『只今、見てまゐりますから、待つて居て下さい』

『貴樣の態度が怪しいから、尾いて行くのだ』
『尾いて來たのでは、わたくしが困ります』
『困るも、糞もあるか』
『そんな、亂暴を……』
『亂暴とは、何だ』
兩者の爭ひは、だん〳〵はげしくなる。出入の多い新聞社の事であるし、編輯局の入口で、此爭ひをはじめたので、忽ち人が、集つて來た。
『何だ〳〵』
『どうしたんだ』
『亂暴をするのは、何者だ』
『つまみ出してしまへ』
之れを聞くと、照山は、忽ち一喝を加へた。
『默まれツ』
恰で、雷の落ちた時のやうに、耳がピリツとした。その聲の大きい事は、黨中第一と、いはれたほどで、此一喝には、對手が、跡へ退つたほとであつた。
『つまみ出せとは、何の事だ。全體、誰れを誰れが、つまみ出すのか。さア、つまみ出せるものなら、つまみ出して見ろ』
斯ういひながら、進み出た時は、恐ろしい劍幕で、平生から赭い顔が、一層朱をそゝいで、よく畫に書いてある赤鬼、そのまゝであつたから、いづれも恐れをなして、一人も、近づくものはなかつた。

『貴様の方で、つまみ出せなければ、我輩の方でつまみ出してやる』

と、いつて、すぐ傍に居た、一人の胸ぐらを取つた。

『先生、それは僕が、いふたのぢやない』

『貴様が、いはんでも、貴様の同類が、いつたのだから、貴様も同罪だ』

『そりやア、ひどい』

『ひどいも、くそもあるか』

照山の仲間は、之れを見るや、面白半分に、打つてかゝる。見かねて仲裁にはいるものも、片ツ端から叩き倒す。

この勢ひに辟易して、バラ〳〵逃出した。最初に、生意氣な事を、いふた奴は、はやく逃げて、もう姿を見せなかつた。

そのうちに、跡から、やつて來た、壯士の一團も、照山等と、一しよになつて、暴れ出したから、その騒ぎは大きくなつた。

工場へ飛込んで、ケースを、ひツくり返したものがある。テーブルを取つて、投げたものがある。二階の編輯室へも、四五人が闖入しかけた。

所へ、談判委員の大石等がやつて來て、一同を制した。

『君等のやうに、そんな亂暴をしては不可、談判をすれば解る問題だから、靜かにしてくれたまへ』

『しかし、此社の奴等が、生意氣な事を吐すから、將來の爲めに、吾々の腕を示して置くのだ』

『それにしても、もう可からう』

『少しは癇癪の虫が、をさまつた』

『これから、談判をはじめるのだから、少し靜かにして臭れたまへ』

『宜しい』

いづれも、暴れ者ばかりではあるが、先輩に對しては、存外に、從順の連中、殊には、壯士の取締りといつた格の、小勝俊吉が、先に立つて制止するので、すツかり靜かになつた。

一時は、どんな事になるか、と思つて、編輯の人達は、多く別室へ、逃げ込んで居たのが、騒ぎの鎮まるについて、追々に、現はれて來た。

編輯長は、中林潔といふ人で、福地の爲めには、なか〳〵忠義な人であつた。相當に學問も有つて、社内には、無くてはならぬ人物、辯舌も良く、應酬は、巧い方であつた。

談判委員は、大石を始め、谷重喜、佐伯剛平、奥宮健之、島本仲道等の人々で、中林は、應接室へ、一同を案内して、これから、談判をはじめた。

『社用で外出中、、、とんだ失禮をいたしたが、御來談の御趣意を、承はり度い』

『社長の福地君に、面會したい』

『只今、不在でありますから、代つて承はりませう』

『然らば、編輯上の責任は、すべて君が、引受けて居られるのか』

『さうです』

『社説に對する責任は、どうですか』

『……』

『社説は、福知君が、書いて居るものと信ずるが、それにも、責任を持つ、と言はれるのか、此點が明白にならぬと談判をはじめる事もならぬ』

『御尤もですが、その社説といふのは……』

『先日の紙上に掲載した、名實の辯と題する、文章について質問したい事がある。』

『あれは、社長の書いたものです』

『福地君の書いたものとすれば、その責任は、福地君にある、と思ふが、それともに、君が責任を持つ、といはれるのか』

『さ、それは……』

『然らば、福地君に、面會したい。』

『一應は、質問の御趣意を、承り度く存じますが、いかゞです』

『責任のないものとは、話す必要がない』

於、此、中林も、頗る困つた

談判委員の大石は、改めていはずとも、ひろく人に知られた、議論家で、今も猶ほ、府下の中野に、ピンピンして居るから、その人物については、説明しないが、奥宮は、大逆事件で、死刑になつた人、谷は、大阪鎮臺司令長官を、勤めたほどの人物である。島本は、曾て警保頭の椅子に、着いて居た時、尾去澤事件で、井上馨を縛らう、とした事があり、征韓論で辭職してからは、民權論者として知られ、自由黨創立者の一人であつた。

『名實の辯』といふ社説の中に、どういふ事が書いてあつたか、といふに、

『吾曹は、最も驚く可き、最も悲む可き、一事報を得たり、其報に曰く、頃日、某政黨の領袖たる、某君が、東海道某地に於て、演説せる語中に、日本人民代理○○君云々と、憚る色なく申されたり（中略）吾曹の推測を以てすれば、某君は、政黨の首領なり、急進論者の仰て泰斗視する所の先覺者なり。又、其○○君とは、即ち主上の御名なれども、憚りて之れを○○とせり云々』

といふ一節があり、之れに對する、批評を加へて居るのであるから、どうしても、板垣總理は、日本の國體を無視して、共和政治を主唱して居る人、といふ事になるのだから、自由黨の連中が、眞ッ赤になつて、怒つたのも無理はない。

二四

中林が、ギュウ〳〵いふて居る所へ、福地が、やつて來た。福地は、全く外出して居て、その不在中に、起つた騷ぎであるが、出先へ知らせがあつたから、大急ぎで、歸つて來たのである。

中林から、委細を聞いて、福地は、應接室へ、入つて來た。平生は、愛嬌の間柄で、酒宴の席に、顏を合せる事もあり、殊に、福地は、遊樂者であつたから、斯ういふ場合の態度は、割合に落ちついて、洒々落々たる風があつた。けれども、今日の談判は、普通の場合と違つて、大分けはしい容子が見えるから、福地も相當の注意を拂つて、應接する。

先づ、大石から、質問が起つて。

『我黨の總理たる、板垣君に對して、無實の事項を掲げ、論難せられたのは、如何なる理由か、それを承知いたしたい』

『それは、どういふ次第ですか』

『此社説は、君の書いたものと思ふが、果して君の書いたものに、相違ないか』

『相違ない』

『板垣君が、斯樣な演説をなしたものと、君は、信じて書かれたか』

『板垣君とは、書いてない』

『併し、全文を讀めば、板垣君といふ想像がつく』

『想像は、各自の勝手である』
『板垣君を、指したものではない、といふのか』
『必ず左様とはいへぬ』
『然らば、何人のことか』
『それは、明言出來ない』
『福地君とも、いはれる人が、卑怯ではないか』
『別に、卑怯とは思はぬ』
今まで、默つて聞いて居た、谷は、椅子を進めて、
『今、東海道を、遊說して居る、政黨の首領は、果して何人であるか。君は、それを知つて居るか』
と、急所を衝いた。
さすがの福地も、この質問には、頗る苦むで、明確な答辯が、出來なかつた。
『板垣君と、明かに書かず、讀む人をして、板垣君と思はせ、質問をうければ、言を左右にして、責任を免れやう、とする。君は、實に卑怯な奴だ』
『……』
『さア、はツきり答辯したまへ。どうしても答辯せぬなら、我輩にも、覺悟がある』
腕を扼し、眼を怒らして、ぐツと進んだ、谷の容子が、實に恐ろしかつた。同時に、隣室で、ドタン、バタン物を投げる音、叫ぶ聲が聞えると、また、其れを制して居るやうでもある。何しろ大い騷ぎがはじまつた。
照山が、肌脫ぎになつて、暴れ狂ふのを、小勝を始め、一同が、之れを宥めて居る。その騷ぎが、手に取るやうに聞えるのであつた。

福地も、終に兜を脫いて、降參する、外はなかつた。
『我輩が、地方からの通信を輕信して、斯ういふ事態を生じたについては、深い責任を感ずる』
と、いひ出した。
其處で、大石等は、福地に向つて、
『君が、自ら責任を感ずる、といへば、此問題は決するのであるが、どうして、責任を明かにするつもりか』
『諸君の要求を、一應、聞いて見たい』
大石は、奧宮の方を向いて、謝罪條件として、認めて來たものを出せ、といふたので、奧宮は、福地の前へ、それを差出した。
第一、社說に於て、其誤聞なるを辨ずる事
第二、廣告に於て、其過失なるを公示する事
第三、自由黨本部に、謝罪狀を提出する事
第四、報道者あらば、其姓名を示す事
之を見て、しばらく考へて居たが、福地も決心したものか、輕く首肯いた。
『宜しい、承知した』
『全部、承知するか』
『第四の一項丈けは、どうか赦して、貰ひ度い。之れは他人に、迷惑をかける事であるから、ぜひ削除して欲しい』
『其罪を糺さぬ事にしたら、いふてもよからう』
『公けにされると、困る』
『我等の心得丈けに、聞いて置く事にしやう』

『それでは、誰れか一人に託して、それは問題にせぬ、といふ事にして、貰ひ度い』

『宜しい』

『大石は、福地と別至にはいつた。やがて、大石は出て來て、

『福地君の誠意は認める』

と、いつたので、問題は解決して、一同は、引上げる事になつた。

明治十五年四月十二日、日々新聞の社說欄に『悔悟の趣旨』と題する、一文が出た。

『今にして、果して無根虛構の報道なることを知り、又吾曹、玆に我が妄報に誤られ、粗忽に虛說を揭載したるは、吾曹生涯の過なることを、社會公衆に告げ、之を謝す』

と、いふ事が書いてある。

廣告欄には、

『本月五日刊行の我新聞紙上に、登錄せる社說は、全く無根の說を、記せしものなるを以て、玆に其取消を、社會公衆に廣告す』

と揭げ、自由黨本部へ提出した、謝罪文は、左の通りである。

『本月五日刊行の東京日々新聞社說に於て、頃日某黨の領首某君の東海道某地の懇親會場に於て、演說せる語中に、日本人民代理〇〇君と憚る色なく申されたり云々の件より、一篇の論說を作りて、世に公けにせしに、計らずも其爲に、貴黨並に貴黨の總理板垣君の名譽を、毀傷するの結果を露はし、兼て社會をして、風波を起さしめんとする の場合に立到り候段、實に拙者が、豫期する所の外に出で、弊社に於て恐悚の至りに堪へず、元來拙者を始め、弊社に於ては、貴黨を誣て、陷れんとするの惡意を懷くものにあらず、而して、該社說の行文措辭の爲めに、却つて、豫期外の有樣に及びたるは、全く事、拙者並に探訪の粗漏なるに出で、之れを謝するに餘なしとす。自今は、

更に一層の注意を加へ、無根の浮說に原きて、如斯議論を、起草登錄仕る間敷候。乃ち玆に此書を以て、貴黨並に貴黨員諸君に對して、拙者及び弊社の過を謝する、如此、謹言』

昨今の新聞は、昔の新聞よりも、記事や論說の上に、平氣で、誤りを傳へ、猶ほ甚だしきに至つては、殊更に、事實を僞り、曲論誤報するの風がある。とても、社會公衆の指導なぞは思ひもよらぬ狀態に在るが、昔の新聞にも、斯ういふ事があつた。

論說の取消といふ事は、其社に取つては、重大の問題である。けれども、福地が、過失を知つて、之れを悔い改めた態度は、見上げたものである。

昨今の新聞が、一々斯ういふ事をしたら、殆んど毎日のやうに、やつて居なければなるまい。新聞を讀むものは、深く心して居なければ、新聞に誤られる事があらう。

此事件が、斯うした結果になつて、自由黨の要求が、全部容れられたのは、福地の方に、過失のあつた爲めでもあるが、要するに、大石等の談判が強く、且つは照山等の押寄せた勢ひに、驚いたからでもあつた。

照山といふ男は、何事でも此調子で、全く熱烈の志士であつたが、どうして、政府の犬になつたものかと、當時の同志でさへ、疑ひを抱いた位である。

一一五

新聞を、取締る爲めに、讒謗律といふ、規則が出た。筆を執つて、政治を論ずるものが、多く牢に入つたのは、その當時の事であつた。我國の新聞は、舊幕の末から行はれて、明治になつてから、著るしい發達をしたものであるが、それにしても、四五年の頃には、まだ幼稚なものであつた。

東京日々は、一番に良く發達し、日本一の稱があつた。次ぎは、橫濱每日新聞であるが、後に、東京橫濱每日新聞

と改め、横濱から東京へ、本社を移した。銀座のカフエーライオンの所が、昔の本社跡であるが、其頃は、此新聞の全盛時代で、日々新聞と對立して、頻りに政府の秕政を、鳴らしたものだ。

活字の大きい朝野新聞、紙幅の廣いので、評判を取つた郵便報知新聞、それから曙新聞、街頭を呼賣して、急に賣出したが、今の讀賣新聞、其外にも雜誌が、可成りに發行されて、言論の權威は、相談に認められた。

然るに、當時の新聞雜誌には、政府の味方は一つもなく、みな政府に、反對して居たので、政府筋の人は、新聞雜誌をひどく嫌つたものだ。

讒謗律の發布されたのも、實は之れが爲めであつて、苟も大官の御機嫌を損じたものは、誰彼れの容赦なく、牢へぶち込まれた。

政談演說が、さかんになつたのは、明治九年頃からで、十五六年の時代には、政治を談ずるものとして、演說をせざるものは無い、といふ有樣であつた。

其處で、政府は、演說を取締る、規則を出した。それが集會條例といふので、後ちに集會政社法となつたのが、則ちそれである。

表面は、取締りといふて居るが、其實は、壓迫する爲めの規則で、單に取締る、といふやうな、輕い意味のものではなかつた。

全體、日本の政治家は、何でも取締りを名として、一概に、人間の思想や行爲に、壓迫を加へやう、とする、惡い癖があつて、これが爲めに、却て民心を惡化せしめ、果は、政府に、怨みを抱き、役人を敵視するやうになり、取締りの結果は、取締り得ざる事になるのが、殆んど常例の如く、なつて居る。

斯ういふ、馬鹿らしい事を、六十年もつゞけて、居て、今だに眼のさめない、官僚的政治家の迂濶さは、實に笑止千萬である。

今の濱口内閣も、言論に對しては、充分に、理解を有つて居らぬ。自分等の都合に依つては、極端に、壓迫を加へて居る事實は、少なからず在る。

人間の思想の流れを、法律の力や、政治の干渉で、せき止め得る、と思つて居るのは、要するに、人間といふものを理解せず、時代の推移に、眼覺めて居ないからである。

私が、アメリカへ、行つた時、或都會の警察署長と、話合つた事がある。そのうちに、斯ういふ面白い事があつた。

『集會や言論の取締は、どういふ風に、やつて居ますか』

と、尋ねて見たら、この署長は、私の質問が、いかにも解らない、といふやうな表情をして、

『人間は、どこにでも集會して、互ひに意見を吐く、自由を持つて居るが、これを取締る、といふのは、全體どういふ事を指して、いふものであるか』

私は、斯ういはれたので、ぐツと、行き詰つてしまつた。

人間には、集會と言論の自由は、あるに違ひない。けれども、日本には、これがないのであるから、署長の答へを聞いて、其儘に引下る事は、出來なかつた。

『日本では、集會と言論について、斯ういふ風に、警察官が、取締つて居る』

と、こまかに說明して、アメリカの警察署では、どういふ風に、やつす居るか、と、さらに問返した。

すると、署長は、眼を圓くして、驚いた。

『それは、取締るのではなく、壓迫するのである。取締りと壓迫とは、大に相違がある。さういふ事を、されて居ながら、日本人は、よく默まつて居るね』

『決して默まつては居ない。相當に反抗はするが、强て反抗すれば、これが復た罪になつて、牢へ入れられるから、

困る』

『それでは、日本人に、集會と言論の自由はない、と、いふ事になる』

『其通りである。けれども、集會をするについて、屆出をするとか、演說會を開く時、何等かの手續きをするとか、これについて、アメリカの警察署では、どういふ風に、やつて居るか』

『人間は、集會の自由を、持つて居るから、隨意に集會して宜しい、言論は、解放されて居るから何でも、いひ度い事は、勝手にいはせてある』

『屆出とか、認可を得るとか、さうした手續きは、ないのですか』

『そんな、馬鹿らしい事はせぬ、警察官が、人間の集合を妨げたり、言論に、制限を加へたりする、といふやうな、權利の有る可き筈がないではないか』

『さうすると、一切無屆けですか』

『左樣です』

『若し、アメリカの現狀を破壞しろ、といふやうな事を、言ふものがあつたら、どうするつもりですか』

『どうも仕ない。それは、論ずる人の、自由である』

『その言論の爲めに、國亂の起るやうな事があつたら、どうします』

『其時には、始めて警察力を以てするし、且つ兵力を用ゆる事もある』

『成る程……』

私は、すつかり感心してしまつた。

しばらく、アメリカに居る間、私は、いくたびか集會を催し、演說もやれば、講演もしたが、一度も、屆けをした

事がない、何時の集會にも、巡査の影は、見えなかつた。

アメリカの巡査には、そんな事に、干渉して居る閑がないのだらう。日本の巡査は、さうした要らぬ事に、忙しい思ひをして、干渉をして居るので、人數の多い割合に、本當の成績が、擧らないのかも知れない。

何事にも、徹底して居る、アメリカの人は、斯ういふ風に、集會と言論は、解放されて居るのだから、實に羨ましくなる。

それであるから、私は、アメリカに居た間は、何となく人間らしい心持になつたが、日本へ、歸つて來たら、まるで檻の中へ、入れられて居るやうで、非常に窮屈である、といふ感じが深くなつた。

二一六

政府は、新聞と演說の、取締りをする爲めに、法律をつくつて、干渉をはじめたが、政黨に關する規則は、まだ出來て居なかつた。

そのうちに、政黨が、盛んになつて來て、それが皆な政府に、反對して居るので、さらに政黨を、取締る必要を感じた。

明治十五年の六月十二日、淺草の井生村樓に於て、自由黨が、臨時大會を開いた。つまり、對政府策を定める爲めの集會であつた。

幹事の大石正巳と、林包明が、京橋警察署へ呼出されて、無屆集會の不都合を、責められた。

其處で、兩個は、議論をはじめた。

『何の爲めに、屆出をするのですか』

『政治に關する集會は、屆出をして認可をうけなければ、不可ことになつて居る』

『どういふ規則があるのですか』

集會條例に、明かに書いてある』

『我輩等は、さういふ事は知らないが、どう書いてあります』

『政治に關する事項を、講談論議せんと欲するものは、開會三日前に屆出をして、認可をうく可し、とある』

『それは、政談演說會を、開く場合を指したもので、我輩等が、同志と共に會合して、相談をする場合に、この規則は當はまらぬ、と解釋する』

『解釋は、い、い、そちらの自由であるが、此方に於ては、政談集會と認めるから、此條項に依つて、取締る』

『それは、不當である』

『此方に於ては、正當の解釋として、飽迄も此規則に依つて、取締る方針である』

『集會條例は、政黨の成立以前に、つくられた法律であるから、條例發布後に生れた、政黨に、應用は出來ない。殊に政談演說は、一般の人民を集めて、政治を批評論議するものであるが、我黨の大會は、同志打寄りて、單に相談する、といふ丈けの事で、公開するものではないから、那の條項を當はめるのは、亂暴である』

『たとへ、何と抗辯しても、此方に於ては、左樣う認める』

『それは、壓制だ』

『壓制でも構はぬ』

大會は、明日に迫つて居るから、三日前の屆出は、不可能である。强ひて、其手續きをせねば許さぬ、となれば、大會は、延期の外ない事になるが、さうしろといふのですか』

『延期しようと、しまいと、それは、此方の關係した事でない』

『法律の解釋が違ふのであるから、我輩等は、飽迄も、此儘に開會します』

『法律に依つて、告發する』

『宜しい、告發なさい』

『猶ほ申渡す事がある』

『何ですか』

『自由黨本部の看板が揭げてあるが、結社の屆出をする迄、あの看板を、取除いて下さい』

『同志の集會する事務所にも、屆出を要するのですか』

『政治結社と認める』

『いよ〳〵以て怪しからぬ。此點についても、解釋を異にして居るから、看板を、取除く事は出來ぬ』

『職權を以て、取除く』

『飽迄も拒む』

兩個は、これで、警察署を引上げ、本部へ來てから、集まつて居るものに、之れを報告したので、一同の憤慨は、非常であつた。

井生村樓の大會は、無屈の儘、やつてしまつた。別室に、警部や巡査が、來て居たけれど、格別の干渉はしなかつたので、無事にすむだが、本部の看板は、どうしても取除かず、且つ結社の屆出もしない所から、京橋警察署の警部が、署長の命令をうけて、十數名の巡査を引きつれ、本部へ、やつて來て、看板の取除けを命じた。

折柄、本部に、集まつて居たのは、多く壯士ばかりで、幹事の加藤や宮部は、新聞社の方へ、行つて居た。外の役員はまだ、來て居なかつたので、この應接は、壯士が當つたので、騷ぎは一層、大きくなつたのである。

荒尾覺造、照山俊三の二人が、專ら其任に當り、背後には、小勝俊吉、山口俊太等がついて、暗に指圖して居る。

荒尾は、土州から、出て來たのであるが、頗る愉快な人物であつた。河野廣中の福島事件の始めが、彈正ケ原の一

撲であるが、それを煽動したのは、荒尾であつた。

彈正ケ原へ、約一萬の百姓が集まつて、三島縣令の暴政に、反對の烽火を擧げた。その時、松の樹の上に昇つて、煽動演說をやつたのが、荒尾である。この演說に勵まされて、喜多方警察署の破壞をやつた。之れが原因になつて、河野等が拘引され、國事犯事件は、これから生れたのである。

照山のやうに、突飛な所はなかつたが、やりだすと、飽迄も、やり通すのが、荒尾の性格であつた。

『君等は、どうしても、官命を拒むのですか』

『官命は拒まぬ』

『然らば、看板を、はづしなさい』

『それは、出來ない』

『何故出來ないか』

『幹事が居らぬから、我々の取計ひにはならぬ』

『幹事は、どこへ行つたのですか』

『どこへ行つたか、判らぬ』

『それは、無責任でせう』

『決して無責任ではない。幹事は、終日、本部に居らなければならぬ、といふ規則はないから、居る事もあれば、居らぬ事もある』

『幹事が居らぬ時は、之れに代る可き人が、居る筈である』

『それは、我々だ』

『然らば、幹事の代理と認める』

『幹事の代理でも、委任事項は定めてない。要するに、留守番といふ丈けである』

『幹事の居らぬ爲めに、看板は取除かぬ、といふのですか』

『然うだ』

『然らば、職權を以て取除くが、宜しいか』

『惡いッ』

『官命を拒むか』

『官命は拒まぬ』

「それでは、取除いたら良いでせう』

『幹事が居らぬから、取除く事は出來ぬ』

『それが、官命を拒む、といふ事になる』

荒尾の應接にまかせて、今迄は、默つて居た、照山は、ずツと進んだ。

『馬鹿ッ』

と、大喝したが、その聲は、耳も聾するばかり、評判の破れ鐘聲であつた。

同時に、一人の巡査は、看板を外しに掛つた。それを見ると、荒尾が、その巡査に飛びかゝつて、ぐわんと、いふほど毆りつけた。巡査は、頭を押へて、後へ退つた。

それからは、入り亂れて、毆り合になる、腕力にかけては、自慢の連中だ。蠻勇を揮つて、巡査を毆りつけ、投げ飛ばす、荒尾は、警部と、一騎討になつて、組みつほぐれつして居たが、警部の首筋へ、しつかり組みついて、高くもない鼻柱へ、わんぐり嚙みついたので、警部は、悲鳴を揚げた。

照山は、外の壯士と、力を供せ、巡査を二人、縛り上げて、ずる〳〵引ずりながら、京橋警察署へ、やつて來た。

受付の巡査が、之れを見ると、同僚の巡査が、縛られて來たので、ビツクリした。照山は、すました顏で、受付の前へ立つた。

『僕は、自由黨本部の照山と、いふものであるが、巧みに巡査の眞似をして、本部の看板を、盜みに來たものがあるので、やう〳〵縛り上げて、連れて來たから、署長へ然るべく、執次で吳れたまへ』

人を食つた、照山の容子を見て、受付の巡査は、呆れ顏であつた。

所へ、追々に、歸つて來た、巡査は、いづれも、多少の負傷をして居る。殊に、警部は、鼻の頭を嚙みとられて、流れる血を抑へながら、なさけない顏をして、引上げて來た。

それからの騷ぎは、一だんと大きくなつて、本部詰の壯士はすべて、拘引される。幹事の宮部が、談判に出かける、摺つた揉んだの末が、裁判沙汰になつて、荒尾は、二ケ月の懲役、照山は一ケ月の處分をうけた。

大石と林は、別に集會條例違犯として、各自に二圓づつの、罰金に、處せられた。

我國の政黨が、結社の屆出をして、名簿を警察署へ出す事は、此時から、はじまつたのである。

二七

明治十五年の四月、板垣總理は、岐阜市外の富茂登村、中教院の玄關先で、相原尙聚の爲めに、暗殺の難に逢ふたけれども、內藤魯一や、後藤秀一の働きで、死は免れたが、傷は、相當に重かつた。

此時に、後藤新平が、愛知縣立病院長をして居て、縣令の國貞廉平に連れられ、岐阜へかけつけて、板垣の治療をした事は、有名な事であるが、後藤は、板垣の勸告をうけて、これから後ちに、政治界へ、鞍替をしたのであつた。

板垣は、大阪病院へ移つて、療治をうけて居るうちに、大和の土倉庄三郎が、見舞にやつて來て、この時に、土倉が勸めて、板垣は全快と共に、洋行する事になつた。

土倉の寄附金、壹萬圓があるので、これを基金として、外からも寄附金を集めて、洋行の事が決すると、大石正巳末廣重恭、馬場辰猪の三人が、主として反對した。その口實とする所は、

『政府が、手を廻して、板垣に、洋行費を與へ、板垣は、歸朝の後、政府へ入る約束がある、といふ風說がある。

斯ういふ場合に、洋行するのは宜しくない。左なきだに、岐阜の一條から、黨員の心は、動搖して居る。黨員の心を安んじ、世の誤解を正してからにしても、遲くはない』

乍併、自由黨總理として行くのではなく、板垣個人として行くのなら、これは又た、別問題であるが、苟も總理としての洋行には、絕對に同意せぬ』

と、いふのであつた。

此一條について、詳しい說明をする事は、しばらく避けるが、とに角、政府筋の離間策が、うまく當つたのであるといふ說もあつた。

自由改進の兩黨が、力を一つにして、政府に對抗するやうになると、政府の不利は、いふ迄もない、幸ひに兩黨は成立の始めから、ひどい軋轢をして居るので、政府の策士が、それに乘じて、うまく改進黨を煽り、板垣に、反感を持つて居る、大石の一派を動かして、終に此內訌を起させたのだ、といふ事が、專ら傳へられた。

大井憲太郎、片岡健吉、星亨等の人々は、洋行に贊成して大石等の反對を、甚だ謂れなきものとして斥けた。

その爭ひの結果は、板垣の洋行となり、大石等は、事の行掛り上、終に脫黨してしまつた。

自由黨の受けた打擊は、相當に强くあつたが、その代り、星亨の實力が、やうやく此時から認められて、結局は、自由黨として、利益を得た事にはなつたのである。

乍併、改進黨に對する、自由黨員の反感は、此問題から、一層ひどくなり、恰も敵同士の如くなつた。

怪物として、視られて居た、星は、此機會を捉へて、先づ自由新聞を、手に入れ、社內の大改革を行ひ、記者を新

たにして毎日、報知の二新聞に、對抗の準備を整へた。

例の古澤滋が、入社したのも、此時の事であつた。植木枝盛、曾田愛三郎、小室信介、櫻田百衛、宮崎夢柳等の人々が、筆陣を張り、改進黨に對して、堂々と、戰ひを開いた。

改進黨に對する復讐——それは小さい問題のやうではあるが、當當の自由黨としては、たしかに大きい問題であつた。

地方の黨員が、改進黨に對して、憎惡の念の强かつたことは、一と通りでなく、それ等の黨員に、滿足を與へ、改進黨に、一大痛棒を如へる事は、幹部の人達が、それ〴〵に、考へて居た事であるが、さうした事について、星の特色と手腕は、また格別のものがあつた。

明治十年の西南戰爭に、大阪の藤田組と、岩崎の三菱會社が、大儲けをした事は、何人も知つて居るだらうが、殊に、岩崎の儲け高は、幾千萬といふ巨額のもので、今の岩崎家の富は、之れが基礎になつたのである。

元來、三菱會社は、其初め、極めて微々たるものであつたが、幕末に際して、土州藩の山内家が、九十九商會なるものを起し、海運の事業を始めたのを、明治になつてから廢める時、後藤象二郎の盡力で、岩崎が、之れを引受けて茲に三菱會社の運運業なるものは、やうやく盛んに、なつて來たのである。

いかに盛んになつた。といふた所て、その頃の事であるから、僅に小形の蒸汽船が十一隻ばかりで、明治七年の臺灣征伐の時なぞは、運送船の不足を感じて、政府も、頗る困つた事があつて、それが爲めに、百四十一萬弗も出して大形の汽船十三隻を買求め、之れを三菱會社に引渡し、大に海運業の奬勵に、努めたほどであつた。

これに前後して、アメリカの太平洋汽船會社が、横濱へ、支店を設け、横濱から、神戸長崎を經て、上海へ赴く航路を、開く事になつた。三菱會社は、非常な打擊をうけて、一時は窮境に陷つたが、時の内務卿、大久保利通の計ら

ひで、航路補助費として、三十萬圓を下渡し、猶ほ三十二萬五千弗の、大金を投じて、十八隻の汽船を買取り、之れを三菱會社に與へて、上海航路を開かせ、太平洋汽船會社と、競爭させる事にしたのみならず、毎年、廿五萬圓の保護金を、與へる事にして、三菱會社を助けた。

於此、太平洋汽船會社は、その競爭に苦み、毎月の損失に堪へぬ、といふ有樣に、なつたのを視て、岩崎は、大藏卿の大隈重信を說いて、洋銀八十一萬弗の資本を借入れ、太平洋汽船會社の持船から、建物倉庫等を買收し、海上の權力を、獨占する事になつた。

けれども、岩崎は、之れ丈けの事に滿足せず、進んで、大隈の力を借り、向ふ十四年間は、毎年五萬圓の航路助成金を、得る事にして、新たに起した。商船學校に對しても、毎年一萬五千圓の補助を、うける事になつた。

然るに、ピーオー會社なるものが、再び外人に依つて起され、又々競爭がはじまつたので、三菱會社は、再び苦む事になつたが、その損害は、西南戰爭の御用を引受けて、穴埋めは出來たばかりでなく、尙ほ政府から、七十一萬弗の洋銀を借下げ、十隻の汽船を買入れ、終にピーオー會社との競爭にも、打勝つ事を得た。

明治十七年迄に、三菱會社が、政府から得た金は、實に九百二十五萬圓の巨額に、上つて居る。

斯ういふ次第で、三菱會社は國家の保護をうけて、其基礎を、打ち堅めたのであるが、少しも左樣した、恩惠を考へず、賃銀を、亂暴に引上げて、乘客や荷主に、苦みをかけた事は、非常なものであつた。

大隈が、財政策を誤り、紙幣を濫發した結果、一弗の洋銀は、一圓八十錢の紙幣に當る、といふ、馬鹿な事になり會社は、船賃を、洋銀で受取る事にしたから、一圓について、八十錢の上前を、刎る事になつた。

その他、乘客の取扱は、恰も懲役人と同樣で、荷物の取扱ひについては、一切の損害に應ぜぬ、といふ、都合のよい、社則を設けて、非常な暴利を、貪つて居たが、競爭者のない獨占事業であるから、どうする事も、出來なかつたのである。

是等の遺口について、大隈が、肝煎をした事は、一と通でなかつた。斯うした秘密があつて、大隈と岩崎の關係は、堅く結ばれ、改進黨の運動費は、直接又は間接に、岩崎の手から、出て居た事は、掩ふ可からざる事實であつた。之れを捉へて、改進黨に、一大痛棒を加へたのが、星亨であつた。

一一八

三菱會社が、素晴らしく大きい物になつて、汽船も多くなり、資金も充實して、沿海の航路は、いふ迄もなく、支那方面から、沖繩浦鹽の方へ迄、手を延して行くので同じやうに海運業をやつて、居るものは、すべて三菱會社に押付けられて、競爭する力さへ、無きに至つた。

外國の汽船會社とは、二度も競爭して、これにさへ打勝つた。假し、政府の後援は、あつたにもせよ、三菱會社の努力は、また認めてやらねばならぬ。

社長の岩崎彌太郎が、豪快な氣象の人で、その配下には、川田小一郎、莊田平五郎、豐川良平、朝吹英二等の腕利が在り、殊に、石河七財といふ傑物が、附いて居て、萬事を切つて廻すのであるから、さすがに、政府の連中も、烟にまかれてしまつた形で、大概な事は、會社の要求通りになる。

況て、大隈重信が、大藏卿の椅子に居て、岩崎と、堅い握手をして居るのだから、いゝ目の出るのは、當然であつた。

海上の權利を獨占した結果が、横暴に流れる事は、敢て三菱會社ばかりではない。いづれの會社にしても、同じ境遇になれば、みな横暴を、働くやうになるものであるから、大きい事業の獨占は、單に海上の事ばかりでなく、いづれにしても、宜しくない事である。

乘客の取扱ひは、まるで豚の如く、荷物の毀損紛失については、一切の責任を負はず、賃料は、洋銀一弗を目安

として、日本紙幣に、換算することに取定め、會社取扱ひの書類は、願屆の書式に則り、社長と社員の關係は、昔の藩主と、家來の如くして、全く專制王國のやうであつた。

社内のものに對する、專制は、如何にひどくても、世間への響きは、さほどに無いが、一般の乘客や、荷主に對して、横暴を極める事は、幾たびか問題になつて、やうやく世間に非難が、耳立つやうに、なつて來た。

けれども、會社の方では、一向に反省せず、依然として、横暴は、つゞけられて居るので、一部の實業家の間には小さい汽船會社を、すべて合併させ、それに、資本を注ぎ込んで、せめては、沿海の航路だけでも、競爭させるやうにしたならば、三菱會社の方でも、いくぶんは反省もするだらうし、乘客や荷主も、之れに依つて、多少は、便利を得られる事になるから、ぜひとも、計畫を進めたいが、それに就ては、政府の諒解を、うけてかゝるのが、萬事につけて得策である、といふ事になり、然る可き人物を以て、内交渉を遂げる事に決した。

恰も好し、政府部内にもすでに、反岩崎の氣運が、少し動きかけて居た時であつたから、その交渉には、頗る手應へがあつたので、發企人等も、大にはずみがついて、運動は引續き行はれた。

岩崎の方でも、その運動が、起つて居る事は、よく知つて居たが、實は、輕く視て、馬鹿にして居たのである。

『彼等が、いかに騒いだ所で、政府の人達は、容易に動かされるものでない』

と、斯う視て居たから、鼻の先きで、扱らつて居たが、そのうちに、惡い噂が、聞えて來るので、岩崎も、少し心配をはじめた。弟の彌之助をして、政府筋へ、陳情書を出させ、三菱會社の立場について、大に辯疎する所があつた。

けれども、此時は、既に遲く、政府部内に、排岩崎の空氣が、非常に濃くなつて居て、三菱會社に對抗す可き、汽船會社を、新たに興して、その横暴を制する、といふ方針が、決まつて居たのである。

農商務大輔、品川彌二郎は、長州出身の政治家であるが、吉田松陰の門から、出たうちでは、最も氣骨がすぐれ

て居て、志士の風格を、有つた人である。大隈重信が、大藏卿の椅子に、居り乍ら、岩崎と深くなり、三菱會社の爲めに、多く盡して居る事を、甚だ不快に思つて居た。

殊に、西南戰爭に際して、三菱會社に對する、政府の保護が、餘りに過大であつたのは大隈の盡力に、依つたものである、として、頗る不滿の念を、有つて居た、そのうちに岩崎の財産が、急に膨れ出して、幾千萬圓の巨額に上つたのは、日本の將來に、恐る可き災をなすものである、といふ議論が、政府部内に、起つて來た。

岩崎家の富が、どれほど、多くなつた所で、それが、日本の災になるといふのは、ちと受取り難い話であるが、その議論を、聞いて見れば、多少の謂れもある。

『國の四方は、皆な海であるから、航海に關する權力を、一つの會社に、獨占させてしまつては、萬一の大事に際して國家の惱みとなるから、その力を牽制して、より大きくならないやうにして置く必要がある。若し、出來る事なら、もつと力を小さくして置くのがよい』

と、いふのであつた。それから、もう一つの議論は、

『國民の或一人に、あまり澤山の金を持たせる、と、これから先、政府の命令を、肯かぬやうになるのみならず、その財力を利用して、何を始めるか知れぬから、頭を一つ、叩いて置く事にしよう』

今から考へると、實に馬鹿らしい事ではあるが、斯うした議論が、遂に實現されて、三菱征伐が始まつたのだから面白い事だ。

此事について、最も骨を折つた、一人が、品川であつた。いよ〳〵大勢の定る迄は、極く秘密に取扱はれて、大隈の如きも、全然、知らなかつたのでもなからうが、例の調子で、高を括つて居るうちに、大勢が其處に落付いて來たので、急に騷ぎ出しては見たが、どうしても、喰留める事を得なかつた。

大隈は、明治十四年の政變で、諭旨免官になつたのだけれど、未だ政府に在る時から、薩長の政治家には、ひどく

嫌はれて居た。

殊に、大隈が、新聞社に、金を出して、側面から、政府の攻擊を、やらせて、居た事は、少なからず同僚の反感を買うて、それが爲めに、大隈排斥の空氣は、日を逐うて、濃くなる、折柄の北海道官有物事件、その尻を割つて、毎日新聞や報知新聞に、さかんな攻擊をさせたのも、大隈の仕事である、といふ事は、すツかり判つたから、一段と、大隈に對する、反感は、深くなつて來た。

されば、政府を退いて後も、大隈に對して、追擊を加へよう、とするものはあつて、それが三菱征伐の一原因にもなつたのである。

民間へ下つた、大隈は、立憲改進黨なるものを興して、ます〳〵薩長の政治家に向つて、對抗しようとする、その背後には、岩崎が、附いて居て、資金を貢ぐのである。といふ所から、先づ三菱會社を苦めて、岩崎の財布を輕くすれば、それが、大隈の身に取つては、重大な事である上に、改進黨の運動費にも、大に影響を及ぼすであらう、と考へて、急に三菱會社に對する、競爭會社を、興す事になつたのである。

どれほど、大隈に對する、反感があるにしても、また岩崎家の富の、著しく大きくなつたのが、將來の氣懸りである、としても、まさかに、陣頭に立つて、自分が鬪つて見やう、といふものはなかつた。三菱會社の横暴に怒つて競爭會社を興さう、といふ運動のあるを利用して、それ等の町人を援け、政府から、金を廻してやつたら、三菱會社位ゐは、どうにでも、片付けてしまへるものと思つて、いよ〳〵新會社の設立に、力を借す事に決したのである。

資本金は、六百萬圓として、そのうち、二百六十萬圓を、政府が引受け、殘りの三百四十萬圓を、三菱反對の各會社と、其外の實業家に割付けて、株式會社の組織は成つたが、風帆船會社長遠藤秀行、北海道運輸會社長堀基、越中風帆船會社藤井三吉、運送會社長岡武兵衛等が、重立ちたる發起人となつて、七月十七日には、農商務省の一室に、その創立に關する、第一の會合を開いた。

それ迄に、運びをつけるのは、容易の事でなかつたが、内面には、澁澤榮一も働いて、品川の骨折で、やうやく此に到つたのである。

生一本の正直者、品川の頭には、大隈と岩崎を、どこ迄も押付けて、その勢力を殺ぐ事が、國家の爲めである、と考へて居たので、自身に乘出して、之れ迄の運びを、つけたのみならず、創立總會の時は、發起人の前に立つて、激勵の演說まで行つて居る。

一一九

板垣の洋行について、改進黨の中傷は、存外に利目があつた。大石、馬場、末廣等の脫黨事件は、うまく改進黨に乘せられたのであつて、之れが爲めに、自由黨のうけた打擊は、相當に大きいものであつた。

幸ひに、星亨といふ、傑物が現はれて、跡の始末は、引うけてくれたから、板垣も、氣安く洋行が出來て、自由新聞も、引つづき發行し得る事になつた。けれども、改進黨に對する怨みは、骨身に泌みて居るから、何とかして、此復讐をしたいものである、といふ考は、黨員のすべてが、持つて居たのである。

政府が、共同運輸會社を興して、三菱征伐をはじめる、といふ事が、漏れて來たので、星は、その機會を捉へて、一大運動を起す可く、準備にかゝつた。

『三菱會社と、改進黨の關係を計き、大隈が、在官當時から、岩崎に、特別の庇護を加へた事を、國民の前に晒け出し、改進黨の運動費は、三菱會社から出て居るばかりでなく、大隈も、之れに依つて、うまい汁を、吸つて居るのだ』

と、いふ事情を、淡慮なく暴露したら、改進黨の前途は、是れ以上に、延びなくなるであらうから、その反對に、自由黨の利する所は、非常に大きいものがある、と信じて、星は、頻りに金を散じて、材料の收拾に努めた。

此時分に、古澤滋が、大阪の立憲政黨新聞を出て、東京へやつて來た、それを、星が引入れて、自由新聞を、書かせる事にした。人物は、少し下品であつたが、學問は、非常に深く、文章はうまいし、辯舌も巧みであるから、星は、此人を、重く用ゐて、いよ〳〵自由新聞に、三菱攻擊の論說を、出す事になつた。

明治十五年の十二月十七日から、翌十六年の五月廿三日迄、殆んど一日も休みもなく、三菱會社の內情を書いて、大隈と岩崎の關係を計いたので、漸く輿論が喧ましく、なつて來た。

新たに、汽船會社に興して、三菱會社と、競爭をはじめる、計畫に、取りかゝつた時、自由新聞に『三菱會社の弊を論ず』といふ、社說が連載された。品川は、非常に喜んで、議論の材料は、すべて自分の手から出した。その間には、森藤右衞門といふ人が居て、古澤に、材料を渡し、さらに星が、眼を通して、新聞社へ、廻して來るやうになつて居たのである。

地方に在る、自由黨の機關紙は、すべて此社說を轉載して、一齊に、改進黨の攻擊をはじめた、古澤の文章が、全くの漢文崩しであり、歲の若い、元氣の人に喜ばれるので、非常な勢ひを以て、歡迎された。

今と違つて、其頃は、新聞の社說に重きを置いて居たから、此攻擊は、相當に效果があつた。けれども、一般的にいへば、社說の讀めぬ人も、多く居るので、猶ほ進んで、之れを一般に知らせるのは、もつと、通俗的のものにする必要があつた。

星は、自由新聞を、引受けると間もなく『自由燈』なる、小新聞を發行した。繪入の總振假名附きといふので、すばらしい景氣の新聞であつた。

自由新聞では、少しむづかしいといふやうな人へは、『自由燈』を、配つて行くやうにしたから、可成り行屆いて宣傳は、爲し得た譯である。

小室信介といふ人があつて、別に案外堂主人と稱し、軟文の名人であつた。東洋民權百家傳とか、夢戀々とか、自

由演舌女文章とか、いふやうな著述もあつて、讀書子の間には、知られて居た。

此人が、艶麗流暢な、筆を以て、三菱攻撃の續き物を掲げた『海坊主退治』と題して、痛快に、岩崎を叩きつけたので、海坊主といへば、岩崎の通稱の如く、一般の人が思ふやうなつて、その、評判は、非常によく、新聞の賣行も當時のレコード、といふてよい程であつた。

於、此、改進黨の機關紙、毎日新聞と、報知新聞が、一生懸命になつて、岩崎と大隈の辯護をはじめた。併し、三菱會社が、横暴である、といふ事については、一言の辯解も、爲し得なかつた。

輿論は、漸く三菱排斥に傾き、或は大隈の不義を非難し、或は岩崎の暴富に、一種の反感を持つやうに、なつて來た。

此機會を捉へて、品川は、共同運輸會社の創設を急ぎ、いよ〳〵會社も成立して、三菱會社と競爭をはじめた。

其頃の運賃、即ち横濱から神戸迄、三等で一人、五圓五十錢取られたのが、急に安くなつて、最後は五十五錢になつた。その上に、船客に對する優遇は、實に驚くほどであつた。荷物の運賃や取扱も、それに準じて、頗る良くなつたのは、いふ迄もない。

結局は、共同運輸會社に、内訌が起り、それに乘じて、岩崎は、株の買占を行ひ、競爭を避けて、兩社の合同を策した。

政府の方でも、此上の出金には、反對するものもあつて、終に、品川は、一切を投げ出して、その成行にまかせたので、終に兩社は合併して、それから今の、郵船會社が生れたのである。

それは、後年の事であるが、自由黨は、此勢ひに乘じて、地方遊説を、爲る事に決した。其時の旗印が、

『僞黨撲滅、自由萬歳』

といふのであつた。

先づ、新富座に於て、第一回の演説會を開いた。辯士の重立ちたるものは、どういふ人であつたか、それを知る事も、興味の一つであらう。

星亨、大井憲太郎、古澤滋、城山靜一、植木枝盛、内藤魯一、加藤平四郎、新井章吾、和田彦次郎、宮崎富要、北田正董、原田藤三郎、柳英美、曾田愛三郎、奥宮健之、小室信介、林包明、坂崎紫、永田一二、甲田良造、山口俊太。

其他十數名の人々であつたが、今生き殘つて居るものは、僅に加藤、和田、山口の三四人に過ぎぬ。

斯うした、運動が始まると、本部の壯士は、忙しくなる。演説會の警戒から、辯士控席の護衛等に、それ〴〵受持ちを定めて、詰め合ふ事になるのだ。

新富座の演説會が、空前の盛況であつた。舞臺も花道も、すべて一ぱいになつて、大向ふの立見場へも、入れるほどの聽衆で、チョボ床まで、人が詰つて居たのだから、實に盛んなものであつた。

殊に、此日は、星の處女演説だといふので、樂屋うちの評判は、そればかりであつた。

二一〇

『どうだい、星君が演説をするといふのだが、どんな、風だらう』

『那の傲岸の風で、演壇に立つたら、みんな驚くだらうよ』

『何しろ、演説嫌ひの、大井君も出るし、それに、星君の初舞臺といふのだから、今日は堪まらなく、嬉しい氣がする』

内藤は、元來が、武勇の人で、辯舌の人ではない。自由黨幹事といふ肩書は、相當に世間にも、重く視られて居るから、演壇へ立つた時の人氣はすばらしいものであつた。

けれども、演說は、餘り巧みでなく、しきりに大聲疾呼して、大隈を罵り、岩崎を嘲り、果は、三菱會社を、泥棒の山賊と呼んで、之れを粉碎して、國家の害を除くこと、此の如くす可し、といつて、卓上のコップを叩き割つた。ガラスの破片が、四方へ散つて、近く居るものは迷惑したが、遠くに居るものは、大喜びで喝采した。

古澤や、植木は、さすがに學者肌の人とて、その議論も、充分に洗練されて、識者の首肯し得る、演說であつた。

正午からはじまつて、夜へつゞくのは、辯士の多い爲めで、傍聽人も、其覺悟で來て居たから、いくら時間が經つて、腹が減つても、そんな事には頓着なく、熱心に聽いて居るのであつた。

星が、演壇に立つ頃は、もう夜に入つて居た。

『我輩は、星亨である』

と、いつて滿場を睨んだ時、わツと、吶喊の聲が起つた。

『立憲改進黨は、三菱會社の保護を、うけて居る、政黨である。而して、大隈總理は、最近まで役人をして居たのであるから、政府の爲した事について彼是れいふ可き資格は、ない筈である。況や、天下の政黨とも、ある可きものが、一私立會社の保護の下に、立つて居るとは、實に意氣地のない事である、大隈總理以下のものが、多く免職された役人であつて、それ等のものが、組織した政黨であるから、立憲改進黨を改めて、これからは、免職黨と稱す可きである』

と、口を極めて、大隈を罵り、岩崎との關係を、むきだしに、やツつけたから、傍聽人は、やんやといつて、手を拍つ。

全くの俗談平話で、少しも難解の漢語を使はず、江戸ッ子が、差向ひで、話込む調子を、その儘の演說であつたから、誰れにも、能く解つた。

『うまいものですな』

『何しろ、むづかしい事を、いはないで、噛んで含めるやうに、いふてくれるから、私等には、此上もなく、よく解りますよ』

『時々に、ベランメーが出ますね』

『左官屋の子だ、さうですからな』

『へー、偉いものが出來たもんですね』

傍聽人の噂は、眞僞とりまぜて、いろ〳〵だが、とに角、星の演說は、上出來の方であつた。

翌日は、本部に會合があつて、全國一般へ、遊說員を特派して、此勢ひを遁がすなといふ、事になつた。

東海道の方へは、城山と植木が、行く事になり、東北の方へは、和田が、行く事になつた。それは、第一陣であつて、第二陣、第三陣と、それ〴〵に組合せが出來て、追々に、押出す事になつた。

一組毎に、二人以上の壯士が、從いて行く、東海道へは、照山と外一人が當てられた。先づ、横濱を振出しに、東海道筋を大阪迄、やつて行かうといふのである。

横濱の演說會が、また盛況を極めて、棧敷の下へ、突つかい棒をする、といふ騷ぎで、入口の方は、メチヤ〳〵に破られてしまつた。尤も、横濱丈けは、新富座の通りの辯士で、それから先きは、植木と城山が、一組になつて、行くのであつた。

『照山君、これからは、一と足さきに行つて、土地の同志と、萬事の打合せを、やつてくれたまへ』

『宜しい』

『君等の方で、すつかり準備の出來た所へ、我々が行く、といふ段取りにしたいのだ』

『委細、承知した』

『小さい町は除いて、今度は、大きい所だけにしよう』
『藤澤から、申込みがあります』
『申込みのあるのは、小さい所でも、辭退は出來まい』
『もう承知してやりました』
『その先は、すぐ靜岡か』
『イエ、小田原からも、來て居ます』
『左樣か』
『まア、然るべく賴む』
『宜しい』
城山が、細かい事に、氣のつく人で、照山を相手に、行く先の手筈を、つけて居る。照山は、とに角、藤澤へ、先乘をする事になつた。
その頃は、まだ汽車が、充分に通じて居なかつたから、地方遊說は、昨今のやうなものでなく、相當に苦しいものであつた。
併し、俥に乘つて、宿驛を、一つ〳〵通つてゆく氣分は可成り面白いものであつた。その代り、萬事が呑氣で、今のやうに、手ツ取り早い事は、出來なかつた。當時と、今を比べると、まア夢の如き感がある。

二一

東海道筋を、受持つた遊說員は、植木枝盛、城山靜一、小室信介の三人であつた。之れに附添ふ壯士は、照山外三人であるが、そのうちの二人は、先から先へと、二日ぐらゐ先に乘込んで、其他に、開會の手順をつけるのが、役目

であつた。跡の二人は、護衞の意味で、遊說員の側を、離れずに居る。先乘の壯士は、土地の同志者を訪ねて、開會の準備、廣告の方法、其他の雜事を扱ふので、可成り忙しい役目であるが、跡へ殘つて、護衞をするのも、相當に氣苦勞はある。照山は、辯士兼護衞といふのであるから、一層忙しいのであつた。
全國へ別れて、十幾組の遊說員が、出かけた。いづれも優劣のある筈はないが、城山と植木に、小室の加はつた、この組合せほど、すぐれたのは、他に無かつた、といふ評判である。
一言に、演說といふても、ピンから、キリまであつて、眞の演說となれば、さう誰れにでも、出來るといふものでない。口から出まかせに、ベラ〳〵やる丈けの事なら、誰れにも出來るが、演說らしい演說をするには、相當の苦心を要するものだ。
體度と修辭は、最も大切であるが、それよりも、聽者を引付ける、自然の力がなければ、眞の演說とはいへぬ。其處に、演說の至難しい所がある。
徒らに拍手喝采されたから、といふて、聽者を引付け得たものと、思つてはならぬ。拍手や喝采は、少し器用な辯士なら、何でもなく、爲せることが出來る。
聲を、上手に使つて、抑揚を巧みにし、聽者が乘込んで來たな、と思つた所で、テーブルを一つ、トンと叩けば、きツと、拍手は起る。義太夫のサワリは、あまり巧くないものでも、手を叩かせるが、演說も、それと同じ事であつて、拍手や喝采があつた丈では、本當に、聽者を引付け得たものとはいへない。
多數の聽者に、バタ〳〵手を叩かせても、少數の識者が、苦い顏をしたら、その演說は、落第點になる。さればといふて、少數の識者を首肯せても、多數の聽者に、理解し得ない事を、いふたのでは、演說の本旨に、叶つて居ないから、それも及第點にはならない。
少數の識者と、多數の聽者と、双方に『成程』といはせなければ、眞の演說として、受け入れる事は、出來ないの

であるから、演說といふものは、至難しいのである。

植木は、古い民權家で、文章も、善く書いたし、辯舌も、却々に良かつた。鋭い舌は、持つて居なかつたが、ヂリヂリと、攻めつけて行く所に、何ともいへぬ妙があつた。

併し、其缺點とも、いふ可きは、文章、辯舌、ともに長きに失する傾きがあつて、どうかすると、對手に、倦怠を起させる弊があつた。

それにしても、當時に於ては。第一流の辯士として、天下に、盛名を馳せたものだ。極く眞面目な演說振りで、洒落や場當りは、あまり言はなかつた。

城山は、眞に雄辯の人であつた。二時間でも、三時間でも、聽者を厭きさせずに、いつか知らず、引付けてゆく。その力は、頗る偉いものであつた。

議論に、多く例を引いて、時に諧謔も交へ、古今東西の歷史に詳しかつたので、一般の聽者に、よく納得がゆくばかりでなく、高尙な學理を、俗に崩して說くから、識者も、耳を傾けて聞いた。

此二人の間に挾まつて、小室といふ、艶語りが居たのだから、實に良い組合せであつた。

小室の文筆については、前に述べた通りで、稗史小說に、筆を執り、義太夫の新作物なぞも作つたし、又、支那小說の飜案もする、といふやうに、まことに、流麗な筆を、持つて居たが、辯舌も、なだらかに滑つて、淀みなく、美文的の修辭が、續々と、出て來るので、聞いて居て、胸がすツとするほどであつた。

開會の趣意は、いつも、照山の受持ちで、之れが破鐘のやうな、大きい聲を出して、ガン〳〵怒鳴り立てるのを、地方の人は、ひどく喜んだもので、存外に、評判が良かつた。

神奈川、戸塚、沼津、三島を經て、いよ〳〵靜岡へ、乘込んで來た。

岳南自由黨の名は、廣く全國に、知られて居た。本部は、靜岡に在つて、黨員には、負けぬ氣の人が多く、平生の主張は、急進論に、傾いて居た。

黨の牛耳を、取つて居るものに、舊藩の士族が、多く居たので、議論は、いつも强い。德川慶喜が、靜岡へ、引移る時、一しよに移住した、旗下の士は、金谷ケ原に行つて、茶園を開くものがあり、また、三方ケ原の開墾に、從事するものもあつて、その餘のものは、靜岡に、落付いて居たから、初め板垣の、自由民權論に贊成して、薩長藩閥に反對の自由黨が成立する、と、我れを先きに、走せ加はつたので、其議論も、自から强くなるのは、當然の事であつた。

老成に近い人としては、前島豐太郎が居て、稍や穩健な、味方を集め、先輩風を、吹かして居たが、それに對抗して、若い連中は、鈴木音高を押立て、急進論で、押通さう、と爲る。

同じ黨內に居て、漸進と急進の二つに別れ、互に爭つては居るが、平生は、矢張り同黨員として、政府反對の運動は、つゞけて居たのである。

栃木縣の荒川高俊が、東京から乘込んで、前島の主宰して居る、東海曉鐘新報社に入り、侃諤の議論を、書いて居たうちに、先づ前島が、一場の演說を曲解されて、不敬罪に問はれ、之れを辯護した、荒川も、引つゞいて入獄したので、その跡は、前島の伜、格太郎が、新聞の發行は、つゞけて居たけれど、議論の事については、鈴木等の應援を求めて、差閊へなきを得た。

鈴木の味方には、湊省太郎といふ、才物が居て、鈴木派の自由黨員を、上手に、扱つて居たので、前島派に比べると、遙に勢力があつて、濱松や岡崎の黨員と、うまく連絡を取つて、ナカ〳〵さかんに、やつて居た。

鈴木は、初め山岡家に生れて、鈴木家を相續し、歲、二十一にして、代言人となつて、フランスの書物も、少しは

讀めるし、辯舌も達者で、商賣の方も、非常に榮えて居た。

色白の丸顔で、長く垂れた髪は、肩を掩ひ、風采の堂々たるところから、ひどく、一般の氣受けが良かつた。

湊の父は、新八郎といふて、江戸の講武所に、劍術の師範を、勤めた一人であつた。伜の省太郎は、其頃から、肋膜を病んで、常に醫藥に、親むで居たが、生來の才氣は、同輩を壓して、黨中唯一の人物として、崇敬の的になつて居た。

深い學問は、なかつたけれど、文章も、ちよつと氣の利いたものを書き、演說は、すでに神に入つて居た。

私が、長い間の經驗からいへば、湊位ゐの演說家は、多く無い、と思つて居るほどで、聽者を引しめてゆく、力の强かつた事は、實に驚く可きものがあつた。

三一一

遊說員の一行が、いよ〳〵靜岡へ乘込む、と、先づ懇親會を開いた。同志の集まるもの、二百に近く、その盛況は、演說會にも影響して、定刻前に、滿員の札をかけるほどであつた。

此處では、一行の外に、鈴木と湊が、辯士に加はつたので、照山の演說は、止めさせるつもりで居たのが、本人の希望で、矢張り、やらせる事になつた。

植木と城山の名は、地方へ廣く知られて居るので、その演說を聞かう、として、集まつて來たのが、大半であつた事は、いふ迄もない。

開會の前から、場内に、何となく騷がしい、容子の見えるは、どこの演說會にも、よく有り勝ちの事であるが、今夜の演說會の騷がしさは、いつものと、少し異つて居た。

靜岡縣には、改進黨の勢力も、相當に强くあつて、市中の人は、いづれも、中産以上の商人の事であるから、あま

り露骨に、反對はせぬが、郡部に於ける、自由黨に對する反抗は、可成さかんであつた。

何しろ、演說の流行の、絶頂ともいふ可き、その頃の事であるから、郡部から、やつて來たものは、少なからずあつた。その元氣の連中には、改進黨のものも、多く居たのが、始めから反對してやらう、と、氣構へて、開會の時刻を、待つて居る。

群村の青年は、互に顏を、知合つて居るから、自由黨のものは、改進黨のものが、來て居る事も、よく知つて居たのである。表面は、おとなしく、挨拶位ゐはして居るが、内心には、敵意を、持つて居て、睨み合ひの形で、とりどりの批評をして、居るから、いつもの騷がしさとは、それが爲めに、異つて居るのであつた。

『諸君』

と叫んで、演壇に立つたのは、照山であつた。白髮にして赭顏、年老つた人のやうで、よく見れば　まだ二十臺の若盛りである。その異樣の風采は、先づ人の注意を引いた。

『我輩は、本部特派員の一人、照山俊三である。我輩等の遊說は、どういふ趣意からであるか、といふ事については植木、城山、小室の三君から、縷々述べられるのであらうから我輩は、先づ要を摘んで、開會の趣意だけを、述べる事にする。

三菱會社の岩崎彌太郎といふ曲者が、國家の保護をうけて、暴富を致した事については、既に諸君の知らるゝ通りであるが、之れを援けて居た、政治家の在ることを、諸君は、知つて居られるか。否、諸君は、知つて居るまいから、我輩は、率直に、其氏名を擧げよう、彼の氏名は、大隈重信である』

此時、拍手の音が起つて『ヒヤ〳〵』の叫びさへあつた。

『我輩は、彼を目するに、國賊を以てする』

照山が、言葉を續けると、

『ヒヤ〳〵』

『ノウ〳〵』

『默れッ』

『馬鹿ッ』

照山は、滿面、朱をそゝいで、赭い顏が、ます〳〵赤くなつた。

『靜かにして、我輩の說く所を聞け』

『聞かぬ』

『聞く必要なし』

『ノウ〳〵』

『パチ〳〵』

改進黨の青年が、一齊に野次る。自由黨の青年も、なか〳〵負けては居ない。

『默れッ』

『靜かにしろ』

『默らぬと、なぐるぞ』

それに對して、改進黨の青年が、

『なぐるなら、なぐつて見ろ』

と、いふたので、自由黨の青年は、總立ちになつて騷く。

臨監の警部や巡査は、どこに風が吹くか、といつた調子で、だまつて見て居る。

壇上の照山が、破れ鐘のやうな、聲を出して、怒鳴りつけるけれど、多數の聲に壓せられて、とても駄目である。

持前の癇癪が、ムラ〳〵と、起つて來た。

土間の前側に居て、さかんに野次つて居る、青年の一團があつた。照山は、それを眼がけて、演壇を飛下りる、と猛然、打つてかゝつた。

青年の方では、一人の照山を抑へて、なぐりつけやうとするが、照山の力强く、殊に、必死の奮鬪に、持てあまして居る。

そこへ、自由黨の青年が、應援に飛込んだから、騷ぎは一層大きくなり、滿場は總立ちとなつて、なぐり合は、各所に起つた。

此時に、臨監席の巡査が、やうやく引別けにはいる、主催者側からも、仲裁者が來て、辛うじて騷ぎは鎭めたが、後しばらくは、動搖して居て、容易に靜かに、ならなかつた。

『照山君、ア、ふ亂暴をしては、いかんね』

と、植木がいふた。

今、引上げて來たばかりの照山は、未だプン〳〵怒つて居る所だツたので、之れを聞き咎めた。

『何が、亂暴です』

『何が、ツて辯士が、傍聽席へ飛込んぢやいけない』

『何故、いかんのです』

『言論を以て立つものは、どこまでも、言論で押して行かなければ、いかんよ』

『ガヤ〳〵騷いで、妨害するから、なぐりつけたのが、惡いですか』

『それは、君の言論に、權威がないからだ』

『何ですッて……』

照山が、腕まくりをして、植木に、追つてゆく、それを見て、城山は、すツと、二人の中へ、割つてはいつた。

演壇には、湊が立つて、一流の辯舌を、揮つて居る。聽集は、やうやく靜かになつて、湊の演說を、傾聽して居るらしく、時々に起る、拍手の音は、控所へも、響いて來る。

『植木君は、君の先輩ぢやないか、腕まくりをして抗辯する、といふのは、宜しくない。それが、君の癖で、甚だ良くない事だ』

『しかし、我輩の言論に、權威がない、といはれては、我輩の面目上、默しては居られないのです』

城山は演壇の方を指さして、

『湊君の演說は、拍手して聽いて居るぢやないか、一人も妨害はして居ない。あれが、言論の權威といふものだから君も、少しは反省しなけりやいけないよ』

『……』

『君は、決して惡い人ではないが、とかく、疎暴でいけない。まア、今夜は、我輩と君で、一しよに呑みながら、大に話して見たいから、此場の事は、我輩に、任せてくれたまへ』

『……』

湊の演說がすむと、植木が、演壇に立つた。今は、反對黨の青年も、全く閉息してしまつて、植木の巧妙な演說に恰も醉つた如く、なつて居る。

鈴木が代り、小室が出て、最後に、城山が、演說をはじめた頃には、照山の姿は、いつか控所に見えなかつた。

二二

宿屋へ引上げてから、城山は、離れた一室へ、照山を、つれ込んで、しづかに說得をはじめた。

『君の性質を、我輩は、能く知つて居るが、多くの黨員のうちには、君を、單に疎暴な人として、忌み嫌つて居るものもある。

左樣いふと、君は、不快の感じを、起すかも知れないが、斯ういふ事は、隱して置いては、いけない。何でもはッきり、いふに限る。

今夜の事にしても、君は、左樣思はないか。君の態度は、あまり立派なものとは、いへなかつた。その元氣は、愛す可きだが、疎暴の詈は、免かれない。辯士が、傍聽席へ飛込んで、腕力を揮つたのでは、どう辯解しても、人は許さぬ。

植木君が、那アいふたのは、當然である、と思ふ。君の平生は、ナカ〳〵理解があつて、よく人のいふことも聞くし、思慮も、相當に有るのだが、一たん怒ると、前後の見さかひなく、腕力を揮ふ、惡癖があるので、どうしても、嫌う人が、出て來る。君の爲めに、まことに惜む可き事だ。

今度の運動を、起すについても、君が、一しよにゆく事をさけるものが、多く、つまり、我輩が引うけて、此組へ加へる事にしたのだが、今夜のやうな事があると、我輩の責任にもなるのだから、少し氣をつけてくれないと、困る』

今迄、だまつて居た、照山は、やうやく口を開いた。

『いや、僕が惡かつた。とんだ御心ばいをかけて、すまなかつた』

『御互の間であるから、詫言なぞいふ必要はないが、少し愼むでくれたら、君も、一流の有志家には、なれるのだか

らね』

『よく、解りました』

『さういふてくれると、我輩も、愉快だ』

所へ、城山が、註文して置いたものか、酒と肴が運ばれた。

『さア、一杯やりたまへ』

と、いつて、城山が、盃を献した。

『イヤ、これは……』

照山は、受けた酒を、一口に、飲み乾して、城山へ、盃を返した。

それから、城山が、いろ〳〵面白い話をして、照山をなぐさめ乍ら、夜をふかし、二人は、その室へ、床を並べて寢た。

翌朝は、土地の同志者が、やつて來て、植木を相手に、話込むものもあれば、城山に、教へを乞ふて居るものもあり小室のやさしい話に、興がるものもあつて、三人は、應接に忙しく、照山の居らぬ事を、あまり氣にもして居なかつた。

『ヘイ、お手紙で御座います』

といつて、宿屋の男が、城山へ、手紙を渡した。それは、照山からの、手紙であるから、城山も、不審に思つて、披いて見ると、

『冠省、昨夜は深更まで、御親切なる御訓戒、ひとへに痛入候。就ては、少しく思ふ所有之、一行の列を離れて、歸京致し候間、不悪御含被下度候。植木小室の兩先輩へは、先生より宜敷、御傳聲被下度候、敬具』

と、認めてあつた。

城山は、太い息を吐いて、

『矢ツ張り、駄目であつた。惜い男だが、身の終りは、良くあるまい』

と、獨言のやうに、つぶやいた。

『城山君、照山は、どうしたのです』

『歸京する、といふて來た』

『さうか、あの男は、駄目だ』

『我輩は、彼を救つてやり度い、と思ふて、昨夜も、泌々、說いて見たが、矢張り駄目であつた』

植木は、聲をひそめて、

『あゝいふ性質の男は、どうかすると、存外に變心し易いものだから、少しも油斷は出來ないよ』

『變心……』

『極端から極端へ走つて、とんだ事を、仕出來すものだ』

『然うかね』

『先達も、我輩の所へ來て、煙草盆へ、何かくすべて居るから、それは何かといつたら、ニヤリと笑つて、爆裂彈の原料だ、と答へたので、我輩は、その時にも、ひどく叱りつけてやつた。

どうも、あゝいふ男は、變心し易いものだ、と思つて、我輩は、餘り近付けないやうにしたのだ』

『そんな事が、あつたのか』

『うむ』

『フランスの革命小說にも、あゝした男が居て、いつかそれが、國事探偵に、なつて居るのを見た』

『……』

『元氣の有るのはよいが、主義も何もなく、只腕を突ツ張つて、强がる奴は、どうしても、行ひがよくないやうだ』

『それも、左樣だな』

鈴木が、やつて來て、

『やア、遲くなつて濟まない。今朝は、事件の依賴人が、やつて來て、ちよツと、立ち難かつたものだから、失禮した』

『商賣繁昌は、何より結構ぢや、ハツハ、、、、、』

『それに、照山君が、やつて來たので、また長くなつてね』

城山は、透さず、鈴木に向つて、

『どんな、話があつたか』

と、尋ねた。

『東京へ、歸ることになつた、といふて、少しばかり都合しろ、といふたから、今渡してやつた』

『えツ、旅費を……』

『うむ』

『いくらばかり、渡したね』

『なアに、僅少ばかりだ』

『しかし、どれ位渡したのか』

『二十圓渡した』

『さうか』

植木と、顏を見合せた。

『君等と、相談の上では、なかつたのか』

『少しも知らなかつたのだ』

『こりや、驚いた』

『まア、宜しい。それは、此方から辨償する』

『そんな事は、どうでも、よろしい』

『、、、、とんだ、御迷惑をかけて、すまぬ』

『何、こんな事は、年中だからな』

一行は、豐橋へ向つて、出發した。鈴木と湊は、一行に加はつて、行く事になつた。

鈴木と湊は、靜岡國事犯で、有期徒刑に處せられ、北海道の獄へ送られた。それは、明治二十年の事であつたが、湊は、空地の獄で斃れた。

鈴木は、出獄の後、山岡姓に返り、アメリカへ渡り、シアトルに、根據を構へて、爾來、二十幾年の長い間、在米日本人の最高顧問として、いつも日本人の爲めに、アメリカ人を相對に、鬪つて居た。

殊に、排日問題に對する、山岡の働きは、實に目覺ましいものがあつて、在米日本人間の信用は、實に重いものがあつた。

然るに、大正十三年二月廿八日、心臟を疾むで、シアトルに於て、此世を逝つた。其年の五月には、排日案が、上下兩院を通過した。山岡は、地下に、血の涙を絞つて居たらう、と思ふ。

三四

人間の心は、何時どういふ風に、變るか判らない。他人の心が、判らないのみならず、自分の心さへ、容易に判るものでない。

鐵石のやうな、堅い心の人が、いつか知らず、蒟蒻玉の樣に、軟かくなつて、それが爲めに、いろ〳〵の物語を、生み出してゆく事は、昔からの傳說にも、頗る澤山ある。

要するに、人間の心ほど、賴みにならぬものはなく、大概なものは、グルリ〳〵と、引ツくり返つてゆくのだから油斷も隙も、出來たものではない。

照山を、知つて居るものは、未だ多く生きて居るだらう、と思ふが、今から當年の事を顧みて、彼が國事探偵になつたのを、不思議に思ふものは、少なからず在るに違ひない。

輕佻にして、疎狂の傾きはあつたが、政治を談じ、國事を憂へ、慷慨悲憤する時は、白い耳の髮が、銀の針の如くなつて、怒號叱咤、實に昔の書物にある。烈士といふのは、斯うした人物か、と思はせるほどであつた。

それが、何時の間にか、スパイになつて、黨の機密を漏し、同志の內情を、政府側の人へ、通報して居た、といふのであるから、之れを知つた時には、どんなものでも、非常に驚いたのであつた。

靜岡から、歸つて來ると、自由黨本部へ、ちよつと、顏を出した丈けで、それからは、馳の道切りにでも逢つたやうに、ぱツたり、來なくなつてしまつた。

『オイ、照山の奴、どうしたんだらう』

『左樣さな、ちツとも、やつて來ないが、何だか變だぜ』

『僕の聞く所では、靜岡の演說會で、少し不都合が、あつたらしいぞ』

『そんな事位ゐに、、、、めげる奴ぢやないよ』

『併し、念入りの失敗らしいぞ』

『全體、どうしたツてえんだ』

『植木先生に、無禮の振舞があつて、城山先生の取做しで、其場は事ずみになつたが、また跡で、鈴木音高君を捕つて、金を借りに來た、とかいふので、岳南自由黨の間にも、やかましくいつて居るものがある、といふ事だ』

『金錢の貸借位ゐで、彼是れ、いはれるやうな事があつては、もう駄目だな』

『金を借りたり、貰つたりする事は、御互の間にもあるので、別に不思議はないが、彼れのは、少し手段が、惡かつたらしいぜ』

『左樣か』

『何しろ、困つたものだな』

『そのうちに、城山先生が、歸つて見えたら、何とかして、彼れを救つて貰ふ外あるまい』

『まア、それが、一番に良からう』

友人の間には、斯んな話があつて、照山に對する同情は、割合に深く有つたのだが、何分にも本人がやつて、來ないのだから、どうにもならなかつた。

上野の山下に、釜屋といふ牛肉店があつた、昔は、第一流の家であつた。恰で、鰻の寢床見たいな、間口は狹く、奧行の長い造りで、客扱ひの親切と、肉の質が良いのと、此二つが評判になつて、非常に繁昌した。

その軒並びに、有名な雁鍋が在つて、これは、間口が廣く、全體に、大きい家構へで、庭のつくりが、評判であつた。併し、茶人向きに、數寄を凝らしたのではなく、田舍の人の喜びさうな、極めて俗向きのする、大きい石を積上

げて、築山の間から、瀑のやうに水が流れて居たり、便所の四方に、ガラスを張つて在つたり、湯殿の如きも、馬鹿らしく廣いものであつた。

幕末の頃は、屋臺店であつたさうだが、維新の際に、大きく儲けて、斯うした家をつくり、雁鍋を主として、日本料理で賣出したのである。

今から、三十年ほど前に、宮戸座の山川金太郎に、うまく說きつけられて、芝居の資金を、貸出したのが原因になつて、トウ〳〵破産してしまつた。昨今では、其跡が『世界』といふ、牛肉店になつて居る。

釜屋の方は、主人が、なか〳〵利口であつたから、望み人のあるを幸ひ、高い金で、店を賣り渡し、湘南の片瀨へ引込んでしまつた。今の釜屋は、それから三人位は、店主が代つて居るだらう。

照山が、どこから現はれて來たか、三人連れで、此釜屋へ、やつて來て、二階の奥へ陣取り、牛鍋を圍つて、呑みはじめた。

連れの二人は、地方の有志家らしい。ひどく照山を、尊敬して居るが、照山は、例の態度で、

『さア、今夜は、大いに呑まう』

『先生、一つ差上げませう』

『やア、失敬ッ』

しばらくは、献酬に忙しかつたが、そのうちに、三人乍ら、顏が、赤くなつて來て、氣焰も、可なり強くなつた。

『時に、先生、本部の方は、どんな樣子ですかな』

『どんな樣子つて、別に說明のしやうはない。君は、何を聞かう、といふのか』

『相變らず盛んでせうな』

『そりやア、盛んなものだ』

『諸先生は、昨今、どうです』

『大概は、地方へ出て居る』

『例の僞黨撲滅ですか』

『左樣だ』

『先生なぞは、本部に居ても、大威張りで居られるから、さぞ面白いでせうな』

『あんまり、面白くもないさ』

『先生ほどになるのは、並一と通りではないでせうが、せめて、本部へ行つたら、すぐ聲をかけられるやうに、なり度い、と、思つて居ますが、ナカ〳〵容易でありませんよ』

『そりやア、止せ。そんな、つまらん事は、考へぬ方が、よい』

『それでも、同じ黨員である以上、さうならなけりや、つまらんでせう』

『さうなつて、それが、どうなる』

『……』

『全體、今の政黨員なんぞは、みな輕薄な奴等で、とても、昔の志士と、同列には見られない。我輩も、昨今は、ツクヅク厭になつてしまつた』

『へヘー、先生は、そんな事を、思つて居るのですか』

『うむ』

照山は、盃を取つて、ぐツと呑乾した。

今迄の照山と違つて、何か知らぬが、深い不平のあるが如く、本部の事や、先輩の身に話がうつると、苦い顏をし

て、嘲笑もすれば、罵詈もするので、二人は、意外の感に、うたれた。

『今の、先輩面をして居る奴が、實に怪しからぬものばかりで、とても眞面目になつて、對相には出來ぬ、代物だ。殺身成仁などと、うまい事はいつても、監獄へ一つ、はいれないのだから、呆れ返る外はない。さうした吾みは、いつも吾人が引受けて、虚名は、獨り先輩の占有と、いふ譯だ。

どう考へても、馬鹿らしくなる。

斯うして、我輩等が、一切の名利から離れて、生命がけで、働いて居ても、彼等は、何とも思つて居ないのだから、實に驚き入る外はない。吾人は、何も求める所があつて、危ない事をやるのではないが、それにしても、先輩は、もツと溫い情を持つて、吾人に對するのでなければ、捨身になつて、進む覺悟が、吾人にも、起つて來るものでない。

我輩は、もう政治運動を止めやうと、思つて居るのだから、君等も、あまり深入りせぬやうに、したまい』

『實に意外千萬ですな』

『古人も、謂つて居る通り、一將功成萬骨枯ぢや、ハツハ、、、、、、』

臺の上の、コツプを取つて、盃洗の中へ、水をあけて、酒を注いだ。それを取ると、照山は、グイ〳〵呑み乾してしまつた。

二人は、眼を圓くして、この態度を、見つめて居たが、

『先生が、それほどに、おツしやるには、何か特別の事でも、あつたのでせうが、今迄の先生には、多くの信者もある事ですから、その御決心は、猶ほ御熟慮の上に、願ひ度い、と思ふのですが、いかゞなもんでせう』

『君等に、中央の事情は判るまいから、そんな事をいふが、もう厭になつたのだ』

『先輩のうちにも、いろ〳〵の人はありませう。先生が、おツしやるやうな、いかゞはしいものばかりでも、ありま

すまい』

『イヤ、大槻は、左樣だよ』

『へへー、大槻は……へへー』

『まア、そんな事は、どうでもよい。これから、大に飲まう』

話は、それからそれへ、移つてゆくが、照山のいふ所は、多く本部へ對する不平と、先輩に對する、痛罵のみであつた。

『さア、先生、出かけませうか』

『うむ』

『大分醉ひました』

『もツと、飲むだら、よからう』

『もう、とても飲めません。腹も一ぱいに、なりました』

『ハツハ、、、、、、弱音を吐いたな』

『弱音ぢやありません。此通りです』

二人が、德利の列んで居るのを指さした。二十本位は、列んで居る。

『出かけませう』

『うむ、可し、跡から行く』

『一しよに、出かけませう』

『イヤ、我輩は、跡から行く』

『さうですか』
『君等は、どこへ行つて、泊るのか』
『未だ定まつては居りません』
『それでは、芳原へ行け。今から、宿屋なぞへ行くよりか、芳原の方が、好都合だらう。若し、遠いと思つたら、根津へ行け。根津なら、直ぐ其處だ』
『ヘイ、それでは、根津とかへ、いつて見ませう』
『池の端を、どこまでも、眞ツ直ぐに行けば、いやでも、根津へ出る』
『さうですか』
『失敬します』
『うむ』
『此處の勘定は・・・・』
『よろしい。我輩が、引うけるから・・・・』
『それでは、よろしくお願ひ申します』
強て自分が、拂はうともいはず、照山のいふが儘に、二人は、戸外へ出た。

三五

跡に殘つた、照山は、只だ一人、またチビリ〳〵、飲んで居るうちに、何時か倒れて、深い眠りに入つた。
他の客の邪魔にはなるが、相手は、恐い顔の壯士らしい人であるから、遠慮して、其儘にして置いたが、もう十一時に近くなつたので、そツと、傍へ寄つて、しづかに呼びかけた。

『もし、旦那』
二三度、ゆすぶつて見たが、鼾の聲のみ高く、さらに起きさうもなかつた。
階下から、男が、やつて來て、ひどくゆすぶりながら、呼起したので、やうやく眠をさました。
『何だ』
『もう遲くなりまして、火を落しますから、どうか、御勘定を、願ひ度いので・・・・』
『あ、あ、あー』
と、兩手を擴げて、大きい欠伸をして、四邊をキヨロ〳〵、見廻して居る。
『御勘定を願ひ度いのですが・・・・』
『何ツ、勘定をくれ』
『ヘイ』
『勘定は無い』
『えツ、勘定は御座いません』
『うむ、金の持合せがない。先に歸つた奴は、いくらか、持つて居たやうだが、此處の拂ひをさせると、根津へ行けないと、思つて、我輩が、引受けて歸したのだ』
『それは、困りますな』
『明日の午前中に、屆けてやるから安心しろ』
『どちらの御方か、一向に存じませんし、それに、私方では、貸賣は、いたしませんから、只今、頂戴いたしたいのです』
『只今は、無い』

『そんな、無茶を仰しやらずに、ぜひ願ひ度いのですが……』
『金は無い、といふのに、ぜひ拂つてゆけ、といふのは無茶だ。我輩は、無いから無い、といふて居るのだ』
『お住居は、どちらさまで御座いますか』
『自由黨本部だ』
『へッ、自由黨本部の御方で……』
『明日になつたら、本部から、たしかに屆けてやる』
『……』
本人の顏が恐いよりか、自由黨本部といふた、聲の響きは、よほど强かつたらしい。
また、別の番頭が、やつて來て、前の男から、今迄の事を、聞取つた。
『自由黨の御方でも、御勘定を、お貸し申すことは、ちと迷惑いたしますが……』
『我輩は、照山俊三といふものだ。姓名まで名乘つて、本部から屆ける、といふのに、不足をいふ事はあるまい』
『私方では、一向存じませんのですから、御貸し申す事は、困ります』
『直接には知らんでも、我輩の姓名は、社會的に、知つて居る筈だ。況して、自由黨本部のものだ、といふのに、何を疑ぐるのか』
『別に、疑ふの何のといふ譯では、ないのですが、此方の困る事を、申し上げて居りますので……』
『馬鹿ッ』
『ひえッ』
『主人を、出せ』
『主人は、居りません』

『主人が居らぬなら、主人の歸る迄、待つて居る事にする』
下手な事を云へば、すぐ飛びかゝりさうな、容字が見えるので、番頭も、頗る困つた。最前から、此押合を、見て居たのが、少し離れて、陣取つて居た、二人連れの紳士であつた。
そのうちの一人が、女中を呼んで、何かいふと、女中は、番頭の傍へ來て、耳話いた。
番頭は、その紳士の前へ來て、
『何か、御用で御座いますか』
『大分、やかましいやうだが、つまりは、勘定の事だらう』
『ヘイ』
『その勘定は、一時立替へて進ぜるから、彼の人を、宥めて歸したら、どうぢや』
『それは、どうも、恐れ入りますが、手前方では、御勘定さへ頂戴できますれば、宜しいのですが、御の御方が、何とおッしやいますか、ちよッと、伺つてまゐりませう』
と、いつて立ちかゝる、番頭を押へて、
『まア、それには及ぶまい。彼の先生には內所で、我輩が、代償する事にしやう』
『ヘイ』
『つまり、君の方では、勘定が貰へたら、それで可いのだらう』
『ヘイ』
『誰れが拂つても、同じ事ぢやないか』
『ヘイ』
『難有うは存じますが、那アいふ御方で御座いますから、お斷り申して置きませんと、跡の祟りが、恐ろしう御座い

ますから……』

『そんなに、自由黨の壯士は、恐ろしいものか』

『ヘイ、左樣うで……』

『それでは、ちよツと、斷つて來るがよい』

そこで、番頭は、すぐ照山の前へ來た。今迄の紳士のいふて居た事は、照山にも、聞えて居たのだ。

『エー、まことに恐れ入りますが、その何で御座いまして、エー、まことに恐れ入りますが……』

『可し。判つた〳〵、もう聞かんでもよい。彼の紳士が、立替へるといふのだらう』

『へ、へ、さやうで……』

『それは不可、見ず知らずの人に、牛屋の支拂は、させられぬ』

『つまり、どういふ事に、なりますのでせうか』

『明日まで待てば、よいのだ』

『それは、困ります』

『然らば、主人の歸るまで、待つ事にしやう』

『……』

いよ〳〵當惑して、番頭は、考へて居る。例の紳士は、ニコ〳〵笑ひ乍ら、照山の前へ、やつて來た。

『甚だ失禮ですが、此勘定は、我輩に、まかせてくれませんか』

『君は、何だ』

『我輩も、此處へ、友人と來て居て、今迄の容子を、見て居たのですが、誰れの困るのも、同じ事ですから、一時、立替へ度い、と思つて、よけいな事を、申出たのです』

『君は、何だ』

『まア、よいぢやないか、理窟張らずに、まかせて下さい』

『……』

『どうです。よろしいでせう』

『……』

『君の耳へ入れずに、こツそり引受けやう、と思つたのが、君の知る所となつたのを我輩は、甚だ遺憾に思ふが、此に至つては致方がないから、どうか、まかせて下さい』

『よろしい。まかせやう』

『それは、忝けない』

『しかし、君の名は、何といふのかね』

『まア、姓名なんぞ、いはんでもよいでせう』

『イヤ、姓名が判らんでは、まかせられぬ』

『此位ゐの事で、姓名を名乘るのも變なものだが、我輩は、香取といふものです』

『ふむ、香取君、住所は、どこだ』

『上根岸に居るものです』

『名は……』

『姓丈けで、よいでせう』

『上根岸の何番地かね』

『御行の松の近所に來れば、すぐ判ります』

『それぢや、まかせやう』

紳士は喜んで、勘定を拂つた。

照山は、しきりに考へながら、釜屋を出たが、その晩は、芳原へ泊つた。馴染の樓へ行つて、勘定を待たせる事にした。

二三日すると、照山は、金の都合をして、上根岸へ、やつて來た。御行の松の近邊で、聞いて見たら すぐ判つた。その家の前へ來て、軒札を見た時、

『やツ』

と、叫んで、照山は、棒立ちに立ちすくんでしまつた。

軒札には『香取新之助』と、書いてあつたから、照山が驚いたのも、無理はなかつた。

靜岡縣の警部長で、香取新之助の名は、民權派の爲めに どれほど、憎まれて居たものか、判らない。

薩長藩閥の政治家に使はれて、民權派の志士を壓迫したのは、啻に香取一人ではなかつたが、香取ほどの、峻酷な手段を以て、民權派に、壓迫を加へたものは、外になかつた。

それ丈けに、民權派の志士が、香取を憎むだ事は、殆んど仇敵の如くであつた。國會開設の運動時代から、今の自由黨になる迄、その間に於ける、彼の遣口は、實に峻酷を極めた。照山も、その事は、能く知つて居る丈けに、釜屋の二階の事を考へると、何ともいへぬ、苦痛を感じたのである。

それにしても、前夜の如き場合に、不意に飛込んで、那れ丈けの好意を示したのは、果して、どういふ理由であるか、考へれば考るほど、疑はしい事に、なつて來る。

今日は、金の都合も出來たので、厚く禮を述べて、立替へてくれた、勘定の始末をつける氣で、やつて來たのだが、軒札を見たので、その門をくゞるのが、厭になつてしまつた。

三六

政黨の組織は、昔も今も變らず、東京に、本部が在つて、府縣毎に、支部なるものを設け、それに支部長、又は幹事長を置き、本部との聯絡を保ちつゝ、一地方を治めてゆく、といつた遣方で、黨費は、重立ちたるものゝ分擔に、なつて居るが、一人に就いて、いくら出す、といふやうな事ではなく、出すものは決まつて何時でも出して居るが、出さないものは、どこ迄も、知らぬ顏の半兵衞さんを、極めて居る。

それであるから、先きに立つて活動するものは、暇を潰した上に、金も出す、といつた譯で、長くやつて居るうちには、少し位ゐの財産は、費つてしまふ事になる。その代り、郡會へ出るとか、府縣會の椅子につくとか、さうした、公職を得て、その地方には、幅を利かす事が、出來る。

全體、政黨の費用は、長い間の問題で、いろ〳〵の案も考へられるが、どうしても、實行は不能で、今に至る迄、黨員から、黨費を募る事は、先づ出來ないと、なつて居る。

代議士といふものが、出るやうになつてから、その負擔を、一人について、幾何と定め、本部の經常費丈けは、それで、多少の埋合せは、つくやうになつた。けれども、出す事を嫌ふ、代議士が多くて、容易に集まらないので、昨今は、議會召集の際、彼等の受取る歲費のうちから、天切りにして、差引くことにした。それでも、先廻りして、受取つてしまふ奴もあり、本部の事務員が、美事に出し拔かれて、ロアングリの場合もある。

彼等が、滿足に出した所で、どうせ、足りる筈はなく、跡は、重立ちたる、役員が出して、黨首になつて、居るものが、纏まつた金を出して、その始末をつける、といつた風で、黨首の負擔は、なか〳〵に、少なからぬ額である。

イギリスの政黨も、これには苦んで、いろ〳〵工夫して見た末が、成金の連中に、爵を與へる事にして、その報酬を取り、それから得た金を、黨費に充てゝ居る、といふ事だ。

えらい奴になると、一人で四十萬弗とか、或は五十萬弗とかいふ、大金を出すものもあるさうだが、そこは、さすがに、イギリスである。

法外な金儲けをして、生活に不自由はなく、贅澤といふ贅澤は仕放題、此上の慾には、爵位でも貰つて、貴族の扱ひを、うけ度い、といふ連中だから、思ひ切つた、大金も、出す事にならう。

爵位も、斯うして、貰へる事になれば、洵につまらないものではあるが、それでも、貰ふ本人になれば、第三者が視るほど、卑しいものでもない、と思つてか、大金を投出すものが、あるのだから妙だ。

それを、怪しからぬ事として、最近に、頭を擡げた、勞働黨の內閣の時、黨費は、黨員の負擔にすべし、とあつて、少しばかりの黨費を、徵集する事にした。一人の割宛は少なくとも、人數が多いから、本當に集まつてくれれば、莫大な金に、なる譯だが、黨員の多くは、兎角に、出し澁るので、勞働黨も、矢張り、此一事には、頗る困つて居る、と、傳へられて居る。

授爵に依つて、得る金を、勞働黨の人々が、議會に於て、さかんに攻擊して、之れを排斥した時、ロイド・ヂョーヂは、

『お前達は、そんな事をいふて、今は威張つて居るが、そのうちに、お前達の困る時が、必ず來るぞ』

と、冷笑し去つた、といふ事も、聞いて居るが、今では、ロイド・ヂョーヂが、云ふた通りになつて、勞働黨の幹部は、ひどく困つて居るなぞは、ちよツと、面白い話である。

アメリカは何でも現金主義だ、大きい金持が、不斷に金を出して、政黨を、援けて居るから、いよ／＼自分等にかかる問題があれば、たゞ一言で、政黨が動く。デモクラツト黨でも、レパブリカン黨でも、みな大金持の後援者を、持つて居る。大統領に當選するには、少なくも、百五十萬弗ぐらゐの、金が要るが、それは皆な、後援者があつて、惜し氣もなく、支出してくれるのだから、實に豪勢なものだ。

併し、さうした事に依つて、政黨の資金を得たり、または、大統領になつたりする事が、果して、善いか惡いかは大に考慮す可き事である、と思ふ。

日本の政黨にしても、昨今の所では、三菱會社から、金が出て、加藤高明は、その金に依つて、憲政會を、率ゐて居たのだ。總選擧の時には、三百萬圓以上の金が、出て居る事は、もはや爭ふ餘地のないほど、多くの人に信じられて居る、事情である。

原敬が、滿鐵其他の問題について、各方面の非難もうけたが、實は、止むを得ず、默過して居たのであつて、之れを不可といへば、自分の懷裡から、纏まつた金を出さねばならず、それは、至難しい事であるから、せめては、黨員の金儲け位ゐ、知らぬ顏で、見遁してやらねば、人が集まつて來ないから、那アいふ狀態に、なつてしまつたのであらう。

昨今の政友會と民政黨、それが、どういふ風になつて居るか、よく知らぬが、最近の總選擧には、民政黨が、一千萬圓は、出して居ると思ふ。政友會は、その半額未滿と見て、勝敗の結果を、比較した時、ははアと、首肯かれる事があらう。無產派の候補者も、それ相當に費つて居る。演說會の費用丈けで、那の騷ぎは出來ぬ。

いづれにしても、これから先きの政黨は、ます／＼黨費の事では、苦む事であらうし、當勢の維持、又は擴張をするにも、大金の要る事は、無論である。その力の强いものが、優勝の位地を、得る事になるのだから、その間には汚ない問題は、續々起つて來るに、違ひない。

本部の黨費も、可成りに、大きい額に上るが、地方の支部も、黨費は、相當に要かる。けれども、本部と違つて、支部の方は、どうか斯うか、重立ちたるものゝ財布から、吐き出して、始末は、ついて居るのだ。

昨今のやうに、衆議院が、未だ無かつた時代には、選擧といふても、郡會か村會、大きいといつた所で、府縣會の事であるから、さう大したものでは、なかつた。

けれども、その選擧費用も、昔と今では、餘りに相異が、ありすぎる。府縣會議員位ゐで、一萬圓も、二萬圓も使ふ、といふのは、近年の事であつて、昔は、五千圓も使ふと、人が眼をむいて、驚いたものだ。大概は、二千圓位で仕上げたのであるからそれ以上は、噂さの種に、殘るのであつた。

それは、どういふ事情から、斯う違つて來たか、といふに、通貨の値打も、違つて來たし、物價の高くなつた爲めもあるが、その外の事情としては、平生に、働いて居ないものが俄に候補として、立つ事も、費用の多く要かる、一原因であつて、村會議員から、叩き上げて、群會へ出る。それから、府縣會、といつたやうに、順序を逐ふて來るのでなく、政黨には、加入して居ても、何等の働きも示さず、また、政黨に加入もして居ない、といつたやうな人が、急に立つて、候補者になるから、どうしても、金が要かるのである。

昔の政黨員は、左樣した人が立つ、といふても、ナカ〳〵承知しなかつたが、昨今では、喜び迎へて、大金を使はせる事に、努める傾きがあり、選擧の弊も、ひどくなつて來た。

金さへ使へば、何時でも議員になれるといふのが、今では、一般の人の考へで、昔のやうに、平生から働いて居らねばなれぬ、といふ事は、全く無いのであるから、政黨員の質も惡くなれば、選擧民の心も、汚なくなるばかりである。

平生から、支部の費用も、多く負擔し、何事に限らず、問題が起れば、すぐ駈けつけて、取り捌くやうに、して居るから、その人に對する、信用も厚く、議員にでもならう、とすれば、多く費用を使はずに、押上げてしまふ、といふやうに、なつて居たのである。

斯うした、人達に依つて、地方の支部は、維持されて居たのであるから、割合に、黨費の上に、差閊へは、なかつた。

その代りに、先立つて働くものゝ財産は、三年か五年で、グラ〳〵はじめ、議員の椅子にでも、つく時分は、もう

始末の出來ぬほどに傷むで、いづれも、貧乏有志家として、生涯を送るやうに、なつてしまふのである。

二一七

上毛の自由黨には、兩個の長老があつた。その一個は、長阪八郎といふて、政黨員としては、餘りに高潔すぎる、といはれた人であつた。他の一個は、宮部襲と稱して、奇才縱横、座談に、妙を得て居て、人を說くに、不思議の魔力を、持つて居る。

兩個は、共に舊高崎藩士であつたが、宮部の方は、疾く政府に入つて、役人生活も、やつたし、多少の貯畜もあつた、長阪に比べると、幾分か、金の融通もついたので、よく靑年の世話もしたし、黨の方へも、相當に、金を出した長阪は、宮部のやうに、派手な所はなかつたが、どことなく長者の風があつて、衆人の尊敬をうけ、首領格の人であつた。宮部は、寧ろ帷幄のうちにあつて、仕事をする參謀長格の人、といふ可く、兩人の間には、それ丈けの、相異があつた。

伊賀我何人、深井卓爾、齋藤壬生雄、小勝俊吉、山口重脩、淸水永三郎、森六郎、新井毫、新井愧三郎等の人々が先達になつて有信社なるものを、高崎に設けて、同志の糾合に努めた。

此外に、木呂子退藏といふ人も居たが、是等の人と離れて、別に一派を爲して居た。木呂子の勢力は、館林の方面へ延びて、高崎の方には、餘り力を入れて居なかつた。

初め、國會開設運動の頃から、其名を知られて居たのは、齋藤、長阪、木呂子、新井毫の四人であつた。宮部は、自由黨を結成する時に、やうやく名を現はして、それから、上毛の自由黨中、無くてはならぬ人物に、なつてしまつた。

新井毫は、夙に慶應義塾に學むで、西洋の書物もよく、讀めたし、それに、頭腦も良く、辯舌にも、長じて居た。

板垣退助と、中島信行が、高崎へ乗込んで、大信寺に、演說會を、開いた時、新井の演說は、非常に感動を與へて、板垣中島の兩先輩よりも、却つて評判が、よい位であつた。

歳は、やうやく丁年に達したばかりで、頗る好男子の新井が、雄辯滔々と、自由の大義を論じ來つた時は、滿場、水を打つた如く、いづれも息を呑んで、熱心に傾聽した、といふ事が傳へられた。

有信社は、此演說が因をなして、存外に早く、組織も成り、同志の集まるものも多く、やがて、上毛自由黨の基礎は、之れが爲めに、堅いものになつた。

照山事件の主人公であるから、宮部の事は、少しく立入つて、述べて置く、必要がある。先年の震災には、日暮里の浪宅に、病臥して居たが、グラ／＼と、やつて來て、家人が、立騷ぐのを見て、

『お前等は、何を騷ぐ、地震ぢやないか』

といつて、笑つて居た、といふ事であるが、それから、十日ほど經つと、眠るが如く、大往生を遂げた。

大正十一年に、著者が、アメリカから歸朝した、と聞いて、宮部は、斯ういふ詩を、寄せて來た。

鵬翼東翔桑港灣　太平洋岸幾州間
風察俗君長處　烱眼高於綠鬼山

明治九年の頃は、熊本の警察署に、勤めて居たが、古莊嘉門や、佐々友房とは、最も深く交つて居た。

當時の熊本は、新舊思想の衝突があつて、士族のうちにも、二つの派があり、一つは紫溟會と稱し、もう一つは、相愛社と呼んで、それ／＼に、主張を異にし、立場を固守して、ひどく爭つて居た。

紫溟會には、保守的の人が多く、排外思想の凝り固まりで、電線の下を、通る時は、軍扇を、頭の上にかざしてゆく、といつた調子で、マッチを使はず、燧石を用ゐて居たほどである。

相愛社の方は、それに比べると、非常に進歩して居て、すでに自由民權の說も唱へれば、國會開設の運動にも、參加して居た。

古莊や佐々は、紫溟會に屬して居た人で、佐々よりは、古莊の方が、ずつと先輩であつた。今の安達謙藏は、佐々の子分であつた。

宮部の頭腦は、割合に進んで居たけれど、元來が、漢學仕込みであつたから、紫溟會の人に、知己が多く、殊に、古莊佐々の兩人とは、深い交りがあつて。

縣令の安岡良亮が頑固士族を相手に、思ひ切つて、新しい縣政を施かう、として、舊式のすべてを、ぶち毀しに掛かつた。それが、縣廳側と、士族連の衝突の始めで、遂に恐るべき、鎭臺襲擊の騷動とはなつたのである。

極端な、排外思想を、有つて居る、士族の子供に對して、新らしい小學教育の强制をした。武士の魂は、腰の兩刀に在る、と思つて居るものへ、廢刀を迫つた。電線の下に、軍扇かざして、駈け拔ける人に對して、チョン髷を切れ、といふ訓示を出した。頑固士族の堪忍袋は、どうしても、破裂せずには居なかつた。

淸正公以來の銀杏城には、熊本鎭臺の名に依つて、洋裝の兵士が、出入する。而かも、それ等の兵士には、昔から輕視して居た、士百姓の子弟が多く、町人も、混つて居るのだから、怪しからぬ事態と、思つて居ると、その耳元には、夷人兵の喇叭の音が、響いて來るのだ。

太田黑伴雄、上野堅吾、加藤齋堅の三人が、その首魁となつて、四百餘名の士族は、それ／＼甲冑に、身を固め、昔ながらの武器を執つて、斬込み戰を試みたのである。

夜は寒くなりまさるなり唐衣
討つに心のいそがるゝ哉

是れは、太田黑が、討入りの夜、長い槍のけら首に、結びつけた、短册へ、認めし歌である。

先づ、鎮臺の司令長官、陸軍少將種田政明は、士族の不意討に、重傷を負ふて、斃れた。

ダンナハイケナイワタシハテキズ

種田の愛妾が、東京の實家へうつた、電報の文句で、これは、有名な話である。

安岡縣令も、無慘の死を遂げた。與倉中佐が、保管して居た、聯隊旗も、奪はれてしまつた。參謀の兒玉源太郎は空溝の中にかくれて、一夜を明かした。

明治九年の九月廿四日、その一夜は、不安のうちに、明け放れた。鎮臺兵は、夜明けと共に辛うじて、盛返し僅に士族を、討拂ふ事を得た。

斯うした、騷動の起る前、古莊は、こつそり宮部を訪ねて、

『大い事が、始まるぞ』

『何ぢや』

『何でもよいから、はやく立去つたらよからう』

『左樣か』

豫て士族のうちに、不穩の企てのある事は、宮部も、よく知つて居たので、古莊から、斯ういはれる、と、さてはいよ〳〵、はじめるな、と思つた。

自分は、政府の役人として、殊に警察署長を、勤めて居るのだが、實は、政府に不滿があつて、士族の議論には、幾分の同意もして居たのだから、從つて、その祕密も、相當に知つて居たのだ。

古莊が歸ると、すぐに支度をして、ぶらりと、熊本を放れて、途中から、辭表を送り、その儘に、東京へ、歸つて來た。

その跡で、神風連の騷動は起つた。

昔の警部には、斯ういふ人もあつたのだから、實に愉快だ。

職責の上から論ずれば、どう考へても、不都合の行動とはいへる、それでも、一個の警部にも、此位ゐの我儘を働いて、『政府を驚かしてやれ』といつた調子の、態度に出る丈は、昨今の役人に比べて勇氣はあつた、として、視る可きである。

三八

その後、高崎へ、歸つて居ると、前橋の師範學校長に、推薦するものがあつて、自分も進んで、其任に就いた。

前に述べた通り、自分の監視して居る、熊本の市街に、恐ろしい騷ぎの起る事を、知り乍ら、不意に、任地を立退いて、途中から、辭表を送り附けた、といふ程に、物騷な警部が、學校の監督を、爲るのだから、頗る危險千萬だ。

只だ觀れば、物やさしい、一個の紳士で、辭禮も、極めて正しい人であるから、此位ゐな學校長はないと、誰れも思つて居たらうが、その實、危險思想の持主で、政府の大官を、河童の屁ほどにも、思つて居ないのみならず、薩長藩閥には、極度に、反感を持つて居る、校長さんで、之れに指導される生徒は、どういふ事になるか、考へて見れば、甚だ面白い事である。

宮部は、常に好んで、俠客と交際したので、博徒の親分は、多く其邸宅へ、出入して居た。學校長の邸宅へ、博徒の親分が、足しげく出入するなぞは、とても、昨今の人に、解し得ぬ事であらう。

『校長、縣令さんから、御使が來ました』

と、いつて、差出した書面、それを披いて見ると、

『至急御相談したい事があるから、すぐ來てもらひ度い』

と、書いてあつた。

すぐに支度して、縣廳へ出かけた。縣令の外に、警部長も居て、何となく不安の容子をして居る。

『やア、宮部君』

斯ういつて、縣令は、宮部に、椅子を與へた。宮部は、ちよつと會釋をして、警部長の方へも、輕く頭を下げた。

『意外の事が起つたのぢや。今ま長野縣からも交渉があつて、いろ〳〵相談の末、是れは、君の力でなければ、とても駄目だらう、といふので、實は、迎ひを出した譯ぢやがね』

『ハ、ア、どういふ事ですか』

『大前田の一家と稱する、博徒の連中が、信州の博徒と、何事か爭ひを起して、追分ケ原で、大きい喧嘩をする、とかいつて、長野縣廳の方でも、種々、手は盡して見たが、どうも治まりさうもないので、せめて、大前田一家のものを、くり出させぬやうに、心配してくれ、といふ事であつたから、警部長にも、相談して見たが、これは、君の外に彼等を抑へつけるものはなからう、といふ說があつて、とに角、君に相談して見やう、となつたのであるが、どうぢや、君の力で、どうにかならぬものか』

『要が、博徒の爭ひを、それほど御心配なさるには、及びますまい』

『ナカ〳〵さうでない。彼等の行る事は、理窟一片では、駄目なのぢやから、正面から抑へにかゝれば、猶ほ不可といふ議論があつて、其處で、君を煩はす事になつたのぢやよ』

『御引受けいたしてもよいが、とに角、一と通りの事情を、しらべて見ませう』

『その點は、警部長が、よく知つて居られるから、訊いて貰ひ度い』

『それは、駄目です』

『えツ……駄目とは』

『警察のものが、知てつ居る事は、聞かずとも宜しいでせう』

縣令は、此の一言に、少し驚いたが、それよりは、警部長の眼が、けはしく光つた。

『博徒の內幕は、役所のテーブルに、寄りかゝつて居たのでは、本當に解るものでない。彼等の懷裡へ、飛込んで見なければ、眞の急所を摑むことは出來ぬ。探偵の報告のみで、筋を辿つて行つたら、とんでもない、間違ひを惹き起すものです。殊に、大きい喧嘩の調停は、なか〳〵むづかしいものですから、我輩が、自ら彼等の渦中へ飛込んで喧嘩の眞相を 究めてからでないと、ちよツと、手の出しやうもないのですからな』

それを聞くと、警部長は、少し聲をはげまして、宮部を詰るのであつた。

『君は、警察側の報告は信用せぬ、といはれるのですか』

『まア、然うです』

『少しも、聞かぬうちから……』

『聞かずとも、判つて居ます』

『どう判つて居るのですか』

『どうも、本當の事は、判つて居るまいと……』

『こりやア、怪しからぬ』

と、ヂリ〳〵と、椅子を寄せる。宮部は、輕く抑へるやうにして、

『まア、お待ちなさい』

『何ですか』

『君は、彼等と、逢つて見たのですか』

『イヤ……』

『逢つて見ないのでせう』

『……』

『それだから駄目だ、といふのです。巡査や探偵に、何が判るものですか』

『……』

『況して、君は、自身に調べてないのでせう。そんな事で、彼等の内幕や心中は、決して判るものでない。暫く忍んで、我輩のする所を、見て居て下さい』

警部長は、猶ほ何か云はう、とするのを、縣令は、しづかに制して、

『まア、待ちたまへ。宮部君のいふ所にも一理あるから、兎に角、任して見るがよいではないか』

『あなたが、さう仰しやるなら、それでも宜しいです』

縣令の一言で、警部長が、折れて出たから、縣令は、宮部に向つて、

『それでは、萬事頼みます』

『明日までに、御報告いたしませう』

『しツかり、頼む』

『引受けました』

何か、心に期する所のあるらしい、宮部は、縣廳を出て、自分の邸宅へも歸らず、どこかへ出かけた。

翌日になると、宮部は、縣廳へ、やつて來て、前日の通り、縣令と警部長の前で、自分の聞いて來た事を、一と通り報告したが、警部長の手許へ、集まつて來た報告とは、全然、違つて居たので、之れには、流石の警部長も驚いた。縣令は、すつかり満足して、

『それで事情は、よく判つたが、併し、之れを、どういふ風に取扱ふか、その見込みを聞いて見たい』

『要するに、縄張りの爭ひで、事は、頗る面倒ですが、何とか折合はつけて、和解はさせますけれど、我輩に、一切を御任せ下さるか』

『宜しい、一任しやう』

『明治の今日になつて、博徒が、縄張りの爭ひをする、といふのは、奇怪千萬の事ではあるが、今は、之れを論ずるの場合でない。要するに、大きい喧嘩を、させないやうにするのが、第一であらう、と存じますから、臨機應變の處置を取つて、然る可く、治めてしまひますが、法律を、眞ツ向にふりかざしての取扱ひではないから、その點は豫め御呑込み置き下さい』

『可し、承知いたした』

是れで、相談は決まつた。

翌日から、宮部は、懸命に奔走した。先づ大前田一家のものは、宮部に、萬事をまかせる、となつたので、それから、信州へ乗込んで、相手方を、諭す事になつた。彼等の間に、行はれて居る、義理人情を主として、話を進めるのであるから、よく理解して、宮部の取扱ひに一任する、となつた。

其處で、手打ちの式もすむでから、喧嘩の場所に選まれた、追分ケ原に於て、上州と信州の博徒を集めて、三日間といふもの、野田博奕をやらせ、宮部は、テラ箱のそばに控へて、その博奕も、無事にすませた。

長野の縣令も、群馬の縣令も、此時ばかりは知らぬ顔をして居た。宮部の才氣と膽力、それから、彼等が、宮部を信ずる事の深いのに、誰れも驚いた。

その遣方が、あまりに飛放れて居たので、いつか問題になつた。喧嘩は、無事に治めても、學校の校長が、テラ箱の番をして、博奕の取締りは、常軌を、逸して居る、といふ議論が起つた。宮部は、之れを聞くと、すぐ辭表を出して、高崎へ歸つてしまつた。